わいふ　女の言いたい放題誌●205

WIFE

特集●ある日曜日・夫婦の会話　時尾松子　榛葉千津子　ほか

投稿●医者と患者とのあいだ　**勝浦恵美子**

投稿●老人たちは私の恋人　**小林智枝**

職場は多面体●「書く仕事」甘いもんじゃあござりゃせんぜー　**宮川秀子**

逐次刊行物
昭 62.4.14 和
立婦人教育会館
情報図書室

同時代社　東京都千代田区西神田2-7-6
☎03-261-3149　東京8-60777

女たちが綴る昭和

婦人雑誌からみた一九三〇年代

私たちの歴史を綴る会　四六判　一六〇〇円

一触即発の時代に社会の窓口である婦人雑誌の役割は民主主義の否定、言論の自由の軽視、脱政治の浸透であった。当時の婦人倶楽部・主婦の友・婦人公論三誌を徹底分析。

千葉敦子のななめ読み日記

千葉敦子著　四六判　九八〇円

〝必要な情報だけがほしい〟というあなたへ日本と世界各国の間をかける女性ジャーナリストが教える体験的情報処理術。

最新刊

コーヒータイムの哲学塾

版の会編　四六判　一三〇〇円

古在由重氏を囲む八年間の読書会の記録。特別ゲスト加藤周一氏の対談、参加者選「命ある言葉」集等、肩のこらない人生論。

農文協　東京都港区赤坂7-6-1
電話03(585)1141(代)
●内容見本呈

★不安はあるが拒否できない、どうする？

食品添加物とつきあう法

増尾清著
元東京都消費者センター試験研究室長

子どものお菓子からパック入りのおかずまで、食品添加物だらけの不安な食卓。添加物表示の読み方、毒消し法、毒に負けない健康料理の作り方、添加物の不安度便覧など、口にしないわけにはいかない添加物から健康を守る工夫を満載。　一一〇〇円〒250

★料理上手は台所上手

台所ともだち

村上昭子著　一三〇〇円〒250

★椎名誠さんがすすめる手づくり料理百科（岩波書店「図書」）

農家の日常料理

柏村サタ子他著　一二〇〇円〒250

話題の書

★季節の素材を生かす知恵と技を記録

日本の食生活全集　全50巻

各都道府県別編集　既刊13巻　4月刊㉔三重県

「本全集収録の〝聞き書〟料理は、何千年のくらしの積み重ねの中で、女から女へと伝承され、一代一代工夫されてきた味である。日本の食事の原点を、私達の台所で手軽に作ってみる楽しさもある。」　各2800円〒300

「WIFE」前号より

●詳細内容見本進呈＝「食生活WIFE係」へ

いいたい放題　したい放題
書きたい放題　よみたい放題の
投稿誌が　わいふです
人間　ほんとにやりたいことは　やれるもの
ウジウジ・イライラふり捨てて
思いっきりやれば　気がはれる
いろんな人のいろんな時の
いろんな心を材料にして
二か月に一回　わいふが出来あがるのです
仕上げに適量の〝ユーモア〟と
〝思いやり〟のスパイスを！
ピリッとくるか　まろやかになるか
それはあなたの〝うで〟次第！

WIFE 205

わいふ目次

表紙イラスト　カステラネンコ

忙中閑あり2
円より子さんの囲碁遊び　4
写真　佐々木恵子　文　原田静枝

「いってらっしゃい」といえる日　9
小笠原久美子

特集・ある日曜日・夫婦の会話
夫よ、夢を楽しみたまえ　18
時尾松子

日帰りで里がえり　20
榛葉千津子

会話のないわが家　23
田代美恵子

たわいないおしゃべりで一日が　25
匿名

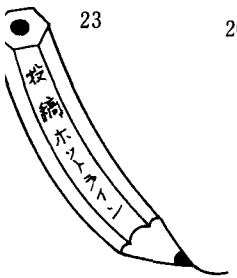
家庭内離婚の二人は　27
匿名

夫が寝てから命の洗濯　28
法村祐子

私きくひと　彼レクるひと　30
大沢陽子

狂育ニッポンどこへ行く　37★
川西美和子・山口純子・匿名

エッセイスト・クラブ　44★
田久保美知子・山田恵子・清水喜代子
日下恵子・家守恭子・小林千歳・足立キヌ



田井亮子・堀切潤子・万谷陽子　写真　佐々木恵子　レイアウト　望月浩子

オットどっこい 60★
中松ミナ子・河野民枝

医者と患者とのあいだ 62
勝浦恵美子

職場は多面体 69★
松本弘子・宮川秀子・日下部直子・由美あき子

マジの発言 76★
広瀬サカヱ・近藤美子・片山節

連載2
八路軍とともに 80
法村香音子

対話のページ 96★
荻田一枝・岡井美代子

老人たちは私の恋人 98
小林智枝

マスコミむしる 104★
太田知子・新井祥子・たかのようこ

生きてます活字人間 108★
山田幸子・田中喜美子・山岸和子

ファミリー・イン・ブルー 113★
黒崎和子・山本陽子・井上恵子
匿　名・赤毛のアン・ふなひさこ

没になった人たちにも誠実に 124
緑千恵子

わいわいガヤガヤ 126★
日比野都・荒井明子・窪田潤子・匿　名
匿　名・小江鐘子・堀場美代子・野口麗子
加藤君子・吉田ミヨ子・内木場周子・中野桂子
匿　名・荒井照子・酒井智恵子

サークルだより 95
情報コーナー 110
ほん 122
特集テーマ原稿募集 141
投稿規定 142
編集だより 144

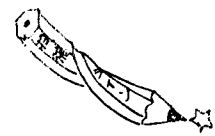


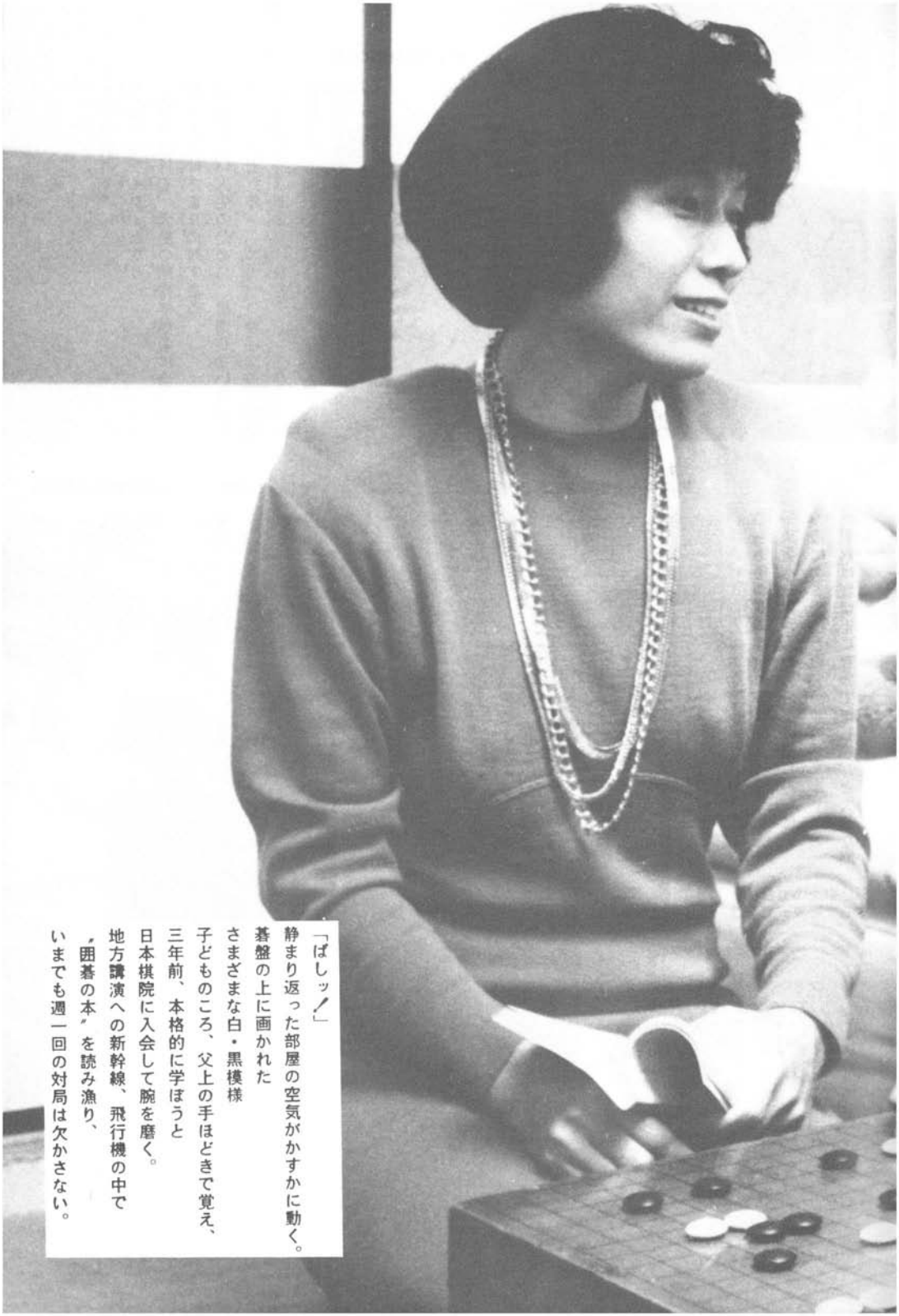
イラスト　大場美和子・岡田正子・小倉真樹子・カステラネンコ・片岡悦子・栗田佐織・早乙女光子

忙中閑あり②

私のホビー

―円（まどか）より子さんの囲碁遊び―

写　真・佐々木恵子
文　・原田　静枝



「ぱしッ！」
静まり返った部屋の空気がかすかに動く。
碁盤の上に画かれた
さまざまな白・黒模様
子どものころ、父上の手ほどきで覚え、
三年前、本格的に学ぼうと
日本棋院に入会して腕を磨く。
地方講演への新幹線、飛行機の中で
〝囲碁の本〟を読み漁り、
いまでも週一回の対局は欠かさない。

◀打ち合わせに大忙し

三十を過ぎて
フリーのライターとなり、
北欧の取材で、大勢の離婚体験者に会った。
日本女性はあまりに暗すぎる、
後悔しない人生のために、後悔しない離婚を
と、一九七九年、「ニコニコ離婚講座」を始
めたことは、あまりに有名。
体験者たちの機関誌「はんど・いん・はんど」
も七〇号を越え、離婚女性たちの心の支えに
なっている。

▼ スキーも趣味を越える腕前です

▼ほっと母親にかえる保育園の送り迎え

自らもその試練を乗り越え、
一人生きる円さんの〝最上の楽しみ〟は
四歳になる愛娘との五目並べ。
いずれは女棋士に育ってほしい、と大きな期

碁はもちろん，将棋もパチンコも得意なの

待をかけている。
講演、執筆、そして育児、
多忙な日々のくらしの中で、
囲碁は、果てしなく深い世界。
時を忘れてさまよえる、と円さんは
いま、その素晴らしさに魅せられている。

毎月最後の土曜日開かれる離婚講座で話す▶

ワイフよ

ワープロを10本指で打ってみな。

ワカラネエ野郎の頭をたたくように。
スカットするぜ。

富永直久の

ワープロは10本指で！

すぐ打てる、
ワープロ・タイピング独習本。
どんな機種でもドンとこい。

●日本実業出版社●　1,000円

月刊 ゆたかなくらし

定価 500円(送料50円)
年間購読料 6,000円(送料600円)
御購読は直接当会へ御申込み下さい。
郵便振替・東京9－162684

すいせんします

原田　正二
鷲谷　善教
木下　恵介
中島　紀恵子
山田　洋次
浦辺　史
早乙女　勝元
真田　是
前田　甲子郎
長　宏
寿岳　章子
小川　政亮

＝国民的課題としての老後を考える特集＝

4月号特集　現場最前線
—老人ホーム・病院の労働実態—
5月号特集　今，なぜ資格制度か（予定）
6月号特集　公害ですすむ高齢者の健康破壊(予定)

＝確かな情報と役に立つ連載＝

人生の詩……増岡　敏和
味はいかが……井出美保子
居ごこち住みごこち……望月　彬也
情報コーナー・くすりの話・老問研のひろば

●お知らせ●
第11回老人福祉問題全国研究集会
7月3日(金)～5日(日)　於 神戸市
講演　一番ヶ瀬康子・木津川　計
シンポジウム・分科会　他
詳しくは当会へ「開催要綱」希望と申しこんで下さい。

編集・発行　全国老人福祉問題研究会　〒177 東京都練馬区南大泉4-16-37

「いってらっしゃい」といえる日

東京都杉並区　小笠原久美子（35歳）

失業者夫婦のスケジュール

「年内は仕事をしないで家にいる」と夫が宣言したのは昨年の十月。そうして彼はそのとおり十一月、十二月と二か月間失業者となった。私と夫は六年間営んだ小さな喫茶店を、新しい契約では家賃や保証金が値上がりすることと、不景気の波に押されてこれ以上続けても先の見通しは暗いのではないかということを理由に、やむなくたたんだ。ふたりでやっていた商売なので、店をやめたということで、夫ばかりでなく私も失業者になったのである。

それまで年中無休で働いてきた私たちにとって、店をやめたばかりの十一月のはじめのころは、それこそカゴの外に出された鳥のようで、何かこうフワフワと飛んでいきたい、飛んでいける、自由を得たんだという気分だった。失業して収入がなくなるというのにず

い分と楽天的なようだが、六年間新年は元旦から暮れは大みそかまで、まさに一日も休まずに仕事に精を出してきた夫を見ていた私は、病気で倒れたわけじゃなし、仕事がいやになって放り投げたわけじゃなし、いいじゃないの二か月ぐらい休養したって、バチなんか当たりゃしないという気持ちだった。

ただ、いくら繁盛しなかったとはいえ、日銭はあったわけで、その中からの細々の蓄えは微々たるものだから、生活は前にもまして切りつめなければならなかった。

さて、私達失業者夫婦の一日は、まず朝のジョギングから始まった。小学六年と三年の息子を学校に送り出して、ひととおりの掃除をすませると、ジョギングウェアに着替えて近所の公園に行く。日に日に冷たくなる北風の中を私たちは仲良く並んで走る。毎朝出会う犬の散歩の人、コーン、コーンと軽い音を響かせるゲートボールクラブの老人たち。健康のためかひとり黙々と歩きつづけるおじいさん、おばあさん……。そうした中を私たちは汗で背中がひんやりとするまで走る。ジョギングから帰ると夫はシャワーを浴び、私は着替えて自転車を出す。

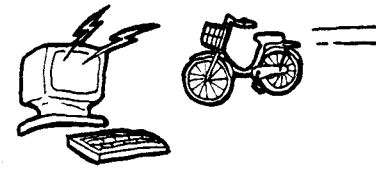
私は店をやめる少し前からワープロの学校に通って

いて、資格試験を受けるためにもう少し頑張らなければならなかった。昼ごろ学校から戻ると、夫はたいていテレビを見ているか、あちこちこまごまとしたところをかたづけている。

夫は家にいるようになってから実によく家事をサポートしてくれた。ほかにとりたててすることもないのだから、当たり前といってしまえばそれまでだが、何しろ彼は、商売をしていたときはもちろん、それ以前にサラリーマンだったころも「めんどうくさがりシール」を貼ってしまいたいと思うぐらい、何もしない人だった。

それが何をどう思ったか、ふとんの上げ下げから掃除、食事の準備、何よりも驚いたのは、二男のバースデーケーキやクリスマスケーキを、ひとりで作ってしまったことである。だから、本質的にはマメで、ちょっとしたかたづけなど苦にもならなかったのかもしれない。

テレビのほうは、映画好きの友人からビデオテープを大量に借りこんで、まるで今まで見られなかった分を取り戻すかのように、こちらのときはもう、どっかりとテレビの前に腰を据えて見入っている。それからありあわせの昼ごはん。何しろ私たちは無収入で、し



かも好き好んで失業者となっているのだから、ぜいたくなど言わない。口に入ればよし、腹がふくれりゃよしである。

午後は天気がよければ外へ出る。毎日商売に追われて疎遠になっていた友人のところや、ひなたぼっこがてらの散歩や、自転車を走らせてのサイクリング。

私たちは肩を並べながらたわいないことで笑い合ったり、結局は失敗のようなかたちになってしまった商売のことや、大きくなるさかりの子供たちをかかえて生活を立てていかなければならない先のことなどを話し合った。

そんなとき私は、このまま時間が止まってくれたら、と何度か思った。朝のジョギングで少し前を走る夫の背中を見るときも、そう思った。

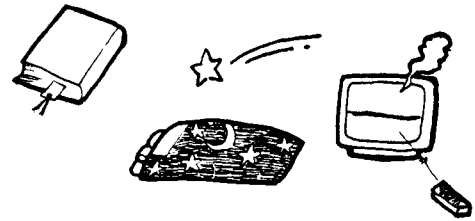
私たちはいつも一緒にいたのに、もうずい分と長いことお互いを見ることを忘れていた気がする。忙しさに追われて、一日の会話が簡単で事務的な商売のことだけという日もあった。だからこそいま、夫とふたりでのんびりしているいま、家賃も支払いも売り上げも景気も不景気も考えなくていいいま、時間が止まってくれたらと思った。

夕方は、子供たちが学校から戻るころには家にいる。何といっても六年間年中無休の最大の犠牲者（？）はふたりの息子である。長男は現在六年だから小学校に上がる前から、二男は三年だから二歳のころから、親である夫と私は、毎日休むことなく店と住居を行ったり来たりで、充分に目をかけてやれなかった。

幸い私の両親が隣に住んでいるので、それほど寂しい思いはなかっただろうが、それでもやはり親でなければということもあっただろうし、ずい分がまんを強いてきたのではないかと思う。

子供たちが学校から帰ると夫は彼らの勉強を見てやる。夫が家にいた二か月間の中で、私が最も感心したのはこれである。私は、勉強しなさいと言うことはあっても見てやったことはない。とくに長男の算数などは見てやりたくとも情けないことによくわからないのである。教科書をちょっとのぞいただけでも頭痛をおこす私とちがって、夫は根気強く丹念にわかるまで算数苦手の長男に教えてやる。

それから夕ごはん。おかずができると夫は台所にやってくる。せまい台所にふたりで立ち、彼は茶わんにごはんを盛る。はじめのころはどの柄が誰のものかまったくわからなかった夫も、それが毎日となれば盛りつけ方もうまくなる。そうして家族四人がそろってのの



食事が始まる。

私と子供たちだけだったころはいつもテレビがつけてあって、見ながら食べる、食べながら見ることに私はあまりうるさく言わなかった。しかし夫は必ずテレビを消させる。食事中の行儀を注意し、「いただきます」「ごちそうさま」をきちんと言わせる。家族が揃うということは子供にとってこんなにも嬉しいことだったのかと思うほど、子供たちの食欲は旺盛だった。長男も二男もわれ先にとその日のできごとをしゃべる。テーブルに並べられたものがどれほど質素なものであっても、子供たちの顔は明るい。

食後はもう子供たちの天下である。テレビを見、漫画を書き、漫才のマネをし、ときどきたわいない兄弟ゲンカ。そうして子供たちのそんな態度は、おそらくそれを初めて目のあたりにする夫には、新鮮な喜びだったにちがいない。

子供たちは九時を過ぎるとそれぞれの布団に入り、それから私たちの静かな夜。何といっても食事のあとかたづけが一回で早々とすむのがいい。読みたかった本を心ゆくまで読めるのがいい。明日の商売の心配をしなくてすむのがいい。

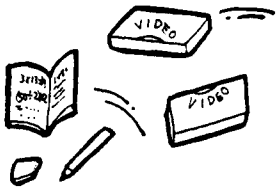
こうして私たち失業者夫婦は、暮れに向かって誰もが多忙をきわめている中を、誰はばかることなくのんびりと、規則正しく健康的でかつ明るい毎日を過ごしていった。

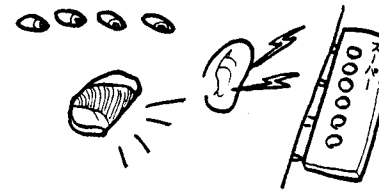
人の目、子の目

夫が商売をやめて家にいると言ったので私も足並みをそろえて家事に専念したが、ここに「世間の目」というものがある。十一月十二月という一年のうちでもっとも盛り上がる時期に、仕事もせずにブラブラしている夫婦というのは、どうも世間の目につきやすいらしい。しかも毎日、ジョギングや散歩や夕方の買い物と仲良くしているとなおのことである。

夫は二か月仕事をしないと言い、私はそれでいいと思った。無収入の生活は厳しいけれどなんとかなるさ、なんとかするさと思った。私は夫が仕事をしないということで愚痴をこぼしたこともなければ、将来を悲観したおぼえもない。借金でもして誰かに迷惑をかけたわけでもない。それでも「世間の目」はうるさい。

一年ほど前、私は近所のスーパーで品出し係のパートをしたことがある。店もそれほど忙しくなく、夫がひとりでやると言ったので家にいるのももったいないと思い、ちょうどそのころワープロに興味を持ったこ





ともあって、その授業料を稼ぐことも考えてパートに出た。私自身は暇がつぶせてお金にもなる、と気分よく働けたのだが、このときも「世間の目」というものがあった。

商売屋の奥さんがパートに出るというのはよほどフシギなことなのか、私とわかっても見て見ぬフリをする人、「あなたも苦労が多そうで大変ね」と見当ちがいのことを言う人、商売をしているのになぜよそで働くことがあるのかとしつこく聞く人。ちょっとパートに出たぐらいでそうなのだから、夫婦そろって一日中ブラブラしていれば、迷惑などこうむらなくとも何かひとことぐらい言いたくなるらしい。

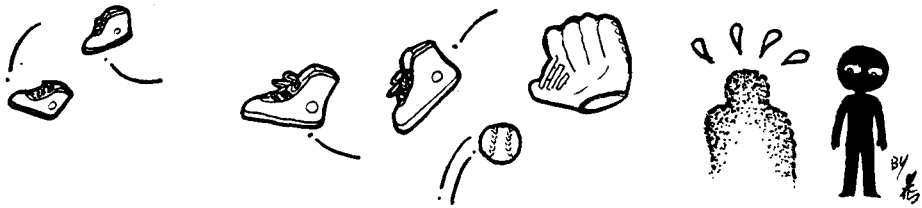
商売をやめた理由やこれからどうするのか、と根掘り葉掘り聞きたがる人、ほとんどイヤ味とも思える口調で「いいねえ遊んで暮らせて」という人、「普通じゃ考えられないよ、二か月も仕事をしないなんて」という人、あげくのはてに私たち夫婦と親しくしていた人まで「そんなに甘くしているとダンナは働かなくなるよ、それに人間としての信用もなくなるしね」と言った。——あーあ、もういやになる。

信用のない人間というのは働く気力を失って一日中食っちゃ寝、食っちゃ寝のグウタラ生活をしている人のことでしょ、私のダンナは期間を決めて休職しているだけで、働く気力をなくしてなどいないし、だいいち妻であるこの私が、それでいいといっているのだからいいじゃないの——。私は腹の底ではそう思いながらも、それらすべての言葉を笑いとばしていった。

面と向かって言ってこない相手というのもいた。ウワサである。店をやめたことがどうしてそういうことになるのか、「あそこのご主人は腰が落ちつかなくて定職に就かないんですって」というウワサがあった。他人の生活をかいま見て無責任に流れるウワサ。そうしてそれも私はこまったものだと思いながら「アハハ、スゴイ想像力ね」と言って笑いとばした。

直接言う相手も間接的に耳に入ってくるウワサも、たとえ、そこで私がどんな言葉を本気になって返したとしても、せいぜい、惚れた弱みで働きのない亭主をかばう、文句も言えぬ甘い女房と思われるのがオチである。

他人の目や口というのはそんなもので、もともと私は世間体や人にどう思われているのかを考えて生きてきたことはないし、そんなものを気にしていたのでは、チマチマとかたまって身動きがとれなくなってしまう。だから、うっとうしいだけの「世間の目」は私の外を



通り過ぎる雑音でしかなかった。

しかし私はそれでいいが、私には両親がいる。大正生まれで、働くことこそまっとうで、遊んで暮らすなどもってのほかという教えを受け、自らもそうしている両親である。

両親は隣に住んでいるので、私たちが仕事もせずにブラブラしていれば、近所の目は当然両親にも注がれる。また世間体などなかったとしても、所帯を持っても親から見れば私は子供なのだから、言いたいこともあっただろうし、とくに父は、同じ男として、私の夫に割り切れないものを感じることもあったと思う。しかし父も母も私たちを信頼して、私たち夫婦の生活に何ひとつ口を出さなかった。これには私は本当に感謝している。

「世間の目」は「いいのいいの、気にしない」と笑ってやり過ごすことはできるが、「いいの、いいの」では済まない目がある。子供である。夫が廃業宣言をしたとき、長男は「お父さんが店をやめたら僕たちはどうなるの」と言った。十二歳の彼は、親が働くことによって自分たちの生活が成り立っていることをよく知っている。

息子は不安だったらしく、収入のない生活をどうやって暮らしていくのかを聞いてきた。夫は「いいんだよ心配しなくても」というふうに笑っていたが、私はきちんと説明してやった。息子に不安を抱かせたまま過ごさせるのはよくないと思った。そうして、商売は決していやになってやめたわけではないこと、収入はないけれどぜいたくをしなければ暮らしていけること、休養期間は二か月で、年が変われば新しい職に就くことを話してやった。息子はすぐに納得したようで、家にいるようになった父親に素直に甘えてきた。

長男は「お父さん子」でサラリーマンだったころは、休日は父親にベッタリだったし、彼には小さいころお父さんに甘えた、お父さんと遊んだというかすかな思い出がある。けれど二男にはそんな思い出はないはずだった。もちろん夫はふたりを同じように可愛がったが、なにせ店を持ったのは彼が二歳のころだったのだから。

ふたりは競い合って夫にくっつく。お笑いタレントの名前や流行語をおしえ、プロレスラーの名前やワザをおしえ、キャッチボールの相手をせがむ。休日には行きたがっていたプロレスを家族四人で観戦に行き、冬休みには朝のジョギングも一緒にやった。それは子供たちにとっても私たち夫婦にとっても本当に楽しい

ひとときだった。

しかし、新年を迎えて冬休みも終わろうとしているある日、私は遊びにきた友達を断わっている長男の声を耳にした。なぜ断わるのかと聞くと、息子はこんなことを言った。「だってもう、お父さんが普通の日に家にいるのって恥ずかしいよ」。

いつだったかまだ私たちが商売をしていたころ、息子は「ぼくはお父さんとお母さんを本当にえらいと思う」と言ったことがある。いつも私たちの働く姿を見ていた息子は、彼なりに、たとえ一緒にいられなくとも仕事に精を出している夫と私を誇りに思っていたのかもしれない。

楽しく過ごした二か月はいつか過ぎ、私たちは次のステップの準備をしなければならなかった。そうして息子の厳しいひとことは、それをはっきり私たちに知らせていた。

いってらっしゃい

正月が過ぎて松飾りが取れるころになると、夫に対する私の態度は少しずつトゲトゲしいものになっていった。子供たちの三学期が始まっても夫は相変らず、ジョギングしたりテレビを見たり本を読んだりで、私が聞いても仕事についての話をしなかった。ここでしっかり立ち上がらなければ、私の夫に対する信頼も楽しかった二か月も無意味なものになってしまう。私はもうたわいないことで笑うこともなく、むしろ夫が何を考えているのかわからず、毎日イライラすることが多くなっていった。

そんなある日、私は外で私たち夫婦を見かけたという人から「ご主人は若いのね、あなたより年下なの」と聞かれた。「ううん、六つ上よ、そんなに若く見えるなんて喜ぶわよ」と私は笑ってみせたが、内心は複雑な気持ちだった。

夫は四十一歳。男としては働きざかりで、家族を扶養している責任や仕事に対する姿勢がそのまま「顔」をつくる。いわば脂の乗った年代なのである。

その夫が三十五歳の私より若く、三十そこそこにしか見えないということはそういった「顔」をしていないといわれたようで、私は素直に喜ぶ気にはなれなかったし、また実際に仕事をしていないから十も若く見られたのではないかと思う気持ちが、私に複雑な思いを抱かせた。

そういわれてから夫を見ると、心なしか頼りない顔つきをしているようにも思えてくる。商売をしていた

ころはもっと毅然とした男らしい顔をしていたと思い、二か月前はのんびりできると喜んでいた私は、若く見られた夫の顔にまでいささかのイラ立ちを覚えるようになっていった。

私は夫に一日も早く職に就いてもらいたいと焦りはじめ、何があってもいってはならないと心に決めていた金のことを口にするようになり、そうして今度は自分が金のことをウジウジいういやな女に思えてきて、自分自身にも腹を立て、私のイラ立ちは失業者生活続行態度の夫と、それをなじる私自身の両方に向けられていった。

けれども、腹を立てても何の解決にもならず、子供たちに対する影響やこれからの暮らしに気を揉んだ私は、もし、この状態がまだ続くようなら、私が先に働きに出ようと考え、そう考えていることを夫に話した。

しかし夫は笑って言った。「そういうことはオレが考えるよ……古いかもしれないけど、そういうことは男が考えることだ……だいじょうぶだよ仕事のあてはあるから」

私は口をつぐみ、夫の肩に乗っかっている自分を感じた。――そうだ、女の私が、三十五歳の女の私がこれからどう頑張ってもよほどのことをしないかぎり、一家四人を養っていける稼ぎなど得られはしない――。

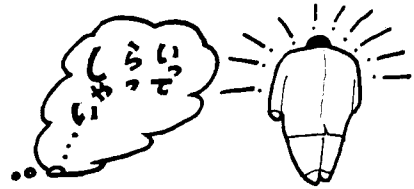
私はこれまで女も職を持ったほうがいいと考えてきたし、実際にそうしていた時期もある。しかし私が結婚後も勤めを続けたのは、仕事が面白かったことや、時間を有効に使う、視野を広げる、小遣いを得るなどの私自身のためと家計をたすけるためで、夫のそれとはちがう。家族を養うために働き、それが男の責任と夫は考えている。

仕事のあてはあるという夫が、新しい職について考えているのなら、もう少し待ってみよう、と私は思った。

一月の半ばごろになって外出や電話を使うことが多くなった夫は、学生時代の友人の知人が飲食関係の仕事をはじめることになり、その人はそういった仕事は未経験なので手伝ってほしいと頼まれていると話した。私は安堵と嬉しさの入りまじった気持ちで夫を見た。

それならそうともっと早く話してくれたら、私はひとりで気を揉むことも夫を責めることも自分をいやな女だと思うこともなかった。そんな文句のひとつも言いたかったが、私はだまっていた。

終わりよければすべてよしではないけれど、私たちの休養は夫の職が決まることで終わり、それは、同時



に新しいはじまりなのだから、そうしてこれで、これまでの心配もイラ立ちも、すべてかき消えてしまうのだから。

就職が決まった日、夫は明るく言った。

「サァ、またバリバリ働くぞ、しばらくはまた休みはないかもしれないな」

こうして夫は私より一足先に失業者生活を切り上げた。昨年の暮れ、まだ私たちがのんびり気ままに暮らしていたころ、私の友人のひとりはこう言った。「あなたたちはいま、お金にはかえられないいい生活をしていると思うわ。誰だって好きなように、思いどおりに暮らしたいと思っているけど現実にはなかなかできないことよ。だから悔いの残らないように楽しくやってね」。

私たちは一生懸命働いて休養した。そしてゆっくり休んだからこそまた働く意欲が湧いてくる。あの二か月は本当にいい思い出になった。もう二度とあれほどのんきに暮らせる日はこないだろう。でも、そんな日がたびたびあってはこまるし、やはり二か月が限度、もうこれっきり、というのが本音である。

今日も夫は身なりを整えて出勤していく。夫に先を越されてひとり失業者生活を続けている私は、夫の背中を見送りながらつぶやく。

「いってらっしゃい……」。

（え・片岡悦子）

全4巻 完結

■講座 女性学——女性学研究会編

1 女のイメージ 一九〇〇円 〒250
2 女たちのいま 二〇〇〇円 〒250
3 女は世界をかえる 一九〇〇円 〒250
4 女の目で見る 二一〇〇円 〒300

D.スペンダー
れいのるず＝秋葉かつえ訳
ことばは男が支配する
言語と性差 言語における性差別を緻密な実証で告発。3200円〒300

袖井孝子／矢野真和編
現代女性の地位
女性の地位は向上したか。現状と今後の方向を考える。1900円〒250

好評4刷

上野千鶴子
女という快楽
〈女と男の関係の解放〉を説き続けてきた著者の到達点。1900円〒250

勁草書房
東京都文京区後楽2－23－15
☎814-6861 振替東京5-175253

二〇五号特集投稿

ある日曜日・夫婦の会話

夫よ、夢を楽しみたまえ

東京都新宿区　時尾　松子

夫　五十九歳　技術者
妻　五十六歳　パート事務
結婚年数　三十二年

日曜日朝八時半。夫二階からパジャマ姿で下りてくる。

私「おはよう！」　夫「ヤアー」

煙草をとり出し火をつける。

私「またッ。起きぬけの煙草よくないのよ」

黙って二、三服吸って消す。

夫「ゆうべ変な夢みちゃった。夢の中でネ、オレが風呂に入ってたら知らない女の人が入ってきたんだよ」

私「その女の人、ボインだったんでしょ」

夫「そうなんだ、オレ困っちゃった」

私「何も困ることないわよ、日ごろの願望が夢に現われたんだから喜ぶべきよ」

夫「しかし困るよナァ、いきなりやって

くるんだから、逃げようと思っても足が動かないんだ」
私「今度夢を見たとき困らないようにふだんからアノ手コノ手を研究しておくことね」
夫「そうはいかないよ」
　何となくニヤけた顔つきで着がえはじめる。
私「今朝は、しらすぼしでいい？」
夫「うん、いいよ」
　夫が顔を洗い終わったころをみてすかさず、
私「お願い、この大根おろして」
　夫は仕方なくおろし金ですりはじめる。手を出したいところを我慢して私は知らんぷり。
夫「もうやめた、これは大変だよ」
私「だめよ、これっぽちじゃあ、もっと足をふんばって、手にも力を入れるのよ」
夫「これだけあればいいよ」
私「私の分がたりないのッ」
夫「自分のことは自分でしろッ」
夫「○○さんちの梅、やっと咲き出した」
私「あらそう！　あそこの梅はみごとね」
夫「あんな梅の木、一本ほしいなあ、どこかにころがってないかな」私「……」
夫「あの隣に大きな汚い犬いるだろう、いつも俺を見ると吠えヤガル。今日はうんとにらみつけてウルサイッて怒鳴ってやった」
私「犬も犬だけど、ムキになって怒鳴りつける人間もなさけないわね」
夫「あんなの飼い主のしつけが悪いんだ。黙っていたらよけいにつけあがる」
私「あなた、お向かいのマーちゃん（犬の名）にもどなったでしょ。この間あそこのおばあちゃまに道で出会ったら向こうからていねいに謝られて、私、返事のしようがなかったわ。うちにもよく吠える犬が一人いますからって言っておいた」
夫「おれのことか、それ」
私「そうよ、犬よりも扱いにくいんだから」
夫「おれはいい旦那だよ。おとなしいものだ」
　午後から夫は蘭の展示会を見にデパートへ出かけたが、地下の食品売場で大安売りをしていたからといってシャブシャブ用の牛肉を買ってきた。包みをあけてみると鉋で薄くけずったような肉片が少々、二百グラムもないくらいだ。
私「これだけ？　二人分といったの？」
夫「なんだかわからないけど、これで千円だっていうから買ったんだ。うまいぞ！　これは」（文句あるか、という顔つき）
　その夜は鰆（さわら）の照り焼き一切れ（これは私の分）とけんちん汁、それにシャブシャブというとり合わせ。夫は一人で「うまいうまい！　お前もどんどん食えよ」とご機嫌。ああ、どう扱えばよいのだろう！　この男。

日帰りで里がえり

東京都杉並区　榛葉千津子

夫　四十二歳　会社員（営業）
妻　三十九歳　専業主婦
長男　十四歳
次男　十一歳
結婚年数　十六年

午前六時。「ピーッ、ピーッ、ピーッ」目覚ましの音。隣でご亭主殿がガサガサと起き出す気配。

「やっぱり行くの？　今日一日は寝てたほうがいいのんとちがう？」

「だけど今日行かないと、またしばらく行けないから、やっぱり今日行こう」

「地震あったん知ってる？」

「ずい分揺れただろ。あれ起きろって合図だったみたいで起きちゃったんだよ」

「だいじょうぶ？　お腹痛くはないの？」

「ん？　痛くはないよ。ムカムカしてるけど」

彼は昨夜からお腹の調子を悪くして、夜中に何度もトイレに起きている。

「起きるぞ。起きようよ」

仕方がない、起きるとするか。

車に荷物を運びながら、

「子供たちもう起こしてもいい？」

「いいよ」

子供たちを車に乗せて、猫を外へ出し、家中の戸締りをもう一度見直して玄関の鍵をかける。

「お待ちどうさまでした」

六時三十分、鎌倉へ向けて出発。環七から目黒通り経由で第三京浜へ入る。

「どうした？　えらいすいてるね。お天気悪いからかな」

「……」

車が急に左へ寄る。追い越し車線をものすごいスピードで白い車が追い抜いて行く。その後を追いかけるように黒い車がもう一台。

「あぶないなあ。もう少し早目にハンドル切ればいいのに。あんなにスピード出して」

ピッ、ピッと直角に車線変更しながら、二台の車はどんどん小さくなっていく。

「あれじゃあ事故なんて起こるべくして起こるって感じだね」

「この間、六人亡くなった事故あったでしょ。あれかてあんな感じで走ってたんやろね」

これは後ろに座っている二人の息子どもに向かって、も半分は含まれている。彼らだってあと四、五年もすれば免許を取って、いっちょまえに車に乗り出すことだろう。

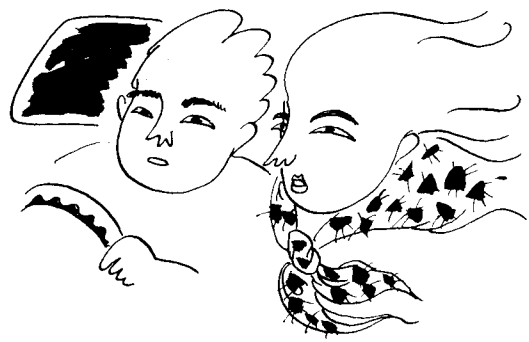
「この車だって八十キロ出てるんだよ」

「死ね！　死ね！」

（過激な言葉ではあると思うけど……）

車は横浜・横須賀道路へ入る。

「ねえ、アメ食べる？　ホールズ食べる目覚めるよ」
　後ろから「ボクに頂戴」の声。
「いらない。眠くていい気持ちなんだ。頭も体もボーッとしてるんだ」
「あぶないなあ。気い付けてよ。私代わろか？　目が死んでるよ」
　後ろから「ボク死にたくないから、眠くてもお父さんのほうがいいよ」
「四人一緒に死んでしもたらいいけど、一人だけ残ったりしたらややこしいから、目覚ましてよ」
「目がどうしたって？」
「目が死んでるの。
　結婚して初めてのお正月に車で大阪行ったでしょ？」
「ああ、行ったな」
「あんとき、大津まで私運転したやんか。あんときものすごく眠かった。頭ボーッとしていい気持ちで運転してたん覚えてるわ」
「こわいなあ。今日美容院行くんだろ、何時だって？」
「十時」
「送ってやろうか」
「ウン？　いい。お義母さんのチャリンコ借りて行くから」
　七時三十五分、材木座の両親の家へ到着。荷物も全部降ろし、お義母さん相手に二人で一か月間の事後報告が始まる。
　朝食の用意を始めると、
「ちょっと海見てこようかな」
「海寒いのんとちがう。食べてへんから風邪ひかんといてよ」
「だいじょうぶだよ」
「もうご飯よ」
「うん、ちょっと見てくるだけ。ビニールの袋取って」
「もうすぐご飯できるのに……」
「五分で帰ってくるよ」
めずらしく本当に五分で帰ってきた。
「あっ、お帰んなさい。どうやった？」



「波が静かでわかめ上がってなかった。寒くて人は出てないし、なーんにもなかったよ」両親と私達四人、揃って賑やか

に朝食。

美容院から帰ってくると、ご亭主殿はおやすみ中。子供たちのお昼の用意でバタバタしているとボーッと起きてきた。

「あ、起きたん。お帰りなさい。じゃないお早うございます。子供らこれからご飯やけどどうする？　朝のおかゆ食べる？」

「ううん、いらない」

と子供たちが食べているのを横から少しずつへずって食べたりして……。気がつかないうちにいなくなっていた。「お父さん三時半から『アメリカン・カップ』観るから起こしてくれって。それまでまた寝るんだって」

三時三十分、

「ねえ、三時半やけど、どうする？」

「ねてる」

「熱はないみたいやけど、具合悪いの？」

「体がダルーイ」

「ご飯食べてへんからね。寝てたほうがいいわ」

四時三十分ごろ、再びボーッと起きてきて、テレビの前にドレーッと寝ころんでいる。こちらは義母と二人で夕食の仕度。

「ねえ、何食べる？またおかゆにする？」

「おかゆいや。ご飯食べるよ」

「お腹だいじょうぶ？」

「もうだいじょうぶだろ。ご飯食べたくなってきたから」

九時。荷物を詰め込んで東京へ帰る。助手席は息子に取られているので、私は下の子と一緒に後ろ座席へ。横浜、横須賀道路に入ったのは知ってるけど……。

「オイ、着いたよ。帰ってきましたよ」

「ああ、もう着いたん。鍵開けてくるわね」

荷物を降ろして、

「ご苦労さん。久し振りに行ったから疲れただろう」

「はい、お疲れさまでした」

「さあ寝ようか」

「お茶一杯飲まへん？」

「お茶？　うんいいね。ブー（猫）どこにいた？」

「あなたの部屋の縁の下」

「……？」

「あのほれ、はしごなんかが置いてあるとこ」

「ああ、あそこにいたのか。さっ、もう寝ようよ。先に上がるよ。おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

ブーを抱いて電気を消して上がっていく。二階に上がったブーは早速ご亭主殿の布団の上にベターッとひっくり返る。

「ちょっとブー重いよ。真ん中に動かしてくれよ。これ、毛布が斜めになってるみたいだけど、今朝ちゃんと直して出かけた？」

「ちゃんとして行ったよ！　寒いのにもう……」

毛布をひっぱって、ブーを真ん中に動かしてやって、おやすみなさい。私が布団に入ったときには、はや彼は寝息をたててていた。

会話のないわが家

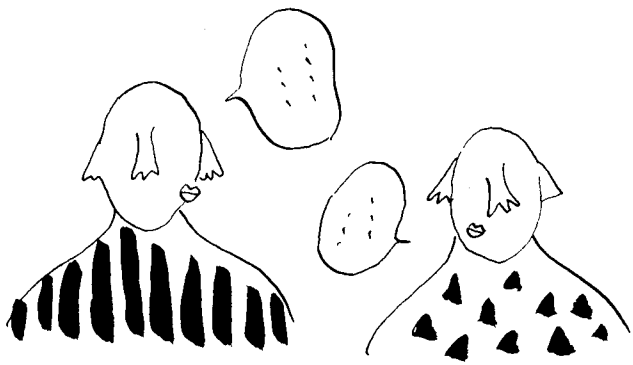
神奈川県川崎市　田代美恵子

夫　四十二歳　会社員
妻　四十一歳　無職
長女　中二
長男　中一

妻「おはよう」
夫「おはよう」（テレビのビデオを見ている）
妻「食事はしたの？」
夫「食った。ラーメン」
妻「R男、朝ごはん食べないで部活にいったのね。今日は特別なんですって。きのう、朝早いから食べずにいって、帰ってからゆっくり食べようかなあーっていっていたわ」
夫「今日は寒いのかな？」
妻「寒いんじゃない」
夫「寒いよ」
妻「ねえ、Y子、部活休んだのよ」
夫「風邪がうつったな」
妻「そうねきっと。さっき先輩に電話して断わってたわ」
　間。
妻「お茶のみます？」
夫「うん」
妻「つけもの食べます？」
夫「うん」
妻「どうぞ」
夫「……」
妻「お礼、は？」（ちょっとふざけっぽく）
夫「ありがと」（テレビから目を離さない）
妻「よしよし」
妻「生協にいってほしいんだけど、二か所」
夫「うん」
妻「R男がもうすぐ帰ると思うから、そしたらお願いね」
　テレビ、「笑っていいとも」総集編になる。
夫「これ、この間の『いのち』に出たんじゃないの？」（笑い声で）
妻「ああそうだわ、あの人、ほら、あの変ないやな役の人ね」
夫「田中健の奥さんって古手川祐子だったっけ」
妻「さあー、どうだったかしら。歯が出ているっていうから、そうかもね」
　間。
妻「あなた、もうカレーは食べないでしょ」
夫「……食べようかなあ」
妻「それじゃR男と一緒、おそ昼食べたら？」

● 特集投稿

夫「……」（ビデオを操作している）
夫「R男、『知り過ぎた男』は消したのかな」
妻「……」
夫「R男が『コロンボ』とっておいてくれたよ」
妻「あら、そう」
夫「R男、おそいなあ」
妻「本当におそいわねえ。朝から食べていないからお腹すいたでしょうね」
　間もなくR男が帰り食事。子どもと父、子どもと母の会話がときどき。夫婦二人の会話はほとんどなし。三人の間のバレーボール的会話もなし。
　午後二時三十分。
夫「行くかい?!」
妻「ええ、お願い」
　車中での会話は似たりよったり。
　帰宅後夫は「つげ義春」のまんが全集をチラチラ眺めている。
夫「このマンガ、どこがいいんだって?」
妻「ああこれ?……ストーリーは心象風景なのでおもしろいっていうことないけれど、一コマ一コマが、例えばここのところ（台所から歩いていく）なんか一カットとっても〝絵〟になるんですって」



夫「フーン」
妻「でも、それにしても暗いわね」
夫「……」
妻〝あとがき〟にもあるけれど、つげさんっていう人、ずいぶん屈折した心で、悩んだり苦しい思いをしながら悶々としてきたみたいよ」
夫「……」
妻「ね、悪いけど、一段落ついたら、洗濯物ちょっと取り込んでくれない?」
夫「わかった」
　午後六時、
妻「レモン切らしちゃったんだけど、あなた犬の散歩のついでに買ってきてくれるかなあ……。カキはやっぱりレモン酢のほうがおいしいでしょ。レモン買っといても、子ども達がいつの間にかレモネードにしてすぐ飲んでなくなっちゃうの

● 特集投稿

たわいないおしゃべりで一日が

神奈川県　匿名

よ」
夫「……」
R男「オレいかないよ」
妻「お姉ちゃん調子悪くて寝てるんだから、たまに犬の散歩行ってやってよ。お父さんと一緒に」
夫・R男「……」
夫「金」
妻「ああすみません、はい、これ。千いくらか入ってるから大丈夫ね。お願いします」
夫「……」
帰宅後、外からどなる。
夫「犬つなぐ！」
妻「しばらく放してやって！」
夫「百円だった」
妻「ありがと」
夫「三つだけどね」
妻「ウン」

夕食時は「カキうまい」の一言や、そしてあとは相槌や、ほとんど印象に残らない単語。子どもにつられて、左手で大豆の煮たのをいかにうまくつかめるかの練習を全員でしました。日曜の夕食は、テレビをつけたままで食事をすべきかで気まずい空気が流れることが多いのですが、この日は前もって消されていたのでごきげんな気分でした。

（わが家では夫婦の会話が皆無で、夫婦ゲンカといえばこれが原因のことが多いのです）

夫　三十五歳　会社員
妻　三十二歳　無職
結婚三年　子供なし

（朝、布団の中で）十時。
妻「今何時」夫「十時ごろじゃない」
妻「もう起きる？　まだ寝てる」夫「……」
妻「ようし、起きよう。起きるからね。私より先に起きないでね」夫「起きるって言ってから結構時間たっているんじゃない」妻「……」

（居間で、妻部屋片付け、夫着替え）
妻「もう起きたの」夫「うん、いいじゃない。自分のほうがちゃんと先に起きたでしょ」妻「うん。でも、もうちょっと私がゆっくりしてから起きてくれるとちょうどいいけど……」

（居間で、二人とも新聞を読んでいる）
妻「へー、なるほどね」夫「何が」
妻「新おつきあい事典って面白いね。読んだ」夫「まだ」妻「居間についてなんだけど」夫「え」妻「家族のつきあい方

っていうか。昔は、茶の間だったでしょ。タタミに冬はコタツで、母親が家にいて、で、そこに集まって話をするっていうかんじだったけど、今そうじゃないでしょ、洋間が多くなったし、働く母親も増えているし、家族のつながりみたいなのをどう考えるかっていうのが書いてあるんだけど」夫「ふうん。なるほどね」妻「読んでね。面白いよ」

（昼食前、妻洗濯、夫ＴＶとヒゲソリ）

夫「おなかすかない」妻「そうね、すいてきた。これ片付けてから、お昼にしましょう」

（昼食時、夫、ＴＶの囲碁番組を見ている）

妻「さあ、できたできた、熱い熱い。ああ熱かった」　夫「大丈夫？」　妻「うん大丈夫、取りにきてくれればいいのに」

夫「……」

妻「こっちに座ったら、ＴＶよく見えるんじゃない」　夫「大丈夫」　妻「きょうのはどう。面白い？　接戦？」　夫「そうね。解説者は互角っていってるね」

妻「もう準決勝、いや準々決勝か」

夫「準々決勝だね」　妻「ここで勝ってまたすぐ次の試合だね」

（夫、茶入れる）夫「どうぞ」　妻「有難う」　夫「ああ、あっという間に食べちゃった。ごちそうさま」　妻「本当、速いね」

（夫ＴＶ、妻片付け）

妻「私、だるいから寝ます」　夫「どれどれ、少し熱あるね」　妻「寝れば楽になるから。じゃね」

（夫、読書）

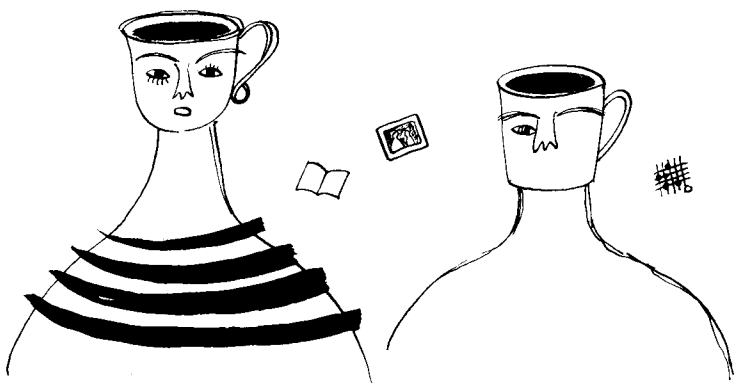
妻「ヤァ」　夫「起きた。どう具合は」

妻「大分良くなった」　夫「よく寝てたね」

妻「あ、お皿片付けてくれたの、有難う。助かった。じゃ、夕飯、作ろう」

（食事）

夫「この番組面白いね」　妻「そうね。すごくなつかしい」　夫「この子、面白いと思わない」　妻「うーん、台本ある



家庭内離婚の二人は

東京都　匿名

夫　五十代　勤め
妻　五十代　パート
長男　三十歳
長女　二十四歳

妻「下着は毎日かえて下さい」
夫「うん」

妻「食事です」
夫「わかった」
（話しかけようと試みたことはありますが、主人は自分の部屋に「そんなことは知らない」と逃げこんでしまいます）

んじゃない。ピントはずれの気がするけど」　夫「番組の自分の役割分かっているんじゃない」
（食後、夫TV、妻食器しまっている。その後）
夫「この番組（NHK独眼竜政宗）視聴率高いんだってね」　妻「そう、私思ったんだけど、現代ふうに書いてるからじゃない。夫婦とか親子とか、皆が関心あるものを中心に書いているっていうか」
夫「うーん。そうだね」　妻「これからもっとそういうのが出てくるみたい。嫁と姑とか」　夫「へえ、脚本はジェームス三木だね」　妻「ジェームス三木さんも、銀河ドラマのころが一番面白かったわね。ほら、川谷拓三が主役だった」
（二人でお茶飲む。義妹の結婚話のこと）
妻「則子さんどうしたかな。進んでるかな。もし、ホテルでするんだったら、早めに予約したほうがいいんじゃない」
夫「そうね、電話してみて、経験者として」
妻「うん、でも、私がするより、お兄さんが言うほうがいいんじゃない」　夫「うん、まあ、何とかなるでしょ。二人とも大人だし」　妻「そうね」　夫「何かあったら聞いてくるだろうし」
（夫TV、妻風呂後）
妻「じゃあ私、先に寝ます」　夫「どう、具合は」　妻「もう少しね。こう微熱が続くとイライラしてきちゃう」　夫「気持ちはわかるけど、十分に睡眠とらないと直らないよ」
妻「そうね、じゃおやすみなさい」
夫「おやすみ」

夫が寝てから命の洗濯

東京都田無市　法村　祐子

夫　七十七歳　無職
妻　七十四歳　専業主婦

「お母さん、お母さん」夫の遠慮がちな声で夢からさめる。
「どうしましたか」「僕おなかがすいて、眠れないんだ。何かありませんか」「え……今なん時」「五時すぎ」「こんな時間に食べたら朝食がまずいですよ」「だって眠れないんだもん」「食パンならありますが……」「ウンそれで結構、けっこう。あんたも食べなさいよ」「私はおなかすいてないから」
「だって僕一人じゃおいしくないから」と無理やりに口に押しこむ。やれやれお陰で口をすすぎに起きねばならない。
二度寝して、目覚めたのが八時半。
「ああご先祖様、おはようございます」夫のこの一声から我が家の一日がはじまる。

私が朝食の仕度をしている間に夫はやかんをガスにかけ、お湯の沸く間に佛様はじめ、あちこちのお花の水をとり替え、おもむろにお茶をいれ、神妙な顔で両手を合わせ、
「ご先祖様、おはようございます。今日も一日お母さんが元気でありますように、けがをしませんように、皆の者が病気をしませんように、世界が平和でありますように、お守り下さいませ」
「お父さん、お茶一ぱいで、そんなにたくさんな願いごと聞いていただいて申しわけないですネ」
「大丈夫、たまにはウイスキーや、お酒もあげてご機嫌をとっているから」と、すまし顔。
「お母さん、お茶がはいりましたよ」
「ハイ、すみません。ああ美味しい。お父さんの入れて下さるお茶は、ほんとうに美味しいですねえ」「ウンそうでしょう、真心がこもっているから。ハイ、口を開けて」と箸の先に梅干しを少しつけて私の口に。（よくもこんなことがすましてできるもんだ）
先ずここまでは休みで家にいる日は、型にはまったようなくりかえし……。
「さあ、ご飯にしましょう」と私。「もうできたの。ああ、美味しい、うちのご飯はほんとうに美味しいね」
「そう、お父さんが健康だからですヨ、体のどこかが悪いと何を食べてもおいしくないし、何をしても面白くない。家ではお父さんはじめ、娘達も元気でいてくれて、ほんとうに有難いですねえ、これもご先祖様に守っていただいているお陰でしょうネ……」
「ああ美味しかった。お母さんありがとう。お母さん、今日はどこかに行きます

か」

「今のところ予定はないけど、なんとも言えません、どうして」「ウン僕一人になると淋しいから」とニヤリ、まったくもう……。

後かたづけ、洗濯などが終わったのが十一時すぎ。さあこれからやりかけの編み物にとりかかろうと思っていると、「お母さん用事がすんだらおいで」と夫の声。「僕これから三味線の練習をするから、あんたうたってよ」

「私はこれから自分のやりかけの仕事があるから駄目」「仕事やりながらでいいから」

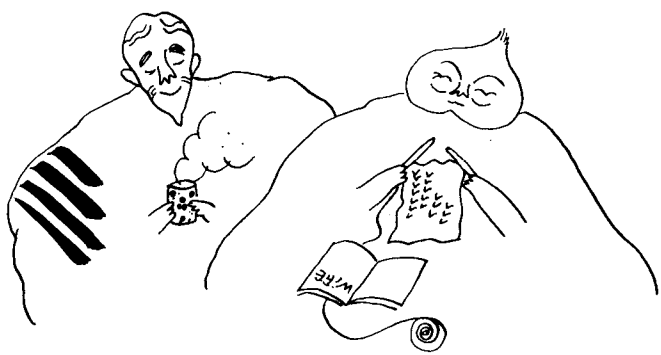
「そんなわけにはゆかないの……数を間違えたら困るんですよ」

夕方四時すぎ

「さて今日は何にしましょうかネ」と私。

「そうね、すき焼きはどう」

「ああ、いいですネ、でも材料がないけど、お父さん買ってきて下さいますか」



「ああいいよ」と、気持ちのいい返事。早速メモして二千円渡す。しばらくして、「ただいま、お母さん買ってきました。これでいいですか」「大変結構です。ありがとう。助かりました」「僕がいたら助かるでしょう。粗大ゴミ扱いしたら駄目よ」

しばらくしてから「お母さん、僕ご飯を食べるとすぐ眠くなるから先にお風呂にはいりたいんだけど、お母さんはどうしますか」「そうですねえ、じゃあ先に済ませましょう」「じゃあ沸かすね」お風呂は夫のかかり。

その間に夕餉の仕度。六時すぎ夫の呼び声で風呂にはいり、カメノ子たわしでマッサージ代わりに背中を洗う。「ああーいい気持ち、長生きするヨ」と、この体で家族のためによく働いてもらったと思うと、ほんとうにいとおしくなる。いつまでも元気に長生きしてと願わずにはいられない。

私きくひと　彼レクるひと

東京都国立市　大沢　陽子

夫　五十歳　小学校教員
妻　四十八歳　無職
長女　二十二歳

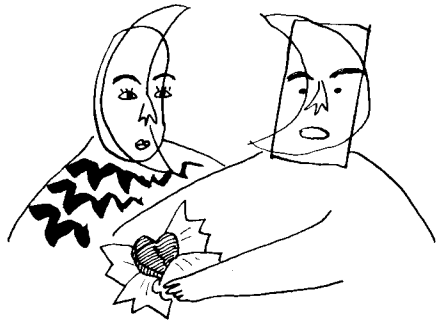
風呂からあがり、好きなビールを一ぱい、すき焼きをつつきながら、
「ああ美味しい、お母さん、お婿さんがいてよかったね」「ええ？」と聞きかえす。すると、「僕はあんたの婿さんでしょう。あんたは僕の嫁さんでしょうが」
「ああそういうこと、ほんとうにそうですネエ」「アッハッハッハア」と二人で大笑い。
「さあお父さん、早くすまさないと八時からテレビのいいのがありますよ」「ああそうだね」
あとかたづけをすませるとちょうど八時、夫は床の中で映画の半分も見ないうちに、自分はもう夢を見る人になる。
さあこれからがゆっくりと自分の没頭できる時間となる。十一時ごろまで〝わいふ〟を読んだり、書いたりして十一時就床。

「寒い」
「待って、行く所に行ってくる」とトイレに行ってきて「おまちどうさま」と夫の布団に入り半分眠りながら肩や背中や腰を押す。夫が肩や腰を押してくれる。
「たいへん。こんな時間」時計を見たら七時半。
「起きなきゃ」夫は飛び起きてテレビをつけた。日曜日の朝はかならず見ている囲碁対局が始まっていた。私は朝食の支度。ハナたち（犬）に朝食をやり、私たちは炬燵で朝食。
「スポーツ新聞買ってくる」朝食のあとで夫はいった。夫が炬燵を出たすきに大急ぎで座敷の掃除をした。
「お帰りなさい。ボスも行ったの？」
「うん。ボスはおくびょうだ。あっちこっちの犬に吠えられてビクビクしていた。ああ疲れた」
「お茶入れましょうか」
「いいよ。チョコレート食べる？」
「今年ももらったの」
「二人だけネ。せっかく持ってきてくれたのに悪いと思ってもらっちゃった。吉野さんたちが、先生、受け取ってくれないと思ったから持ってこなかったって、文句いってたよ」夫はかわいいチョコレートを半分にして私にくれた。
「不公平だ。こんなことがあっていいんだろうかって、たくちゃんが憤慨してた。おかしかった」夫は渋いお茶をおいしそうに飲みながらいった。「たくちゃんはきのう一つしかチョコレートをもらえなかった。岸君や光岡君は十一個ももらった。女の子は十五人しかいないのにそのうち十一人からもらった。はっちゃんは

クラスの男の子全員にチョコレートを贈った。たくちゃんがもらったのはその一つだけだった。たくちゃんはすっかり気分をこわして上ばきを手じゃなく足で下駄箱に入れたりしていた。だから、いってやったんだ。学級会で問題にすればって」

「よしたほうがいい」

「恥のうわぬりかな」



「そうよ。女の子は、贈りたい人に贈るんだっていうでしょうし、……議題にしても、いい結論は出ないかも知れない」

「チョコレートを買えない女の子だっているだろうし、あんまりおおっぴらにやってもらいたくないんだ」

「昔は誰にも贈らなかったし、贈られなかった。このごろのことネ。こんなに盛んになったのは」

「チョコレート屋の宣伝におどらされてるんだ」

「遊び心で、楽しんでるのよ。若いお母さんがご主人や息子さんのためにチョコレートを買うのを見たけど、楽しそうだった」「バカなことだ。……新聞がないとつまらない。ちょっと中神に行って読んでくる」夫は中神に出かけた。中神へは十分ほどで行ける。三時間ほどたって一時近くに夫は帰ってきた。

「お帰りなさい。ボスたちが嬉しそうにヒーヒーいってると思ったら、やっぱりあなただった」

「はい。おみやげ。二十日ごろ来るつもりだったけど、もう少し暖かくなってから来るって。これは直子、これはあんた。これで、おいしいお菓子を買ってくるつもりだったんだって」直子は十万円、私は一万円いただいた。卒業のお祝いなのだそうだ。すぐにお礼の電話をした。

「私と直子がハワイに行けるようにと思って積み立ててくれたんだけど、卒業は来年かと思ったんですって。だから、少しでごめんなさいって。悪いわネ、いつもいつも」

「いいよ。直子のために何かするのが楽しみなんだから」夫は炬燵に入ってテレビの囲碁対局を見始めた。

「今ネ、ヒマラヤン動物病院から電話があったんだけど、これから迎えにいきます、なんてトンチンカンなこと言っちゃった。三時にクマちゃんを迎えにいくってそればっかり頭にあったものだから。

動物病院と聞いてクマちゃんを連想しちゃって、『どうも話がかみあわなかった」って先生に笑われちゃった。ハナちゃん元気ですか、二十一日か二日に抜糸に来てくださいっていう電話だった」

「元気元気、すごく元気です。……親切だネ、元気ですかって聞いてくれるなんて」と夫。「この間抜糸のこといわなかったからって」「昌司さん投げたいんじゃないかなア」とテレビを見ながら一人ごとをいい、「でもねばっこいからネー」

（碁の勝負である）碁が終わると夫は競馬にチャンネルを回した。

「このレース三番が勝つと思うんだ」

「賭ける？」

「やだ。千円じゃ」

「いい、一万円でも」

「よーし、三番だよ。……五番にする」

「五番が来たらいくら払えばいいの」

「二・五倍だから一万五千円」

「来なければ一万円いただきで、来れば一万五千円。わかった」

「始まるよ。……もっと少なくしてあげる」

「五千円？」

「うん」九レースは二時三十五分の出発。三番が一着、五番が二着だった。

「三番だと思ったんだ。直感的にそう思っても後で、こっちかなとかえちゃう。そうしてはずれる。だめだなア、勝負勘が悪い。ハイ、五千円」

「ありがとう」私は労せずして五千円いただいてしまった。こういうことは珍しい。いつもは賭けるのが千円くらい。勝ち負けは五分。「競馬会から買わなくてよかったでしょ。私からなら、今晩のおかずになる」

「行こうか」夫はにが笑いしていった。

「ハイ」ハナやボスの頭をなで、夫の運転する車で出発。

「久しぶりにクマちゃんに会えるネ。……だめだネ、動物は一回飼うと、いないと淋しい。山の上の広い家で、放し飼いにしてやりたいネ」

「そしたら喜ぶわネ。鎖でつなぐのはかわいそう」

「クマ、忘れちゃったんじゃないかなア」クマは八王子の目白台の病院に入院して、そこにジステンバーの犬が入院してきたため、世田谷の病院に移され、二週間もの間様子を見にいけなかった。

「忘れないワヨ」

「ガリガリに痩せてるんじゃないかなア。痩せてたら、オレ金払わないで」クマに

会えるのが嬉しいのか、夫は次から次にいろんなことをいう。

「砂川のこの阿豆佐味天神は瑞穂の殿ケ谷が本社で、殿ケ谷のは『延喜式』にも載っている古いお寺なんだって。このあたりを開拓したのは岸（殿ケ谷の隣の部落）の名主の村野三右衛門っていう人で、昔、残堀川が砂川って呼ばれるようになったんだって」このあと、西砂を開拓したのは殿ケ谷の人でとか、砂川を流れる玉川上水の橋のこととか話はずーっと続く。

「八王子の千人町はこのあたりだよ。八王子の千人同心が日光東照宮の防火のため、日光に向かったんだ。日光街道と旧青梅街道が交差している角に薬屋があるでしょ。あそこ、昔は旅籠（はたご）だったんだよ。窓に格子があったりして旅籠の造りでしょ。昔のままの建物はあまり残っていないらしいけど、あそこはちゃんと残っているんだ」

「この道を行くとお寺か何かあるの？」

木の多い道があったので聞くと、

「藤森公園だろ。この先に、公園とか野球場とか藤森高校があるんだ。高校のとき、藤森とか二商に演説ぶちに来たことがある。三多摩中の高校に呼びかけて、都下高校生招待弁論大会を開こうということになって、初めて開くのに案内状を出しただけじゃ来てもらえないと思って説明に歩いたんだ。西は藤森や二商、南は深大や桐朋女子まで。吉祥寺からこっちの学校はたいてい歩いた。

桐朋女子に行ったときは、何人かの女の子が、応接間の戸をすこしあけて、『いた』とか『キャー』とかさわいでいた」

いまは自分の高校を誇りに思い、姉妹校の桐朋女子にも特別の感情を持っている。

「弁論大会は盛会だった。後援は朝日新聞社、審査員はこもんの先生のほか、そのころ校医さんだった鈴木平三郎さんと松谷天光光さんにお願いした。ヤジが面

月刊 自治研

1987年3月号●

特集 大失業時代の到来!?

氏原正治郎＋山本興一 地域雇用の維持拡大をどうすすめるか

伊木誠 吹き荒れる円高下の雇用調整 小林謙一 失業の増大と地域経済

報告◉室蘭…豊島良明／大阪…高田亮爾／因島…戸田崇勝／青森…笹田隆志／高島…宮本春男

定価450円

発行●自治研中央推進委員会

発売●八月書館 東京都文京区本郷1-10-12カルム本郷405 電話03-815-0672

白かった。体をくにゃくにゃさせて演壇に立った人には、すかさず『こんにゃくのおばけ』ってヤジが飛んだ。まったくそのとおりだと思った。笑っちゃった。『論旨不明瞭』とか『なにがいいたいの』とか、聞いている人が感じていることを、サッと一言でいうから、ハッとしたり、笑ったり、ヤジでがぜん会場が生き生きした。ヤジをとばすのが面白くて来ていた人もいたんだ」

「いいわネ。そういうヤジ。国会のヤジは品がないのよ。うるせえ、このやろ、ばかやろ、ひっこんでろなんてのべつまくなしに何かいってるの。演説している人の声より大きいから、演説がとても聞きにくい。ナリタ屋！とかハリマ屋！とか歌舞伎の掛け声みたいに、タイミングを考えて、セリフのないときにパッといってくれればいいのに、国会のヤジは演説を聞こえなくするためにいってるみたい。品もないしセンスもない」

「タイミングもいいけど、よく勉強もしていた。第一回のとき、戦犯で収容されている人たちの解放を、というようなことを話したんだけど、モンテンルパ収容所には今なお、までいうと、パッとその数字を先にいわれてしまう。ドギマギしちゃうよ」

「議員さんになる人たちも弁論部のような所で、話し方きたえればいいのにネ」

「うん。ここ曲がったっけ？」

「分からない」私は方向音痴。

「曲がるんだ。たしか。……ほらネ」

クマは痩せていなかった。私たちを見てとびついたり、頭をおしつけたり大騒ぎをした。

先生のおっしゃる料金と、お礼のお酒と果物を置いて出発。

クマは私に抱かれていたけど、そのうちに眠ってしまう。

「見て、このかっこう」信号待ちで車が停ったとき、クマの寝姿を指さし、二人で笑った。

クマたちにまず水をやって、夫と一緒に散歩に連れていって、つぎは夕食。三匹に同じようにやったのに、クマだけ、アッという間に食べてしまった。

「いいもの食ってたってほんとかなア。なんにも食わしてなかったんじゃないか」と夫は笑う。

「もう少しあげる？」

「うん、チーズない？」

「ある」

「よっぽどはらへってたんだ。もう食べちゃったよ」

「元気なしょうこネ」

人間たちの夕食はチャーハンと生ザケのムニエルとほうれんそうのおひたしなど。ムニエルは娘が作り、チャーハンは私が野菜を刻んだあとは夫がいためたり、塩を入れたりした。

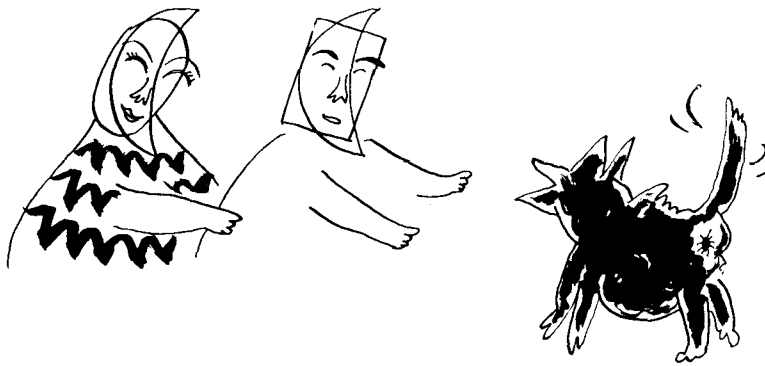
「おいしい」というと、

「お母さんはなんでもおいしいっていうんだから」と娘は笑った。

「ほんとにおいしいんだもん」

「よそに行って、あんまりおいしいおい

しいっていうなよ。ふだんなんにも食っていないみたいだから」と夫は笑った。
「これ、クマにやろう」と夫は、サケを少し残した。私のも合わせて三匹に少しずっわけチャーハンも少しずつやった。クマが眠りやすいようにと縁の下に毛布を敷いたりした。首に大きなダンボールのわっかをえり巻きのようにつけているので、クマは犬小屋に入れない。夫はクマが気になって、二回も庭に出ていった。
夫がテレビを見ている間、私は台所で片づけたりお風呂を沸かしたり、あしたの用意をしたりした。
「クマにはやられた。フーフーいう声が苦しそうだったからあわてて雨戸を開けたら、縁側に両手をのせておれを呼んでるんだ」夫は笑っていった。私も笑いながら炬燵に入った。「三匹は多すぎるネ」夫がいった。
「うん」
「一匹がいい」



「一匹だったら残すのにはクマちゃんネ。クマちゃんが一番かわいい」
「二匹はどうするの？」
「どうする？」
「知らないよ。アンタが拾ってきたんだから」
「一匹だと喜びだけど、三匹だと苦しみネ。一つもいい犬はいないし」
「よく見るとボスかわいい顔してるよ」
「エッ。よくない。ちっとも」
「いいよ。この間、初めてたくちゃんちの犬を見たよ。いつもは尻ばっかり見せてたんだけど、初めて道のほうを見てたんだ。ひどい顔してたよ。ブルドックみたいな。毛はボスと同じうす茶なんだけど。……あれだって、たくちゃんは、かわいいかわいいっていってるんだ」
「そう思うのは飼い主ばかり」
「お風呂に入ってきちゃう」と私。うちではいつも私が先にお風呂に入る。
「明快な文章だネー」「女性による民間

教育審議会」の〝教育改革提言〟を読んでいた夫は、お風呂からあがった私にいった。「肝心なところ読んであげようか」と「私たちの基本理念」の中の「子どもは自ら育つ力を持っています。学校は、子どもが主人公です」から始まる十三行を朗読してくれた。「まったくこの通りだ。日ごろいっている通りだ」

「どこどこ線引くから」と鉛筆を近づけると、「だめだよ、コピーして父母会の資料にするんだから」といい、「明快に書くもんだネー」とまたいった。「誰が書くのかなァ」とも。よほど感動したらしい。それからあちこち読んでくれた。

「教師と子どものふれ合いのために」を読んで、「こういう施設があるといいネ」といった。

「教育が力をつけるために」の中の一年間休職できる権利を保証するという箇所を読んで「こういうことができるようになるといいネ」といった。「障害のある子もみんなと一緒に学ぶことはいいことだと思う」といい、「Fさんが前の学校にいたとき、クラスに片方の耳のない子、事故のためにきき腕をなくした子などがいたんだって。片うでの子はお父さんに毎日キャッチボールをやってもらったりしていて、よく頑張る子で、水泳なんかもみんなに負けないで泳ぐんだって。それみて、みんなも刺激されて、とってもいいクラスになったんだって。やっぱりいろんな子がいるといいんだよ」といった。

「問題解決のために」を読んで、「こういう委員会ができるといいネ」といった。

「画期的提案だよネ」ともいった。「みんなまったく同感だよネ」ともいい、「どれだけできているか」と自分を省みていた。「校長は、大きな日の丸を買ってくれなんて、直接教委に申し込んだりしている。誰のための学校か分らなくなっているんだ。こういう文章読ましてやりたいよ」

「読まないでしょうネ。文部省推薦じゃないもの。……ネ、お風呂に入って。さめないうちに」

「うん」

「これ、着替え？」と夫。

「そう」

寝間着を着て大急ぎで布団に入った夫に、おやすみなさいをいって、しばらく夫の肩や背中に押した。押してるとすぐに眠くなってしまう。自分の布団に入ってぐっすり眠った。どっちが早く眠るか分らない。どっちも早い。

（え・万谷陽子）

投稿ホットライン――今日はひとの子、明日は？

狂育ニッポンどこへ行く

――新人類大量異常発生中！

「人並みに」が親の弱み

兵庫県神戸市　川西美和子

教育改革とかで、今年度から大学受験制度が変わり、受験生にとっては何のための改革か分からない。むしろ以前より、悪くなったと言えるのではなかろうか。足切りとかで、結局はできる子供だけが受かり、できない子は受験の機会すら与えられないまま（止めれば良いのに……）浪人するか、私立のすべり止めに行くしかないわけである。

国公立に受かった人達も、他にいくつも受験し、私立の入学金を納め、そのために親の負担は測りしれない。中には兄弟揃って一、二年の間隔で、大学にやらねばならない親にとっては、血のにじむような大問題であろう。

昔は大学へやることは、一種の投資であった。老後は子供の面倒になるという暗黙の了解があった。しかし今は、社会制度が同居できないようになっているし、また親のほうで子にかかろうと思っている人は少ない。寿命も延びたし、いつまでも元気な老人と若い嫁とが、一つ屋根の下で暮らし、うまくいくほうが不思議である。

一方、子供達は管理教育に慣らされて、小学校のときから、他人と一緒でないと不安ということで、猫も杓子も大学である。却って高卒の子のほうが個性ある勇

気のある人と言えるのかもしれない。

我が家も高二と中二の女と男の子がいるが、揃って大学へ行くのは当然（能力は別として）と思っている。そのためには少しでも不利にならないよう、父親が転勤になれば、単身でどうぞといった次第である。

現在不自由にも主人は単身赴任を強いられている。家族が、一人減ったからといって、生活費を切りつめたところで、しれている。主人の東京暮らしはそれなりに費用もかかる。平均的サラリーマンで、家のローンを払い、教育資金を作らねばならないのである。ましてや小学校時代から、右へ倣えで、塾通いの費用は馬鹿にならない。パートが時給四、五百円なのに、塾の費用は千円くらいである。できの悪い子供は、その間いくらかでも得ているのだろうか？　と馬鹿馬鹿しくも思う。がこれまた止める意志はないようだ。それ故、私はパートで身をすり減らす気にもなれない。焼け石に水である。

しかし子供達が本当に学問をしたいという向学心からなら、犠牲になっても良い。実際は何もやりたいことがなく、偏差値で入り易い所へ行き、行けばなんとか人並みの生活ができる職にありつくだろうという安易な考えのようである。学校は塾化しており、読書する暇さえなく、これでは自分が一体何をやりたいのか、世の中の様々な仕事はどんなものなのか、また大学の勉強はどんなか、どんな教授がいるのか等々実際に何も知らなくて、進路を決めようもないではないか。

中学生の男の子が将来の希望を学校で書かせられたところ「普通のサラリーマン」と答えたそうである。父親がサラリーマンだからかもしれない。がその実、どんな仕事をしているのか、当人は全然知らないのである。昔のようにハングリー精神がなく、人並みに生きられたらそれで良いと思っているようだ。これは無意識な親の影響かも知れないが……。

その子の親である私が、人並みに子供を大学へやろうとしているのである。お金で買えない人間らしい生活もできずに、子育ての目標は大学へ大学へと時間をすり減らして走り続けている。

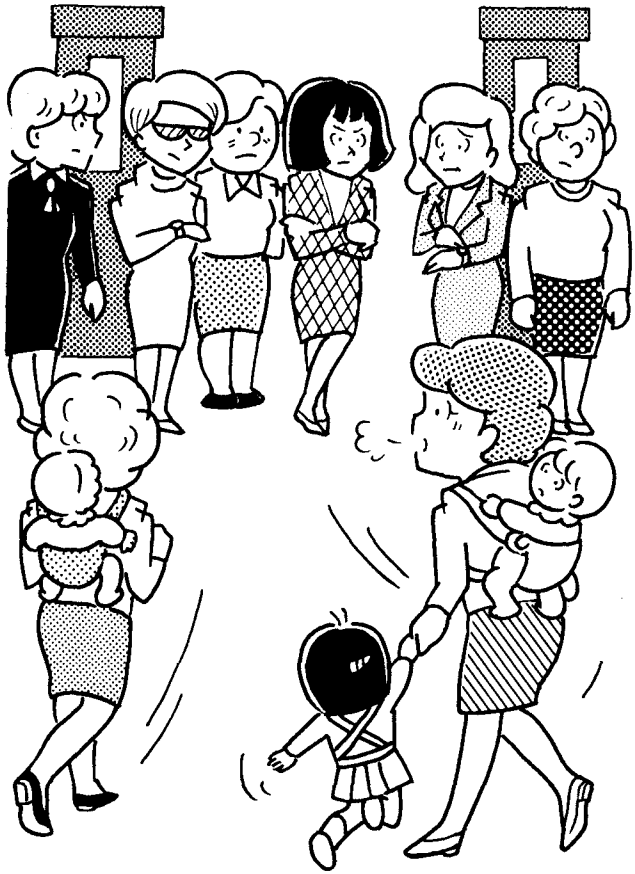
もし、ここいらで、アメリカのように、子供の学資は逐一書きつけていて、後に親にすべて返すべし、という制度を作ったらどうだろう（世の親がすべて……）。また、入学はさせるが、難しくてなかなか卒業できないという制度にしたら、もっと本気で学問にとりくみ、そのような人のみが大学へ行くかもしれない、そんな教育改革をやっていただけないかと思う。うちの子は「やあめた！」と一番に言うかもしれないが……。

ときどき思う、「ああ、子供のない人は幸せだろうな、夫が定年退職したら、二人で世界一周旅行をし、老後は有料の素晴らしい施設に入ることだってできるのに……」

それにしても「人並みに」が親の弱点ではなかろうか。

お食事会とは何ぞや？

東京都千代田区　山口　純子



三月……卒業シーズン。我が家の娘も無事三年間の区立幼稚園生活を終わらせようとしている。そこで出てきたのが謝恩会とは別の、先生を囲んでの夜のお食事会とやらの話。

我が家は都心の過疎地にある。住民が少ないので当然幼稚園の園児数も少なく、十六人いる娘のクラスは多いほうである、このこともこの問題を大きくした一つの原因である。

役員さんの説明によると、お食事会とは、私的なものではあるが、恒例で、先生へ感謝の意を表するためのものであり、（間違っても母親達の夜の外出の口実とは言わない）毎年の参加者はクラス全員のお母様、皆さんなんとか都合をつけてくるそうな。

しかし、今年度の年長クラスは我が家を含めてほとんどが三人兄弟、しかも一番上が年長で下に二人の（中でもゼロ歳児が五人もいる）家庭が多い。こういった中で恒例どおりにお食事会が開ける

か、先生へのお礼、全員参加が理想なら他の方法がとれないのか、と初めから私は疑問に思っていた。

案の定、前もっての参加状況調査のようなものでは、下の子が小さい人達の答えは、「昼間だったら……」という意見が多かった。我が家も下に二歳、ゼロ歳の子がいる。夫は家にいるときは家庭的だが、夜は中小企業サラリーマンのお定まりで当てにならない。第一私自身の中で、六歳の子はともかく、一歳にもならない子とまだ一人で食事もできないような子を残して行くほどの犠牲を強いるお食事会に、納得がいかなかった。

そして全員の意見を聞くという集会。それは全く突然にやってきた。朝の十時四十分に電話が役員、卒園対策委員会からあり、十一時に校門前集合。二十分しかない。いくら近いとはいえ、二人の子供に仕度をさせ、一人をおぶい、もう一人を急き立てて行っても遅刻。越境の人などはもっと大変だ。その人も六か月の子を背に、慌ててバスに乗ってやってきた。

校門の前には役員、卒対が七人ずらりと構え、威圧的な感じ。「先生に感謝の意を表するためのものです」「去年までは全員参加しています」「こんな意見を聞くなんて初めてなんですよね」（ウソ言え、去年の卒対にちゃーんと事実を確認してあるんだ。きちんと図書室へ集めて聞いている）などと半強制的な言葉の連発。私のようなずうずうしい奴でなければ、「夜はいけません。昼間で茶話会などの形式はとれないのですか？」などととても言える雰囲気じゃない。前には昼間ならと言っていた人達も結局は「なんとか都合がつけば……」というようなことになった。

私の他にもう一人「先生への感謝の意を表するなら他の形というわけにはいかないのですか？」という勇気ある発言。しかし一笑に付されてしまった。「では卒対のほうで後は決めますから、お任せ下さい」が最後の言葉となり、あっけなく終了、かと思いきや、越境の彼女が叫ぶ。「三十分前に電話があって必死に来てみれば、こんなくだらないこと……。今日、明日って問題でもないのに」くだらないと言ったのは失言だが、ごもっとも!! しかし、卒対のほうでは受けとり方が違う。「役員や卒対は朝から集まっているんです」と会長、「だから謝っているじゃない」揚げ句のはてに、「そういうガタガタ文句を言う奴がいるから、纏まる話も纏まらないんだ」という暴言。それを止める人もいない。

そうなんだ!! お食事会に関しても、この集合方法に関しても、初めっから下の子のいる人の事情など考えていないんだ。役員や卒対はどうせもう下の子が手がかからなくなっている年齢なのだ。しかしそれでは誰のための役員や卒対なのだろう。

さて、本日お食事会のプリントが配られた。内容はもちろん予定どおり三月二

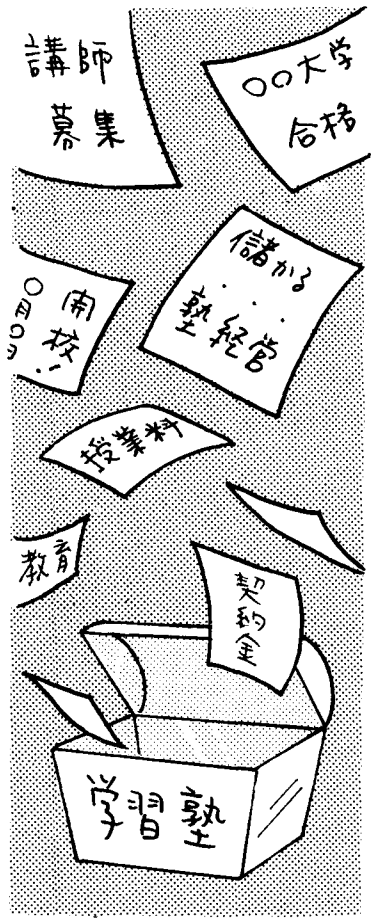
十八日（土）夜、銀座○○で……。何のための集会だったのだろう。役員、卒対総勢七人が朝から集まって反対意見がちらほら出ていることに腹をたて、興奮し、その勢いで全員を掻き集め、「まあ聞くだけ聞いて却下すればいいじゃない！」とでも言っている声が聞こえてきそうだ。

全員参加が望ましいのであったら、他に方法がなかったのであろうか、それとも私のような意見は、三人の幼い子を持つ者の単なる我儘だったのだろうか、という疑問、そしてまた、十六人という少人数では、役員などできる人がやらなければならず、できない側はその人の人格などに関係なく（会長などはくじ引きで決めるそうだ）、その人達を承認せざるをえない役員選出法、また恒例に反する意見を持つ者は、一種の反逆者的な見方をされる、という恐ろしい現状にある我がＰＴＡへの強い不信感をもった。

二月二十日現在、お食事会参加者の合計は九人である。

開けてびっくり学習塾

東京都　匿名



最近、新聞を見ていると塾の広告が目につきます。乱塾時代といわれる現在、学習塾について何の知識がなくても、場所さえあれば今日からでも開塾でき、儲かるという広告に疑問を感じます。果たして本当のところはどうなのか？

主婦が子供の世話から開放されて、何か働きたい。そんな気持ちで塾を始めてみようと思う方も多いはずです。パートと同じようにいくのか。子供にとって、そうした学習塾が良い塾といえるのか。

今、学習塾も予備校と同じように巨大化しようとしています。全国規模の学習塾ができ始め、予備校同様、有名校という名前で売り始めています。それは、母親たちのブランド志向の心理をとらえた商法を展開しています。

学習塾が町内の家の一間を利用して開

塾し、評判が人の口を通して伝わり、流行ってゆく時代はもう終わり、教育心から営利を目的としたものになってきました。

なぜ、急激に学習塾の規模が大きくなってきたのでしょうか。

円高騰が、生活には還元されないことに不満を感じているくらいの円高も、企業にしてみれば円高不況で自社の社運が危いと、脅威を感じているところも多いのです。その中で企業は生き残る道として他事業への進出を考え、教育産業もそのひとつとして選ばれています。

国鉄のように昨日まで改札で切符を切っていても、今日はスタンドでコーヒーを入れているといった現象がどこにもあるのです。

さらには、フランチャイズの学習塾が現われ、マクドナルドやケンタッキーのように全国にチェーン店を広げるまでになってきています。ハンバーガーを売る売り子のように、一言一句同じことを言う学習塾が誕生するのだろうか。物を売るのではない。子供に勉強を教えるのです。

学習塾の教師は、学生のアルバイトが主体です。数年前に習い覚えた勉強を思い出しては教える授業。それを専任の教師にすることはむずかしいにしても、学習塾の経営者は自分でも教えることのできる人間でした。しかし教えることができない人間が塾を経営しているのでは、その学生アルバイトが教師としての実力があるかどうか判断する力がないのですからおのずと塾の質も知れたもの。教えるということは、有名大学の学生であれば教師としても優秀とは限らず、一種の才能です。

学習塾の経営者を募集するのと同時に、年度が変わるころになると、塾講師の募集記事がいろいろな塾から出されています。大量にアルバイト教師が採用され、各地の教室へ配属されるシステムにも問題があります。東京を初め、大都市は有名校が集中し、教師の数に困ることはありませんが、近くに大学のない地域ではなかなか教師が見つからず、質や人間性を考えていられず、結局は質の低い教師を派遣せざるをえない現実もあるのではないでしょうか。

教師の質のみならず、進学をめざす生徒を正しい判断で進路指導ができるのでしょうか。生徒に勉強を教えるのと同時に、地域の進学状況などを把握しての指導を求めているのに、昨日今日、塾経営に乗り出した人間に指導ができるかといったら、はなはだ疑問です。

自分の子供を塾に預けるときに、名前を聞いたことがある、有名だから、規模が大きいからという理由ではなく、自分の確かな目で見、塾の実績を調査し、実際に行っている人の話を聞いてからでも遅くないように思います。

乱塾列島は、これからも激しい塾同士の生徒の取り合いが続くでしょう。塾同士にまかせず、親の目で塾を淘汰してい

きたいものです。

何年か先には、児童数の減少は明確であるのになぜ乱塾するのか、契約金が数万円から数百万円までさまざまな塾が経営者を募集しています。本当に儲かるのでしょうか。儲かるのも事実なら、儲からないのも事実です。

塾生が百人、二百人と入学してくれたら、月々の利益は大きいものになりますが、その塾生を集めることは容易なことではありません。会社が指導してくれるといっても、チラシ配りや広告を出すのは、経営者自身でやらなければならないのです。そうした宣伝をしてもなかなか思うようには生徒が集まらず、〇月〇日開校とうたった以上開かぬわけにはいきません。

開校後も、家賃、講師への給料、教材費、設備費、広告費などの出費があり、毎月赤字続きで、大切な虎の子も三か月くらいではたいてしまうこともあります。主婦のパート代わりと始めてみても、思いのほか雑用が多く、書類の提出や授業料の回収と、気がつくと一日それにおわれることもあります。赤字の穴埋めに夫の給料が消えることもあるかもしれません。

塾に子供を入れると同様、塾を経営しようと思ったら、充分に立地条件、児童数、通塾率や、加入しようと思う会社の塾を実際に見に行き、慎重に検討するべきでしょう。会社が見学させてくれる教室は、経営のうまくいっている所しか見せてくれないということも頭に入れておくべきです。

そして、教育という仕事を真剣に考え、勉強した上で、子供の身になり、親の身になって塾を経営してほしいものです。

塾にもミシュラン並に、三ツ星、四ツ星とランクづけされたなら、どんなに安心でしょうか。せめて、わいふの誌上を借りて塾の善し悪しを論じ、情報交換できれば、乱塾の中をうまく塾を活用してゆけるのではないかと思います。

（え・大場美和子）

誌上販売

地方にいらしてはなかなか手に入りにくい本を、読者に直接お届けするサービスをしています。　送料無料で郵送いたしますのでお電話またはハガキでお申しこみ下さい。締切りはもうけませんが品切れの節はお許し下さい。

女の立場から医療を問う　中村智子著
（田畑書店　一五〇〇円）

少年は死んだ　門野晴子著
（毎日新聞社　一二〇〇円）

なぜこの学校に行けないの　障害児と普通学校・全国連絡会編
（八月書館　一六〇〇円）

教科書に書かれなかった戦争Ⅰ、Ⅱ
（梨の木舎　一二〇〇円）

結婚式の本　わいふ編集部著
（日本実業出版社　六八〇円）

かりだされる子どもたち　林雅行著
（柘植書房　一九〇〇円）

莿（あざみ）の花（富本一枝小伝）　高井陽・折井美耶子著
（ドメス出版　一七〇〇円）

投稿ホットライン――ずっこけた・ぶったまげた・頭にきた・ジーンときた

エッセイスト・クラブ

あの日のこと、この日のこと、つれづれなるままに……書いてみよう。
読んで面白い、読ませて喜ばれる、大傑作集

白い杖の住人

千葉県習志野市　田久保美知子（49歳）

粉雪の舞う節分の日の前日、一人の目の不自由な老人（男）が、我が貸家に越してきた。

貸家とは名ばかりで、四畳半に台所、それに、トイレのみの一軒家である。二十年前の道路拡幅計画の際、旧家の増築した一部が残されたもので、駅前通りにこんな小さな家があるなんて、近所に五階建ての千葉スクールオブビジネスのビルなどが建設される昨今は、一層奇異にさえ思える。そんな小さな家が我が家の玄関の右側にある。

昨年の春、四年間いた男子大学生が卒業して引っ越していった後は、借り手がなくずっと空き家だった。交通至便、（京成津田沼駅まで徒歩七分）多少の交通騒音はあるが、一日五百円の家賃でも借り手がない。現代の学生は豊かで、バス・

トイレ付きの高級アパート、しかも、新築のアパートに借り手が付くらしい。中古のアパートは空室が多く、困っていると聞く。

「前の家、借り手が来たから貸したよ。目の不自由な一人暮らしのおじいさんで、週に二回、市役所からヘルパーさんが交替で派遣されてくるそうよ」引っ越してくる二日ほど前、外出から帰った私に、義母はそう言った。私は、空いているのはもったいない。借り手がついてよかったと思う反面、困惑した。どの程度目の不自由な方だろうかと。

引っ越してくる日の朝、S不動産の奥さんが契約書を持って見えて「目の不自由な方で大変でしょうけれどお願いします。几帳面なおじいさんですから大丈夫でしょうけれど、何かあったら言って下さい」と丁寧に挨拶して帰られた。

間もなく、ガス屋さんが来て、ガス器具やガス洩れ報知機など取り付けていった。

雪まだ上がらぬ十一時過ぎ、小型トラックで、そのおじいさんはヘルパーさんとともにやってきた。言葉つきのはきはきした小柄な人だった。聞けば大正十四年生まれだという。四年前より糖尿病を患い、目が不自由になったとも言った。七十五歳になる義母と同年齢くらいに見える。編み物教室に通う義母のほうが若いくらいだ。

トラックから荷物を降ろすと、運転手さん、ヘルパーさん、それに私どもに昼食の気配りをしてくれた（前の店から五目そばの出前をとり、振る舞ってくれた）。お茶を用意した私に、「おいしい――。何か月ぶりでお茶を飲んだことだろう」お茶碗を両手で囲むように持ち、一口一口ゆっくりと味わうように飲んでいた。「市から、炬燵（電気）以外火を使うことを禁止されています。最初は水を随分飲みましたが、今は水もあまり飲みません」それが、日々の生活の中で当然であるかのごとく、淡々と話された。

運転手さんは、食後すぐ帰られた。

引っ越しの荷物は、夜具に洋服ダンス、電気炬燵、テレビ、電話器、電気冷蔵庫、それに二万四千円で購入したばかりだという洗濯機などの生活必需品、最低の台所用品と食器類だった。二本の醤油と一袋の砂糖、台所にころがった二、三個のじゃがいもと玉葱が、一人の目の不自由なやもめ暮らしの老人の引っ越しを物語っているかのようで、わびしくもあった。差し出がましいと思ったが、片付けを手伝うこととした。荷物はヘルパーさんと二人で、あっという間に片付けた。

おじいさんはKさんと言った。六十二歳なのでKさんと呼ぶことにする。平家の一軒家で部屋が明るいこと、買い物やお風呂が近くて便利なこと、多少の交通騒音は我慢できる。大家さんが親切でうれしいとことのほか喜んでくれた。Kさんが「暖かい部屋だなあー」と周囲を見まわす。「若い美女が二人もいるんだから暖かいはずよ。Kさん、早く目を治して美女を見て下さい」と言えば、にたりと笑いが返ってきた。

大方片付けて、早々に引き上げた。ヘルパーさんがKさんからの使い物を持って挨拶に見えた。良い大家さんでうれしい。気持ちを受けて欲しいとのことだという。「もうお帰りですか」「これから買い物とお料理をしていきます」私より、十歳も若いであろうヘルパーさんは、愛くるしい目を一層愛くるしくして答えた。

夕方「お食事は済みましたか」と声を掛けると「済みました。明日、病院へ行くので、今晩と明日の朝はパン食です。朝のパンも焼いていってくれました。そんなわけでお菜を作るのを断わりました」さばさばと答えた。焼いた三枚の食パンと食べかけた残りの半分が一緒にラップに包まれ、トースターの上に置かれていた。わびしくもあった。

私はこの老人（やっぱり老人のほうがふさわしいかな？）と一体どんなふうにかかわり合っていけばよいのだろうか。一週間のうち、二日はヘルパーさんが来ても、後の五日は一人で生活していたのだ。生活できないことはない。だとするとあまり面倒をみては、プライバシーの侵害にもなりかねない。本来貸し主と借り主の関係なのだ。私も月に何日か仕事を持っている。目の一級傷害というけれど、一体目がどの程度見えるものなのか、見えないものなのか、老人の一人暮らしはわびしいであろう。だとすると必要以上に甘えが出てこないとは言い切れない。

一夜明けて雪はあがり曇天だった。昨日の雪は積もることのない雪だった。Kさんは白い杖をついて、早昼に病院から帰ってきた。「昨夜は気持ち良く眠れました。朝四時に起きて、六時三十分に出ていき、一番に診ていただいて、今になってしまうんですよ」大分良くなったので、手術をしないで一か月様子を見て、次は三月三日に病院へ行くとも話された。

今からお昼の準備も大変でしょうから、あるものでよかったら、とカレーライス

と野菜の煮物（大根、人参、蒟蒻、里芋、昆布、さつま揚など大き目に切って煮たもの）を届けると、ちょうどヘルパーさんが立ち寄って「あらあら、こんなにしては大変ですね」「一日五百円の家賃ですから、お金のことを考えたら何もしてあげられませんね」笑いながら、小さな声にしても、我ながら言葉が過ぎたのではないかと思った。Kさんは食べながら「おいしいな――こんなにおいしいカレーライスは初めてだあ」と食べながらお世辞を言う。

午後、義母にどのようにかかわりあっていけばよいのだろうかと相談した。義母は「私は薄情かも知れないけれど、一つも面倒を見ないよ」と言い切った。連れ合いのいない義母のその言葉には、一人のやもめと一人の後家、煩わしい世間体を気にして、そんなものにかかわり合いたくないという、気持ちの一端も潜んでいるようにも受け取れた。

今日は節分、我が家も例年に倣って豆まきをした。Kさんのところも、今日はたびたびチャイムを鳴らしてしまったので、躊躇しながらも、気持ちで豆をまいた。夕餉の食卓に着いて、義母に「おばあちゃんが私どもに相談なく承諾したのだから私が勤めに出て家にいないときは、面倒を見てあげて欲しい（考えると、義母のほうが十三歳も年上なのだけれど）。おばあちゃんが、もし目が不自由だったら、人に親切にされることはうれしいことでしょう」義母は黙っていた。が、少し間をおいて「大丈夫だよ、今までも一人でやっていたのだから」とだけ答えた。

明日は立春である。春とともにKさんの目が少しでも良くなればよいと、願わずにはいられない。季節の変わり目に、私の懐へ一つの課題が豆まきの豆のように飛び込んできた。少しでもお役に立てれば――と思っている。

自然食通信社の本

手づくりのすすめ

四月二十五日発売予定　定価一八〇〇円

今は跡絶えがちな、風土に培われた手づくりの食べものの数々。暮しの中でめんめんと受け継がれてきた技があります。もういちど、本物の味と技を、そしてなにより暮しを取りもどしてみませんか。

四月一日発売予定

百姓志願

僕たち一家が百姓になるまで

中村顕治著　定価一七〇〇円

百姓になるぞ！と決意したその日から、一家四人力を合せ百姓への道を一歩ずつ歩き出した。サラリーマンから百姓へ、十七年の助走ののちに見事に転身を果した中村さん一家。心から解放された心豊かなさわやかな百姓暮しの日々。

ご注文の際は発売元・新泉社で
東京都文京区本郷2－6－10
☎03(816)3857 振替・東京5-78026
自然食通信社

弱い者として生きる

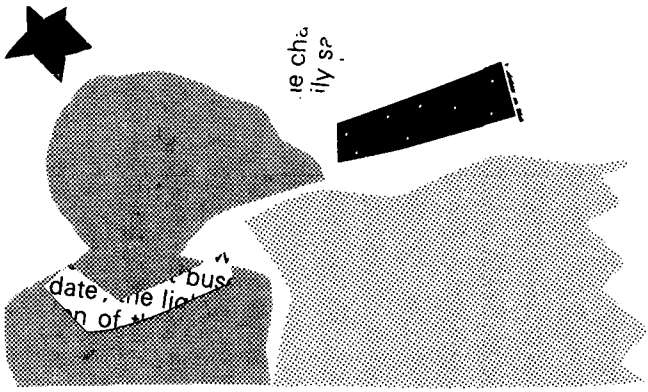
東京都世田谷区　山田　恵子（35歳）

PTAの広報委員として知りあった仲間との遅い新年会があった。ささやかな昼食をとりながら、アルコールも入っての会は、にぎやかに話に花が咲いていた。

メンバーに入るのを断ったKさんのことが話題になった。

「あの人『エホバ』の信者だったのよ」と私の隣にいた一人が言った。彼女が実家の店を手伝っているとき、突然声をかけられて驚いたという。Kさんは子づれの数人のグループだったそうだ。

エホバの証人の人達には何度か迷惑を被っている私も、彼らの宣教の仕方についてはいっしょになって悪口を言った。が、それよりも考えさせられてしまったのは、親しい友人の次の言葉だった。



「だって、どうしてあんなもの信じるの。宗教にすがるなんて弱い人の生き方じゃない？　自分がしっかりしていたら、宗教なんて必要ないと思うの」

「そうよ、そうよ」

もう一人が相槌を打った。私は何か言ってやりたいと思ったが、親睦会の席で議論しても意味がないと思ってやめた。

私はごく普通に生きてきたつもりだ。大病もしたし、何度か挫折も味わったが、たいていのことはめげずに乗り越えてきた。そんな私であるが、六歳のとき祖母の死を経験して以来、「死の不安」ということが頭から離れなかったような気がする。宗教はいつも私の心の奥底にあった。

――神もなくしるべもなくて
窓近く婦の逝きぬ――
――中原中也「臨終」より――

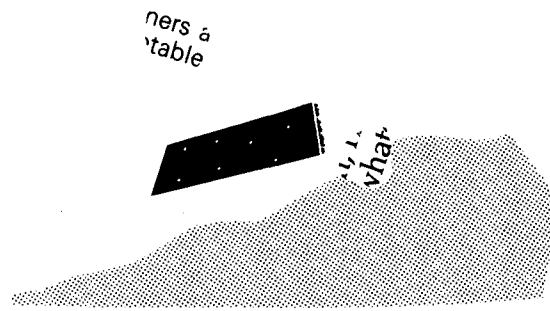
この一節に私は言いようもない絶望を覚える。

人は神なくして安らかに死に臨むことができるだろうか。長い間苦しんだ挙句、キリスト教に救いを求めたが、最後までなじむことができなかった。四年前に初めて仏教にふれて、大きな驚きとともにその奥深さを知った。今では釈尊の教えに深く帰依していると確信している。私の長い宗教遍歴だった。

Kさんをとがめた前述の友人は昨年暮れ、癌検診で陽性と出て一か月、不安のあまり体重が五キロも減ったという。結局盲腸とわかり、大事に至らず安堵したのだが、そのとき彼女は、

「何も悪いことをしていないのに、どうして私だけがこんなめにあうのかと思って……」

と言った。また、



「誰にも迷惑をかけたくないので、ずっと一人で悩んでいた」

とも言った。私はその言葉に唖然とした。それでは癌にかかる人は悪いことをした人なのか。彼女は悪いことをしたことのない正しい人なのか。誰にも迷惑をかけずに立派に生きてきた、という自負が彼女にはあったのだろう。

「あら、迷惑はかけていいのよ。だってみんな迷惑をかけながら生きているんじゃない」

というのが私の精一杯の返事だった。

彼女の宗教観は平均的な日本人のものだろう。特定の宗教に頼らない人こそ強く、理性的で、現代の科学至上主義にマッチするものだと。そうだろうか。人間はそれほど強く理性的で、科学はそれほど万能だろうか。順境に裏打ちされた強さとは、どれほどの意味があるだろうか。何よりも人は、一人孤独に死ぬ存在ではなかったか。

私が仏教の師と仰ぐM先生がこうおっしゃった。

「わらをもつかむ、という諺がありますが、人間は困ったときあわてて宗教にすがろうとすると、本当にわらをつかんでしまうんです。あなたはまだ若いんだから、じっくりと宗教について考えていきなさい」

もっとも先生は私を、変わってる人だ、ともおっしゃったのだが……。

いっときの夢

岡山県津山市　清水喜代子（37歳）（絵も）

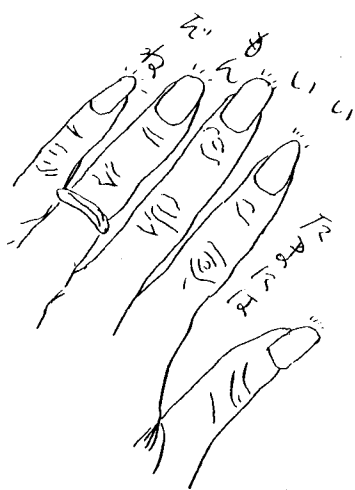
暖冬で早々と、春の訪れを告げるオオイヌノフグリが、道のあちこちで瑠璃色の群落を見せるようになった一月のある日、絵手紙仲間の一人からハッと眼を惹く一枚の葉書を受け取った。

葉書のスペース一杯に、薬指に指輪をはめた、少しゴツゴツした、見るからに働く女の左手が描かれており、爪には赤いマニキュアが塗られて、添えられた文が「たまにはいいもんだね」。絶妙な味のある一枚の葉書に私は唸った。これがスラリと美しい女性の手であったら、受け手には全く意味のないものだ。

以来、あの葉書の中の手が眼の前にちらつく。そう言えば結婚以来十一年、この手をしみじみと慈しみ、爪を飾る楽しみなど思ってみることもなかった。

そうよ、たまにはいいものよ、と自分に言いきかせて私は爪をのばしてみることに決めた。我ながらガッカリする、どっしりと安定感のある身体に似つかわしく、太くて短い指である。晩秋の冷たい北風にさらされながらの沢庵漬や、真冬の雑布がけに、指先はカサつき、皮膚は疲れてくすんでいる。

その日から、秘かに私は自分の手との会話を交わすようになった。水仕事の後には必ずよく拭いてクリームを忘れず、休む前にもせっせとクリームをすりこみ、少しずつのびてくる爪の角を切り整え、短い指が少しでも長く見えるように、祈るような気持ちで我が手のご機嫌を伺っ



た。ときたま、赤い火傷の斑点を作ったり、野菜を刻むまな板の上で大事な爪の先を削ることもあったが、ひと月ほど経つと、爪は三・五ミリほどにのびて、手も心なしか滑らかになった。日に何度も目の前に手をかざし、さてどんな色のマニキュアにしようかと、一人ニンマリするのだった。

そのころからどうにも具合の悪いことが重なって、我ながら舌打ちしたくなる思いなのだ。布団の上げ下ろしに、よっこらしょと布団を持ち上げると、つい指先に力が入り、のびた爪がめくれて痛い。子どものずり下がったズボンを上げてやろうと手をかけると、皮膚に爪の先がくいこんで「痛い！」と悲鳴をあげられる。米をといでも爪の中に米粒が入りこむようでイヤな感じ、なのだ。普段よりもわずか二～三ミリのびているだけじゃないか、と思うのだが、その三ミリの余分が生活の邪魔をしているように思えてきて、腹立たしさすら覚える。いやいや、ここでくじけてなるものか！

ある朝、少しも私のこの秘密の企み？に気付くふうもない家族に、宣言をすることにした。宣言することをバネにして、実行に踏み切るのだ。「ちょっとみんな、お母さんの爪を見て！　お母さんはこの爪にマニキュアでお化粧をすることにしたぞお」子どもは二人して、「わあ……すごおい、オニババアみたい」「似合わないからよしなさいよ」などと批判の声を発し、夫は気のない素振りで冷笑をよこした。その顔は明らかに、「お前、無理なんじゃない？　考えてもみろよ、そのごつい手にはよ、マニキュアなんか似合うわけないだろ」と言っているのだ。

私の心は一気にしぼんで、破れた風船のようにプシュッと音を立て小さくなってしまった。化粧品店で行きつ戻りつ、やさしいピンク？それとも鮮やかな赤？と思案する楽しみも含め、マニキュアの夢は消えかかっている。

夜また一人、こっそり灯に手をかざしてみる。せっかくここまでのばしたのに惜しいなあ……でも確かに邪魔だなあこの三・五ミリは……。

やがて土と親しむ季節だ。小さな畑だが野菜作りは毎年の楽しみなのだ。手の汚れを惜しんでいては野菜は育ってくれない。主婦という女の手は物を育て、子を育て休みなく働いている。その手に長い爪は不釣り合いなのだ。

やはり儚い夢だったのか、と思いあぐねて一つだけ効用を発見した。夫婦喧嘩のおりには、またとない武器になりそう！　だが「その日」のために爪を磨ぐともいうのも、陰険で嫌な女の代表のようで、スッキリしないなあ。よし、明日はさっぱりと爪を切ってしまおう。

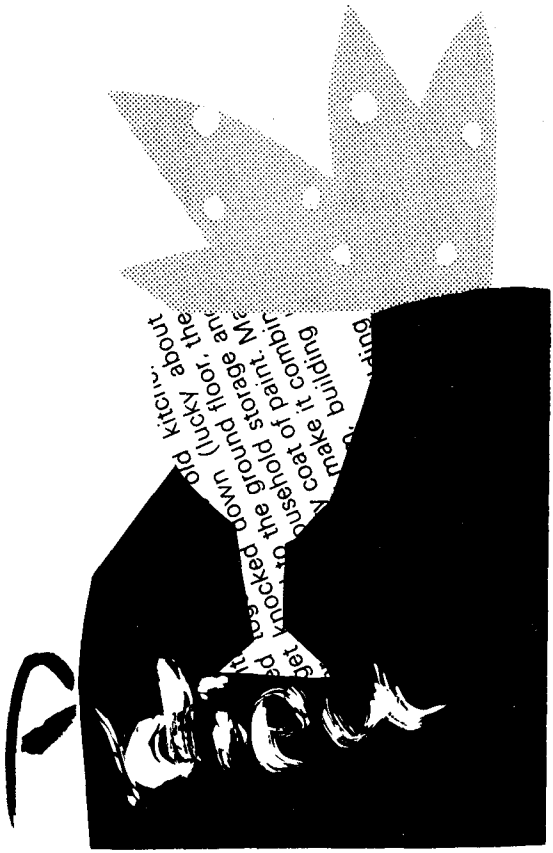
絵手紙を描かれたYさん、北陸の長い冬も、そろそろ終わり、光の春に喜びを肌で感じるころでしょうね。貴女は実行してみましたか、あのマニキュア……。いっときの夢を有難う。

二十二歳の別れ

兵庫県尼崎市　日下　恵子

「なあもう一軒つきあってくれよ」
「もう九時過ぎたよ、あかんわ、家まで一時間半はかかるし、最終バスまでに帰らんと」
「タクシーで帰れよ」
「よういうわ、一万円以上かかるのよ」
「タクシー代ぐらい出したる、つきあってくれよ、俺、家に早よ帰ってもおもしろないんや」
彼はずっと私の腕を掴んだままだ。彼が力を入れると、痛みと懐かしさが混じった奇妙な感覚が身体を走り抜ける。
顔をあげると酔ってトロンとした視線とぶつかる。瞳の奥に、生臭く熱いものがあり、私の身体の奥の何かを崩そうとする。
私は振り切って帰れなかった。
入ったのはカウンターだけの小さなパブだった。彼はその店の常連らしい。
「いらっしゃい、おや、めずらしい」
カウンターの中に、五十を少し過ぎたくらいの男がいて、カラオケのマイクを会社員ふうの客に手渡そうとしていた。
「マスター、俺の彼女や、エエ女やろ？」
酔っぱらった中年の男がよく言う私の大嫌いなセリフ。
「ほんまに、どこで見つけはったんですか」
グラスを並べながら上目使いに私をチラッと見た。好きになれないタイプだった。
客が歌い始めた。
「あなたに、さよならって言えるのは、
きょうだけ
明日になって
またあなたの暖かい手に
触れたらきっと
言えなくなってしまう
そんな気がして」
今はもう解散してしまったフォークグループの「かぐや姫」の曲だ。
「懐かしいわ『二十二歳の別れ』」
「そうやなあ、俺レコード持ってるで」
「わたしたちが別れたの、二十二歳やった」
「あのとき、俺は別れたくなかったんや」
彼はグラスをゆすって氷をカチカチといわせて言った。

「でも、あなたわりとあっさり別れたじゃないの」思わず口走りそうになった。
「へえ、二人は昔惚れ合った仲？　今夜は恋の再燃ですか？」
マスターが私のグラスにミネラルウォーターを注いだ。
「この人妻帯者よ、三角関係や」
「気にせんでよろしい、この男ね、姉さん女房に愛想つかされてますねん」
私たちは恋人同士だった。高校三年のときから四年間、まるで仔犬がじゃれあうようにつきあい、お互いも周囲も結婚を認めていた。
しかし四年間という時の流れは、私を先に成熟させてしまった。別れは、彼の幼児性が鼻につき出した私からだった。



「年上の女やから大事にしてくれると思ったけど関係ないで、人間性の問題やなあ、俺んとこは家庭内離婚」
私の酔いがスーッと見事に引いていく。
「やっぱりわたし帰るわ」
「なんでや、そんなこと言うなよ」
「そうや、お客さん今夜は大人の恋が始まるんでしょ」
「どうもごちそうさま、じゃあ……」
ドアを開けると背中に曲の最後のフレーズが追っかけてきた。
「ひとつだけ
こんな私のわがまま聞いてくれるならあなたは、あなたのままでいて下さいそのままで……」
「冗談やないで、大人にならん男と大人の恋ができるか、人間性に問題があるのは女房とちがう、おまえやないか、二十二から今まで何をしとったんや、顔を洗って出直してこい」
声に出してそう言ったのは、後手にドアを閉めてからだった。

ある夏の日

大阪市鶴見区　家守　恭子（56歳）

亡父は晩年になってメジロを飼っていた。幼いころ、野山を駆け回って野生のメジロ釣りを楽しんだらしい。飼うについては売買禁止の小鳥なので、誰かが持ち込んだのだろう。

それぞれ一羽ずつ矩形の籠に入れ、小さな擂鉢で大根葉と糠餌を作り、糞の始末や、順に水浴びさせるのが朝一番の作業であった。

次に自分の事務机の椅子に腰掛け、正面の掛時計と正確無比なる腕時計を照合し、一分以上の誤差があれば、おろして裏側の機械にちょっと手を加え、きちんと掛け直していた。

冷え込みのきつい年の暮れのその朝も同じ作業をし終えた直後、二度目の脳溢血の発作に襲われ、眠ったまま年が明けて亡くなってしまった。

夏になり、お盆を機に故郷の墓地へ納骨を決め、その前々日、例の時計が午後四時半で止まっている。脚立に上がってちょっと軽くたたき秒針を動かすと、コチコチと動きだした。

翌朝一羽になったメジロに少ししかない餌をさらえて与え、水浴びもさせると、嬉しそうにバシャバシャしていた。

夕方ふと見るとまた時計が止まっている。四時半だ。「故障は同じ針の位置で止まるのかしら」一人言を呟きながら、大通りを隔てた電気屋さんへ両手でかかえていく。

「乾電池が切れたんでしょうか、昨日も

今日も止まりますねん」
若い兄ちゃん、電池を取りはずして眺め、
「これまだイケまっせ、入れはった日付け書いてはりますわ」
見ると筒状の胴にマジックペンで数字が父の字で記されている。機械の故障を電気屋さんへ持ってきたバツの悪さを押して、
「ほな、どこ悪いんやろ」
「もう大分使うてはりますやろ、時計かて寿命ですわなあ」
暑い日射を受けながら、通りを横切って持ち帰った。広くもない事務所は妙に静かで、クーラーの音にも涼しさを感じさせない。
そうだ、メジロの餌も買ってこなくちゃと鳥籠に目をやるが、小さな籠の中を右往左往する姿が見えない。覗くと止まり木より下の簀子の上に横たわり、少し暖か味がまだ残っているようだ。年もとっていたし、今朝の擂餌の水が悪かったのかもしれない。
しかし、父が六十年住んだ大阪を、骨となって故郷へ帰る前日、日課の時計が寿命と言われ、餌を食べ切ってメジロが死に、偶然では片付けられない思いがする。
父が眠ったまま臨終を告げられたのは、午後四時三十分。
今年のお正月、七回忌を修した。当時とは打って変わった暖かい一日であった。

二月のお弔い

大阪市東淀川区　小林　千歳（37歳）

冴えざえとした月夜だった。軒下の寒暖計はマイナス十四度まで下がり、体を刺すように冷えこんでいた。
知らせを聞いてかけつけてきた親戚たちで奥の座敷もいっぱいになっていた。だが人の気配も感じられないほどすべてが静止して、聞こえるのは時計の音だけである。
部屋に入ると、数時間前までは、誰も想像することさえできなかった母の姿がそこにあった。あまりに唐突すぎて泣くことすらできない母の死である。障子ごしの月明かりの中で、母が冷たく硬くなっていくのをじっと見ていくしかなかった。

夜が明けると葬式の仕度が始まった。この村の葬式はまさしくお弔いである。年寄りたちが縄をなって、わらじを作る。男たちは墓穴を掘る。そして女たちは天ぷらを揚げ、すしを巻く。

五十代でしかも急死というつらいお弔いの準備では、皆が無口でひたすら手を動かすばかりだ。

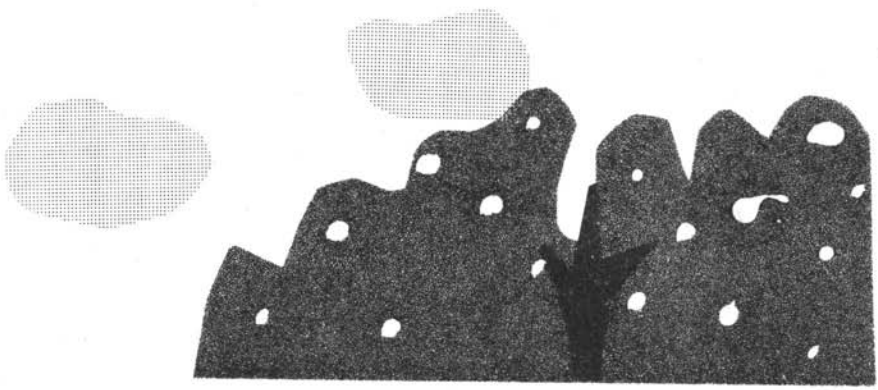
母の娘として私に与えられた仕事は、なんとも悲しい作業だった。母の着物を一枚水びたしにする。それを竿に通して家の北側の軒先に架ける。そして、水気が切れないようにバケツに水を汲んで側に置き、絶えずかけ続けるのだ。そうすることによって、母が冥土へ向かう道中、のどのかわきを癒せるのだという。寒風の中で着物はパリパリと音をたてて凍りついてゆく。カチンカチンになったその上からひしゃくの水をふりかけると、着物の裾には小さなつららができる。悲しみで心の中は冷えきっていても、流れる涙は熱かった。

太陽が頭上にくるころ、お弔いの行列は出発した。裏山にある墓地に向かって、長い列がゆっくりゆっくりと進んでゆく。棺を担ぐ男たちは素足に「おさらばぞうり」と呼ばれるわらじをはく。弟のわらじをはいた裸足が、泣きはらした目と同じ赤い色をしていた。父は、色も動きも無くして石のように黙っていた。

やがて深い穴に母の棺が沈められた。掘り起こされた黒土が再び母を包みこんで、こんもりと盛り上がり、その上には真新しい塔婆が立てられた。肉体は土に帰り、魂は天に昇るというが、とてもそうは思えない。

土葬には、いつでも掘り返せばそこに母がいる、という安心感がある。この、人が人を葬る故郷のお弔いには、残された者への思いやりが、そこはかとなく感じられる。

静まり返った冬枯れの中で、カラスがいつまでも鳴き騒いでいた……。



ワンルームマンション

大阪市福島区　足立　キヌ

息子は名古屋で一人、ワンルームマンションで暮らしている。独身である。

季節の変わり目になると私はそこに出かけ、衣替えや寝具の取り替えなどあれこれ手ばやにすませ、残業で夜おそく帰ってくる息子を待って積もる話の出尽くしたのち、布団にくるまって眠りに就く。

マンションの名はメゾン・ド・ソメイユ、言葉のもつイメージどおりの外観で、私好みなのである。三階建ての白い建物はしょうしゃなという表現がぴったりに思える。艶消しのタイルで仕上げられたそのタイル一枚の大きさと、建物全体の大きさのバランスがとてもよく、陽ざしを浴びると、オフホワイトに輝いて見える。とても美しい。

部屋数は三十室にもみたないこじんまりした造りで、テラスとベランダを交互に配し、上にいくほど部屋数が少なくなっている。

階段室にはアーチ型の窓もみられる。

アプローチのプランターは季節ごとに花がさしかえられていて、入り口脇に植えられたアイビーは建物の裾を飾っている。玄関の二枚扉はダイヤカットのガラスがはめこまれていて、ドアーを押して喫茶室にでも入るような気分なのだ。

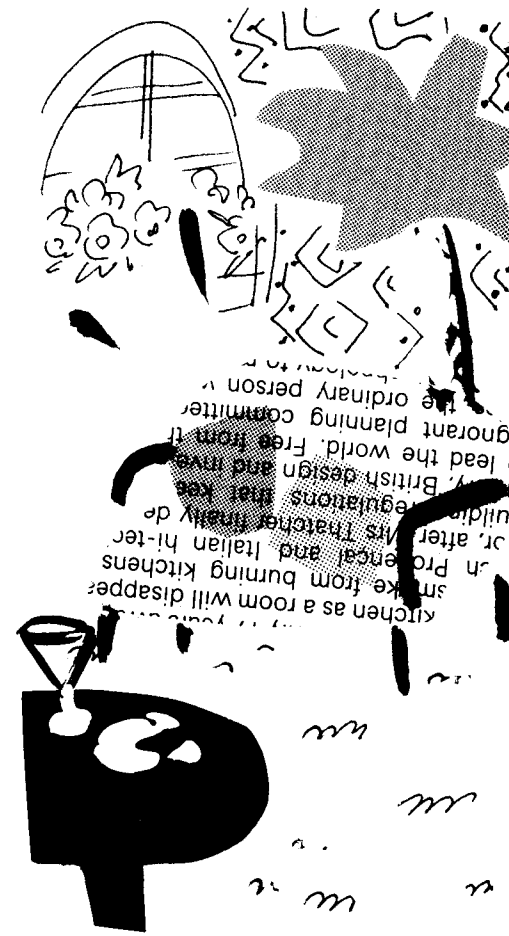
左手に集合ポスト、右手に階段がある。真ん中は中庭になっていて、二、三米もの高さの木が何本も植えられていて、山茶花のかわいいピンクが目にとまる。天井は吹き抜けになっているので、雨の日はなかなか趣がある。

その中庭をとりまいて廊下があり、各部屋のドアーが並んでいる。一階一〇一号室が彼の部屋で、息子にいわせると管理人室の位置だそうで、管理人室ははじめから作られてはいず、ご用の方は〇〇番へ連絡してください、と壁面に掲げてある電話をするのだ。

ドアーを開けると狭い靴ぬぎ場で、右手が流し、左がバストイレになっていて、一米ほどの廊下というよりは通路があり、六畳余りのリビングになっている。

我が家も狭い三ＬＤＫのマンションであるが、ここは、「こんにちは」とドアーを開けると、もうベランダが見える。マンションの外壁が見える。蔦がからまっているのが見える。

リビングには壁ぎわにベットがあり、反対側の壁には整理ダンス、ステレオ、



テレビ、本棚がある。ホームコタツは部屋の中央にあり、掃除機はコタツ脇が定位置なのである。

ベッドの足がわに洗濯物を入れる大きな籠が二つ、使用前、使用後と並んでいて、ベッドの頭がわに洋服ダンスがしつらえてあり、ここだけが空間になっている。

いったいどこへ座ればいいのか？

ベッドに腰掛けてホームコタツに足先だけ入れるのだそうである。なるほど。

掃除は週一回、そうでしょう。これみなどかしてどこへ置くの？

場所をすこしずつずらせて、掃除機を片手にさげて、コードをひっかけないようにだって。後ろに目がついていてもむずかしいこと、ちょっとおしりが当たっただけでテレビのスイッチが入ったり、ちょっとふれただけでステレオが鳴り出したり、わが家の古い製品とはおおちがいなのだ。

ホームコタツの上でご飯を食べて、新聞も読んで、ポケットから出したもの全部並べて、コーラーの缶もビール瓶も、果物のたべかすも飾って、鉛筆とお箸が一緒になっていて、ああ狭いってきれいにしようがないのだとつくづく思う。

つべこべいわれるのを覚悟で自分流に整理にかかる。

思い切りよくたくさんの衣服を抱えてクリーニング屋に足を運ぶ。

洗濯にとりかかる。ベランダの長さが竿の長さもないので洗濯ロープを折り返して走らせ、工夫して干す。ベランダに排水溝と水道栓があるのはさすがであった。

普段はコインランドリーを利用していて、待ち時間はコーヒータイムに当てるとか。

冷暖房は設備があって、一息いれていたら、隣人が帰宅したらしく、曲名まで判るボリウムで音楽が始まった。

わがマンションではついぞないことである。チャッチャカ、チャカチャカとせわしなく、いささか疲れたので風呂にでもつかりたいと湯舟に湯を注ぐ。

家庭風呂の洗い場の場所がトイレと洗面になっていて、湯舟との間に仕切りがない。ビジネスホテルなど利用したことのない私はなじめないが、追い焚きがきかないので躊躇していると湯がさめる。湯舟の中にカーテンの裾を垂らして、それなりの気分になってみたものの、もし今、誰かがトイレを使いたくなったらどうするのか!!

それはあり得ない、ここは一人住まいが前提なのだから、と自問自答する。

立ち上がって石鹸を使い、肩まで沈んで泡を流す。栓を抜きながらシャワーを浴びて、また栓をつめて湯を注ぎながら浸る。湯が思うような温度に上がらなくてさめた湯を抜いたり、注いだり、暖まり足らないまま、電話が鳴り響いて、エイッとばかり湯舟から出ると、鎮座している便器に出くわす。電話はベッドの下で鳴っていた。

「見ると聞くとで大ちがい」という言葉があるが、「見ると住むとでも大ちがい」と思う。

息子が帰ってきた。ドエーンと音をたててドアーが閉まる。

「もう少し静かに閉めたら」と言ったら、「自然にしまるようになっているのにむりだよ」と言う。

そういえば私は音をたてないように無意識に手を添えて閉めていたと思う。

ドアーチェッカーの調節で速く閉まるようになっているのだ。

昼間から何度となく隣室から、いや、二階からも三階からも、ドエーンとこの音は聞こえてきている。残響を残してドアーが閉まるのだ。

そんなことに目くじらたてる人などいないし、気にする人もいないのだ。

ここは単身者向けワンルームマンション、病人も、赤ん坊もいないのだ。いるのは車持ちのリッチな学生さんと、独身貴族。私も明日帰りぎわには思い切りドエーンとやって残響を残そう。また半年ばかり先までさようならと。

（え・カステラネンコ）

わいふ原稿整理方針

◆投稿誌であるので、「原稿尊重」の方針で整理しています。

◆常用漢字表にない漢字または読みであっても、間違いでない限り、原則としてそのまま載せています。ただし次のような語はかな書きに直しています。

又→また　程→ほど　位→くらい　為→ため　事→こと　丈→だけ　方→ほう　様→よう　御→ご　迄→まで　etc

◆送りがなについては、一応次のような方向で統一しています。

例　変（わ）る→変わる　浮（か）ぶ→浮かぶ　話（し）合う→話し合う　気持（ち）→気持ち　行（な）う→行なう　表（わ）す→表わす

◆用字用語の原則は三省堂発行「用字用語辞典」に準拠しています。

◆ハガキ以外の投稿は必ず原稿用紙にお願い致します。

投稿ホットライン――珍獣一匹飼ってます

オットどつこい

粗大ゴミ予備軍の生態記録をとろう！

「だし巻きおミナ」とおだてられ

大阪府豊中市　中松ミナ子

「おい！　だし巻き一本すぐ焼いてくれッ」と夫が、いつもの調子で言った。

我が家は小さなすし屋、夫はしたがってお客第一である。私が今、夕食のフライを揚げるべく油を熱したところであれ知ったことでないのだ。内心（ええッ、またァ）と不服だが、一見柔和そのものの夫が実は相当な頑固者で彼の意に背くなど到底できないバリバリの昔男とは、おしゃかさまでもご存知ない。「あいよッ」私は半ば焼けくそで威勢よく返事する。やがて、いい具合に焼き上がったころ夫は横に来て「さすがに『だし巻きおミナ』や、お母ちゃんのだし巻きは天下一品やで」とお世辞タラタラ。

女房を気持ちよく働かせる法、その一、おだてるべし、の実行らしい。

こちらも調子を合わせて「ありがとう。ハイ一丁あがり！」とす巻きで形を整えて夫に手渡す。

だが、貴重な夕食仕度の時間をさいて焼き上げただし巻きを夫は、お気に入りの女性客へ「まあ一つどうぞ、ウチのお母ちゃんが今焼き上げた自慢のだし巻きです」とかなんとか言って振るまっているのだ。（もうォー）

この関西風だし巻きは料理上手だった母から受け継いだモノだ。関西風の「だし巻き」とは、だし汁を入れなくとも口あたりよく、はんなりした味付けが最大のコツだと私は自己流に工夫して焼いているのだが……。

かつて元気で店を手伝ってくれたころの母は私と世間話を続けつつだし巻きを実に手際よく焼き上げたものだ。

私はそのとき、ただボケーと見ていただけなのに、いつのまにか母の手の動き通りやっていることに気付く。

そして夫に「だし巻きおミナ」とおだてられ、その口車（？）に乗って私は今日もホイホイだし巻きを焼いている。

おかしいですか 私の夫

神奈川県藤沢市　河野　民枝

「ご主人に会いたいわ」「見てみたい！」男女を問わず、仲間によくいわれる。それをきいた夫の弁「戸棚に飾ってありますから、いつでもどうぞ」

私と夫にとってはごくフツーの暮らしなのに、他人は羨ましがったり、おかしがったり。はては女性解放運動をやってる人からは「河野さんちは男性解放運動やったほうがいいんじゃない？」なんていわれてしまう。

ノロケになるか不満になるか、私のオットどっこいをピックアップの例えば集で……。

例えば、親になって半年で、絵がやりたいと会社をやめてしまった（安定一流企業をですよ！）。子供が生まれたのに……という周囲の声に「今じゃなきゃやめられない」とツヨーイ意志。それから勉強を続け、何とか絵かきの仲間入り。食べるほうはアルバイトしたり、就職したり、ゼーンゼン働かなかったり……。

例えば、二人が同時に出かけるとき、私はゆっくり電車に間に合うが、夫はとびのってくる。いつもの朝食の仕度の他に後片づけもして同じ電車に乗るのだから、大忙しの主夫となる。

例えば、私が出かけてる日の夕食は、夫が得意のぎょうざを作り、子供達がそれぞれ一品ずつ作ってO・K。夜中に帰宅する（仲間と飲んで）私を出迎えてくれる。男友達いわく「どうなってんの、お宅のご主人……」

例えば、夫婦の会話三十八分なんて嘘みたい。二人で家にいたら、しょっ中、お茶飲もうかとコーヒーを入れてくれるので、私手作りのケーキを食べつつ、政治、経済、本のこと等しゃべりまくり、「あっ絵かく時間なくなった！」という始末。

育児、家事の分担はもちろん、自分に投資しろと、私が勉強のための出費や時間をとることに積極的協力。仕事は三日でやめたり、展覧会に間に合わなかったりと、ハラハラ、イライラも多いけど、アキナイ連れ合いかも……。

（え・小倉真樹子）

医者と患者とのあいだ

いつも頭を下げていられない私は「可愛気」のない人間なのか

茨城県北相馬郡　勝浦恵美子

(1)

月曜日の朝は雨で、十二月中旬にしては寒かった。三日ほど前から、一歳二か月になる双児の娘達の両方が下痢ぎみで、薬を飲ませないで様子を見るのも、そろそろ限度だった。だが雨では、双児用乳母車に乗せて医院に連れていけない。自動車に取り付けるベビー・カーシートも一つしかない。(二つあっても、大人ひとりで双児を連れて出ては、目的地に着いてから往生するので、一つしか買っていない)　そういうわけで、二人が昼寝している間に、行きつけの田村医院(仮名)で薬だけ処方してもらって、昼食時に飲ませた。

その夕方、灯(双児の一人)が急に吐いてしまった。下痢はひどくなかったのに、吐いたのは昼に食べたもの全部。ベッドや床の後始末に手間取っている間に

も何度も吐く。お湯を飲ませても飲まないし、顔色も悪くなってきたので、医院に連れていくしかなくなった。元気な萌（もゆる）（双児のもう一人）を、お隣で預かっていただき、学校から帰った息子が塾へ行く支度をするのを待って、灯を抱いてもらい（ぐったりしているのでカーシートは無理）田村医院へ連れていった。

車を運転して数分の近さにある医院に着くと、六時になるところだった。何人か待って、灯がその日、最後の患者となった。

(2)

診察室のドアを開けるか開けないうちに、先生の機嫌の悪さがピンときた。医者だって人間である。診療時間を過ぎて、少しでも早く仕事を終わりたい時刻でもある。一日の疲れもあるだろう。

ともかく、診察室へ入るなり、「お願いします」を言う暇も与えられず、「熱はありますか」と聞かれた。灯を抱いたまま患者用の椅子に座ろうとすると、「寝かせてっ」とベッドを指し、いらいらした表情を向けられる。心優しい（！）私はこれだけで、もうめげてしまう。

さて、簡単な診察の間に大体の経過を説明し終え、口を噤んで医師の診断を仰ぐべきときに、おっちょこちょいの私は自分から言ってしまった。

「点滴をしなくていいでしょうか」

こういう言葉が出たのにはわけがある。

息子が小学生のころ、自家中毒のため吐き続けて脱水症状を起こしかけたのを、何度か経験しているからなのだ。お湯も薬も受け付けないそういうときに、点滴一本で回復したのが頭にあるため、目の前の灯を見て、「飲めない→脱水→点滴」と、素人医者のコンピューターが判定したのである。

専門家が「脱水」とも「点滴」とも口にしないうちに、つい先駆けてしまったこの一言も、たぶん先生の心証を悪くしたと思う。

「……しないといけませんね。竹園中央病院（仮名）……」

ここで、また先生に終わりまで言わせず、私は口をはさむ。平生、夫に指摘されている親子三代の欠点である。

「えっ、そんなに遠い所？　私、運転していけません。こちらでは点滴していただけないんでしょうか？」

私としては素朴な質問のつもりだった。

「できません。点滴は長い時間、看護婦がついていないといけませんからね。ここは室もないし、看護婦もいないし（調剤と受付、各一人しかいない）、それに点滴は申請がいるんです」

「そうですか。（心から、がっかりして）前に、息子が隣町の高橋医院（仮名）でしていただいたことがあるんですけど。ここに引っ越してくる前。そこだったら私、運転していけますけど」

「そう、それじゃ電話してあげよう。高橋先生は、私はよく知らないんですがね」と、先生自ら、受話器を取って下さった。

ここまでは医者＝患者（の母）のやり取りとして、なんとか正常の範囲だったと思う。

だが、高橋医院の番号を調べるのに一〇四がなかなか出なかったり、医師会名簿でも捜しにくかったりで、かなり時間を取られてしまった。先生のイライラは憎悪の気配である。

やっと通じて、田村先生、続いて私が電話口へ出たが、高橋医院でも今は、時間外の点滴はすべて共済総合病院（仮名）に回しているということだった。ここで、すぐ電話を切ればまだよかったのだが、私は非常識にも、総合病院に紹介していただけるのかを、電話の方に聞いてしまった。「それは田村先生がして下さるでしょう」という、もっともな返事で、やっと電話を切ったが、この失言は田村先生にすれば、許し難い非礼だったに違いない（と、先に立たない後悔をした）。

（3）

電話を切った直後から、田村医師の機嫌が急に最悪となる。

「高橋先生は結局、何もしてくれないんでしょう？　共済総合病院にも紹介してくれないんでしょう？」

「あなた、うちへ来たんだから、高橋医院なんて言うことはないでしょう？　私が行けと言う所へ行けばいいでしょう？　運転していけないとか、そんなこと言う必要はないんだ！　救急車だって、タクシーだって、何だって行けるんですよ。あわてないで落ちついて、よく考えて下さいよ、お母さん」

私はあわてていたつもりはないが、迂闊なことに救急車も、タクシーも、このときまで思いついていなかった。なぜなら、たぶん、息子のときの経験から、点滴一本さえ打てば、すぐ元気になって家へ帰れると、タカをくくっていて、その一本を打つのも、（早いほうがいいには違いないが）一刻を急ぐとは思いもよらなかったからだろう。だいたい、点滴を打つこと自体、素人の私のほうが言い出したぐらいではないか。（緊急で重大なことなら医者のほうから言ったはず。〇・二秒ほど早く私が先取りしたなんて、神ならぬ身にわかるはずがないのです）

もっと早い時点で、つまり私が隣町の高橋医院の名前を挙げたときか、せめて高橋医院になかなか連絡が取れなかった時点で、田村医師から感情的でない説明をいただきたかったと思う。

「脱水が激しいので、緊急に点滴をしなくてはいけませんね。病院の選り好みをしている暇はないから、竹園中央病院まで救急車を呼びましょう。他のことは一切あと回しで」と。

もし、冷静にして慈愛あふれ、自信に満ちたこの一言があったなら、私は何もジタバタしはしなかったと断言する。だが、それがなかったため、灯の脱水の状態を軽く見た私は、最重要でないことに

気を取られていたのだ。今、初めて耳にした「救急車」という言葉も、腹立ちまぎれの言葉に混じって聞こえたため、かえって緊迫感がなかった。

高橋医院を希望したことを、今になって急になじり始めた田村医師に、私は、非礼を働くつもりはなかったことを弁解しないではいられなかった。

「うちは双児なので、もう一人をお隣に預けてきたんです。息子は塾の時間が迫っているし、近くて自分で運転していける所だったら（他の子たちが余り犠牲にならなくて）いいと思っただけなんですけど」

私としては、もう済んだこと（高橋医院には断わられたあとなので）の弁解のつもりだったが、田村医師には、「まだ、ごねる気か」と聞こえてしまっただろうか。

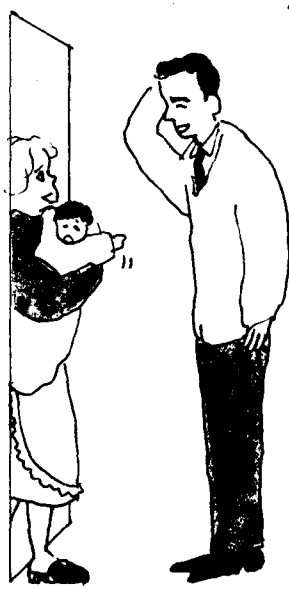
「何を言ってるんですか。他の子のことなんか、どうだっていいでしょう！　この病気の子をどうするかでしょう！」

医者としては正論である。ただ悲しいことに、先生が判断した病状の重さが、このときでも、頭の悪い私に伝わっていなくて、伝わっていないことに両者が気付いていなかった。両方が感情的になるばかりである。

「あ、だって、どうでもよくはありません。一人は隣に預けっ放しだし、息子は運転もできないのに、エンジンをかけた車に置いてきたし」

とにかく息子に事情を説明しなくては。塾を休むように言い、車のエンジンを切って、ロックして、歩いて家に帰らせ、そうそう、家の鍵も渡さなくては。

お隣さんには、「お父さんが帰ってくるまで預かって下さい」と頼みに行かせようか。明の夕食は、お父さんが帰ってからでいいだろうか……。救急車に乗る前に処理すべきいくつものことが頭の中を駆け巡る。灯の病状を、せっぱつまったものと思わなかった証拠に。



(4)

一方、険悪な表情の田村医師が、ベッドの上の灯を指さしてわめく。(と聞こえた)

「そこにころがしとかないで、それをかけてやりなさいっ」

診察用ベッドの上の灯から手を離して、脱衣籠の中のおくるみを取りにいくのに、私は一瞬、躊躇した。ぐったりしている灯が、寝返りを打ってベッドから落ちる心配はなかったかもしれない。けれど「暖かくしてやるより、転落を防ぐほうが優先」という、ふだんの感覚が邪魔をして、機敏に動けなかった。

それが先生には拒否の態度と映ったのだろうか。

「早くしなさいっ。医者として命令します!」

すっかり当惑した私。

「落ちると思うんですけど」とつぶやく。

「私が見てますから早くしなさいっ」

「……あんたはダメだ! 非常識だ! どうかしてる!!」

とうとう、何の建設的意味もない悪口が飛んできた。

「ひどい!先生、ひどい……」

と、私は思わず恨みの言葉を発してしまった。

病気の赤ちゃんと上の子はともかく、もう一人ベビーを抱えた母親ではないか。仮に、まずいことをしたり言ったとしても、そこは大きな気持ちで包み込んで、的確な対処をしてくださってこそ、プロの医者ではないのだろうか。それは建前にすぎないとしても、「非常時」にいる患者(の母)と同じ次元で、医者が自分の感情をむき出しにするのはひどい、と、そのときは思わないではいられなかった。

「あ、お腹が痛くなってきた……私、何かあると、すぐ下痢するんです」

「あんたは下痢してもいいからっ」

こう書くと、まるで漫才になってしまう。けれど、神経性の腹痛を起こしたということは、ここまでの先生との漫才(?)が、私にとって強いストレスだったという意味である。事あるたび、私の体は胃腸をこわすことでバランスを取って、心のほうを救っているように思えるからだ。

腹痛に加えて、心配と恐怖で動悸がし、ガタガタ震えがきそうだった。このまま先生の怒りがエスカレートしたら、どうなるのだろうか。どうやって事を収め、灯を病院へ連れていこうか。

謝るしかない。「申し訳ありませんでした」

二回か三回、この台詞を口にした記憶があるが、速効性はなかった。心がこもっていなかったか、使うのがおそすぎたかのようである。

(5)

自立志向の私としては何ともだらしない話だが、事態の収拾には夫の出番を待つことになってしまった。

田村先生が「あんたはダメだ。ご主人にきてもらう！」と言って、わが家に電話をしたのである。

夫は、ちょうど家に着いて、玄関に置いた私のメモを読み、お隣へ萌を引き取りにいって帰った直後のようだった。「奥さんはうろたえていて話にならない。救急車に乗っていけそうもないから、すぐ来なさい」という先生の言葉に、萌がいるから行きにくいと答えているらしい。が、「すぐ来なさいっ。連れてきなさいっ」という先生の剣幕に驚いたらしく、もう一台の車で、じきに飛んできた。萌は医院の前で、私の車の中の息子にバトンタッチしたという。

夫の顔を見て、私は心の底から安心してしまった。ひどい雲ゆきになっていた二人の人間の間に、新しい一人が入ってくるだけでも空気はがらりと変わるものである。夫だって短気なのだから、最初から私の立場にいたらどうなっていたか、わかったものではない。

でも今は外から入ってきたばかりだから、冷静で礼儀正しく、行動力のある常識人である。先生が「奥さんはダメだ……」と口を開きかけたのを、さっとかわし、「わかりました。先生、よろしくお願いします」と頭を下げた。しかも、親戚が医者である（多い）と、完全な弱者ではないことを、ちらりほのめかしもして。

あとは、あっという間に事が運んだ。田村先生が共済総合病院までと言って救急車を呼び、夫が灯を抱いて乗る。玄関を出るとき、「改めてお礼に……」と夫が言うと、「今日の分だけ払ってもらえば、お礼なんかいりません。もう来てもらったら困ります」という言葉が返ってきたそうだが、それは、私はあとで知ったことである。

私のほうは支払いを済ませて、「お世話になりました」と尋常に挨拶をする。これには、「はい」という普通の返事をいただくことができて、外へ出た。

今夜、置き放しにする夫の車のロックを確かめ、息子と萌が待っていたほうの車で家へ帰る。結局、診察室の中に三十分ぐらいいたことになるだろうか。先生の時間当たりの報酬から考えても、全く合わない患者で申し訳のないことだった。

(6)

「あんたも根に持たれたなあ。相当言わ

れちゃったよ。診察室に呼ばれて二十分ぐらい。奥さんはダメだ。おかしい。私を馬鹿にしてって」

お礼のワインを届けて帰ってきた夫が言う。灯が三泊四日の入院から帰ってきた次の次の日である。

救急車で共済総合病院に運ばれた灯は、ただの急性胃腸炎にしては脱水が激しいということで、腸重積の疑いがあるといわれ、レントゲンを撮られたり、他の検査も受けたそうである。腸重積という言葉は、田村医師から一度も耳にしなかったが、私が思っていたより、ずっと脱水の程度は重かったわけだ。

「あんたも悪いよ。先生は、早くってそればっかり思っていたっていうのに、塾だとか双児だとか、理屈ばっかり言って動こうとしなかったってね」

その「重体なので、一刻も早く」という言葉を言われたとは、今でも、どうしても思い出せないのだ。やはり、これが、先生と私の気持ちをすれ違わせた一番の原因なのだと思う。気持ちのすれ違い程度で済んで、大事に至らなかったのは、本当に幸いだったのだけれども。

「双児、双児って、奥さんは甘えてる、年子や、四人も五人も子供を抱えてるお母さんも来るんだからって言われたけど、確かに勉強になったな。もう双児、双児って言わないようにしよう。双児が大変なのはわかりきってるんだし、どんなに大変かってことは、他人には絶対わかりゃしないんだから」

これも勉強になったことの一つではある。

だが、今回苦い思いをして私が学んだ（復習した）最も大きな収穫は、早めに頭を下げることや、謙虚な態度を取ることの重要さだった。

子供のときから、おとなしいと言われていたが、それはキャッキャッとふざけたりしないということであって、公の場では、一見、臆することの少ないたちだった。どんな「偉い人」にも、自分の意見をはっきり言い、疑問点があれば、すぐ質問し、まちがいでないかと思えば、聞きただしたりなどするほうが性に合っているのだ。夫は、「天皇陛下と向き合ったって、へっちゃらだろう」と、半ば真面目に言うくらいである。実際は、あがってしまうこともあるし、気が小さい面もあるのだが、割合クールなため、他人にはそう見えないらしいのだ。

クールで、理屈を主張し、権威に平伏しない女、と何拍子も揃えば、これはもう「可愛げのない」としか言いようがない。

とはいえ、医者の言うなりに、受けなくてもいい子宮筋腫の手術を受け、大変な目に遭った人もいるのだから、「偉い人」の言うことも、「ほんとかな」と考えてみる習慣は、私は悪いとは思わない。医者も、学校の先生も、大評論家も、親も、つねに正しいことを言うとは限らないのだから。

（え・堀切潤子）

投稿ホットライン――能ある鷹は爪をかくす

職場は多面体

愛すべき職場――死角の部分に何があるか？

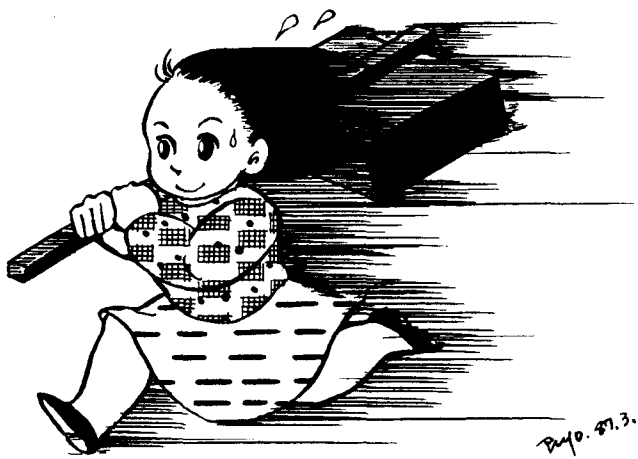
特急に乗って手荷物運び

神奈川県横須賀市　松本　弘子

早くて午前十時、遅ければ午後一時半、電話のベルが鳴り、「仕事ですが？」と言われると、「今日はダメ」、「今日は大丈夫」とどちらかの返事をする。貧乏ヒマなしの私は大抵「今日はダメ」と答え、めったに「大丈夫」と答えられず残念至極の毎日である。

さて、「大丈夫」と答えたら待ったなし、早ければ早いほどよく、干してある布団、洗濯物を五、六分で取り込み、あらかじめ準備完了の夕食のメモを残し、バッグ一つで家を飛び出す。

お金ほしさに、というのは、ある日気がついてみたら、××を守る会、○○を考える会など二十六の会に加入していた私は、いつも会費とカンパに追われていて、そのお金を稼がねばならないので、一回でも余計にこのごきげんな仕事を受



けたいのであるが、やはりそう簡単には受けられないのである。

電話を受けるや、まず、近くのバス停からバスで、手荷物発送依頼主の会社に行く。荷物を受け取るや、再びバスで最寄りの駅に出て上野に向かう。家からこの間約二時間半。上野に到着するや、信越線で特急「あさま」か「白山」に飛び乗る。一刻も早くが身上であるから、私は駅の階段は二段飛び、走りに走る。いい年をして階段から転げ落ちなければ幸いである。特急電車で信州上田駅まで約二時間半、上田からタクシーで十分弱、送り先の会社に手荷物を届けるのが私の仕事、つまり、超宅急便の係というのであろうか？　何の品物かは分からない。その会社でしかできないハイテク製品らしい。

品物を手渡すと、再び待たせておいたタクシーで上田駅に戻る。この間十二、三分。駅に着くや、間違いなく品物を手渡したことを会社に電話で報告、おりから発車寸前の特急「あさま」に飛び乗る。なんともあわただしいが、乗ってしまえば安楽この上なし、必ずかんビールで一人乾杯する。そうして、二時間半後に上野に到着。家を出てから九時間半後にやれやれ家に辿り着くのである。翌日、報告書と交換に交通費とは別のバイト料一万円が手に入る。

車中で二冊は本が読めるので、好きな本読んで一万円とは有難い、と私はご機嫌になるのであるが、こんな旨い話にたまにしか乗ることができないのが玉にキズ、「今日はダメ」が多いのである。

私がダメなら別の人、というふうに待ち人は何人もいるので、依頼主は困らないらしいが、不安定極まりないこの仕事、「今日は大丈夫」と朝から待機していても、お呼びがかからず、待ちぼうけに終わる日もある。

いつまで続くやら心もとないが、乗り物の中が職場、本を読みながら面白く稼がせてもらっているのである。

「書く仕事」甘いもんじゃあござりゃせんぜー

東京都練馬区　宮川　秀子

一月二十四日、土曜日、十数年ぶりで関西に行き、友人である日下恵子さんの主催する「わいふ大阪サークル・書きたい女たちへ」の講演会に出席した。わいふ大阪地区のメンバー多数が力を合わせて演出した、カッコ良くも楽しい講演会であった。

受講者は二百人にもなり、その女性の想いが、高揚が、私にもヒッシと伝わってきた。

会の進行もスムーズで、講演者の話に変化がありおもしろかった。

自称パンツ屋のおばちゃん、日比野都さんのお話には、全員爆笑。

「人間不幸じゃないと書けない」

身ぶり手ぶりの名講演、凄い迫力、説得力。

その後を継いだ高宮みかさん。幸せを絵に描いたような美人の奥さま。以前からわいふ誌上で「うまい文章を書くなあ」と私をウナらせ、アコガレであった方。

「私が書きたいと思うようなことはすでにだれかが書いています。だから自分なりのものの見方で感じ方で私なりのものを書くようにしています」

知的で優雅なお話は、彼女の文と同じ。

しんがりは日下恵子さん。黒づくめの洋服に銀の大ぶりのアクセサリーがピッタリ似合っている。話はそっちのけで眺めてしまった。

最後に、質問を受け付ける。書き方、原稿用紙の使い方、書く時間のヒネリ出し方、など実践的な質問が多かった。

最後の質問「これから書く仕事を始めたいけど、どうしたらできるだろうか。子供も小さいのだけど……」という切実な問いに私は、遠い昔を思い出してしまった。

田中編集長の講演の出だしが、何たって、「素人と玄人の差がないのが書くことです。いや変に慣れたプロの文章よりも、素人の心にせまる文のほうが人の心を打つのです。さあ、皆さんこれから筆を持ってあなたの生き様をあなたの体験を文章にしてみましょう」というのだから、当然、趣味からプロの道というのだって考えられるわけだ。

現実にわいふ投稿者から多数のプロが生まれている。

それでも私は、これから書く仕事をやりたいという女性に「覚悟はイイかい！」と一言おせっかいなことを言いたいのだ。

「書く仕事はそんなに甘いもんじゃあござりゃせんぜ――」と。

ライターをめざす場合、忘れてはならないことがある。文章には二種類あるということだ。

まず第一のものは体験、嘘などで文を書き、人を感動させることのできるもの。随筆や小説（小説は嘘の部分だそうな）、ルポルタージュなど。

綿密な調査で正しい報告ができて、それが人の役に立つもの。例として、わいふのハイスクールレポートがそれに含まれていると思う。

もう一方は営業活動の片棒をかつぐような、物を売るための文章。広告文や、週刊誌の興味本位のレポートなど。

街にはチラシ、広告パンフレットなどがひしめいている。女性誌の裏表紙側はペイドパブリシティーと言われる広告ばかりなのだから、一度良く見てごらん。

二週間で五キロやせます！
シワをのばす手術は、今大変簡単になりました
通常五万八千円の品が三万八千円
一月二十四日からビックリ価格の大バーゲン

毎日毎日こんな広告ばっかり書いている人がたくさんいるのだ。広告文やコピーを書くこと、作ることが、今、一番需要が多い。

林真理子の小説を読むと、その仕事の哀しさ、やるせなさが良くでている。「二流の広告会社で、つまんないコピーばっかり書いている私。いつかどうにかしなくちゃ……」そう思いながら働いている、以前の林真理子女史と同じ立場の女性のなんと多いことか。(もちろん広告だって嘘ばっかり――ということはない。本当に二週間で五キロやせた人だっているし、人の役に立つ部分も多い。でも――)

これから仕事を始めたいという方々、クライアントの言い分一〇〇パーセントの広告文書けますか？　それを何年と続けることができますか？

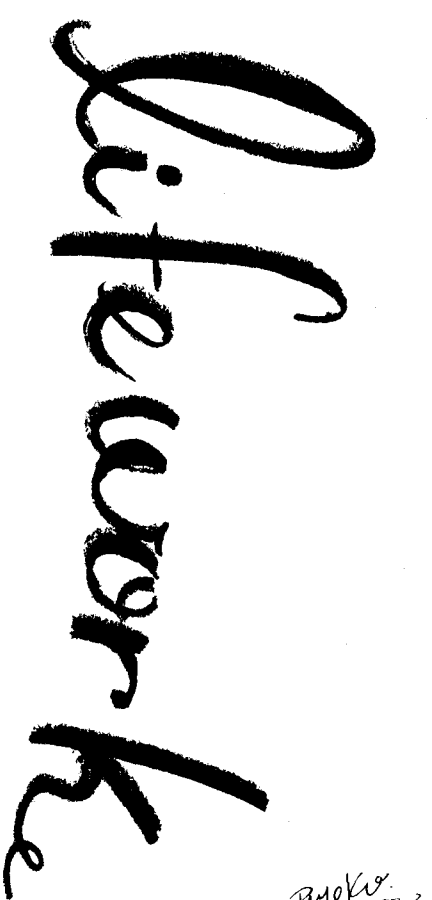
これは本当に自分で金を稼いで、自活していくんだ！と思うことがなければできないことかも知れない。

私は書くことがつまらないことばかりで良い仕事がない、と言っているのではない。ただ書く仕事の大半は、商業主義に毒されているものであることを忘れてはならない。

しかも、金銭的にも恵まれているわけではない。実質的収入は一般事務のほうが良い場合もある。フリーには交通費すら出ないことも。

だから私は、食べるに困らないという人なら、仕事が選べるフリーランスをおすすめする。しかし、フリーと言っても時間に追われ、アポイントメントに追われ、締め切りに追われて大変だ。家庭を犠牲にするくらいでなければ良い仕事はできない。

結構なお仕事で――と思われるのがくせもので、「自分自身を売り歩く営業活動」をしなければならない人だっている。とても仕事を選べるなんていうものではない。広告だろうが何だろうが、書いて書いて書きまくる――なあんて凄いことも現実には。



もし、これで食っていこうと思うならキチンとした会社に入社して、月給をもらうほうが楽だ。それでも、会社の方針もあるから、仕事の質は選べない。多少、自分の思い通りになれなくても忍の一字。

要は何を求めて仕事をするのか、といったところかも知れない。

シナリオスクールで学んでいた友人は「結局、大枚はたいて学校に入って勉強したけど、仕事がないの」と言う。そう、テレビドラマや映画の脚本は書いても取り上げてもらえない、という現実。しかし、とある男性は「ニュースやTVのおちゃらかバラエティ番組など、シナリオの需要は多い。食べていくには困らない」と言う。

この二つの言葉にすべてが要約されているような気がする。

もういいかげん、ライターが知的で素晴らしい仕事だという幻想を捨ててくれ。それでは敵の思うツボだ。シナリオを取り上げてもらうために、「金を積んだ」なんて話はもう聞きたくない。ナンセンス。

書く仕事はすごく地味で、根気がいって、努力が必要な仕事。人脈と運もいる。

それでも、わいふからフリーライターとして巣立った、鈴木由美子さん、日下恵子さんなど、実に良い仕事をしている。しかもそれでかなりの収入を上げているのが羨ましい。

前出の、大阪講演会での質問者の真剣なまなざしに、私は、昔、昔の鈴木由美子を見る思いがした。きっと良いライターになれる人だ。夢を持って、頑張ってもらいたい。

これから先も自由にものが書ける〝わいふ〟を私は大事にしていきたい。田中編集長には、素人の良い文章をいっぱい載せてもらいたいと思う。〝わいふ〟が私たちの心のよりどころとなるよう、大いに期待しているのだ。

そして一度も筆を持ったことのない人には、やっぱり、田中編集長と同じように「素人には玄人にない良さがある。あなたにもできます。さあ、あなたも筆を持って、あなたの想いを、人生を書いて下さい」と言いたいのである。

ごめんなさい　課長さん

神奈川県川崎市　日下部直子

何ていうことはないのだ。一言「また忘れてるよ」と言えばよいことなのに。

年間二千〜三千枚のカードの裏、表に個人番号と名前が書かれてロッカーに保存されていく。私達はそのカードに個人記録をつけていくのが仕事である。表だけでなく裏にも記入しなければならない。一日に百件のときもあれば、二百件のときもある。

多くなるとカードの名前を確かめながら記録するのが億劫になり、つい記録していくだけになる。すると個人記録とカード番号がズレてしまい、電話で当人から照会があるとき、「それはもう済んでいますよ」というと「いえ、まだ済んでるはずがありません」と押し問答になる。こういうことのないように、カードの表と裏に名前を書いてもらうようにした。

千枚に一枚、五百枚に一枚、という感じで記入もれのカードが見つかる。初めは、そういうミスもあるかな？という感じで、私達が黙って書いてあげていた。ところが、一年、また一年と経つ毎に、一枚、二枚……十枚と増えてくると、「やっぱり記入もれがあるってことをわかってもらわないと、これから記入もれは私達が全部カバーすることになるよ。それだけならまだしも、担当さんが『ええ、私、カードの書きもれなんか一枚もありません』って言っているって話も聞こえてきたよ。やっぱり、よくないよ。何も告げ口することはないけれど、本人さんには事実をしってもらうことも必要よ」というような空気が私達の間に広がってきた。

軽く、そうかるーく「ねえ、記入もれ。書いといてね」と言って済んでいた。けれど、いくら軽く言っても、何度も重なると、たとえそれが自分が原因のミスであったとしても、担当さんは機嫌よく直してくれなくなった。「こんなちょっとのことくらいで、いちいち言ってこないでよ」とは口には出さないけれど「ハイ、ハイ」とか「ごめんなさい、またあったの、すぐ書くわ」という返事がなくなってきた。

うちの係長さんに言って、係長さんがあちらの課の係長さんに言って、あちらの係長さんが担当さんに言うというように「スジ」というものを通せばいいのだろうが、それをすれば、かつては○○の女王と言われ、仕事を通じて少なからぬ影響力を誇っていた担当さんのその力の衰え（？）を皆に知らせることになる。人より少しでも早く紙数を数えること、分類すること、書けることに職場生命をかけているようなこの人に、それを感じさせるのは酷だと思う。

もう、私達は記入もれがあっても、黙ってカバーすることはしない。書いても

らいに担当さんの所に行くこともしない。たかが、仕事上のミスのために担当さんとの友人関係を壊したくないし、また記入もれがあっても、ホンの一秒で名前の確認はできるのだ。ホットケ、ホットケという空気が広がっている。

よその会社の話を聞くと、なんとケッタイなところだ。仕事の効率より人間関係をとるなんてと思うようだ。

でも、私達みたいに、「仕事生命」じゃない人達にとって、効率なんてどうでもいいのよね。人間関係が大事なの、ごめんなさいね、課長さん。

時は金なり！　主婦はパワーなり!!

東京都武蔵野市　由美あき子（28歳）

主婦になってまだ四か月です。主人との二人暮らしにもリズムができて、春の訪れとともに私の心は「時は金なり」の如くアルバイトでも見つけて外へ出てみるか？　などと思い立ち、夕飯の買い物がてらに求人情報雑誌を小脇にかかえ、家路へと急ぎます。食事もそこそこに早速穴のあくほど見つめて探すものの、なかなか条件に合わず、ため息ばかり。

この様子に主人はあきれるばかり。おまけに「主婦業が本業なのだから、それを忘れずに……」と言われる始末。いい仕事はないものかと、はやる気持ちが縮まぬうちに、数社へ電話を入れてみた。結局説明会場へ出向くようになったのは一社だけ。内容は週三日、午後一時から五時まで（ただし残業あり）、時給八四〇円、業務は原稿チェックであります。久しぶりに履歴書を丁寧に書き、気分ウキウキ出向いたものの、待ち受けたはマークシート方式による一時間半のテスト、座席を埋めるヤングパワー。どの顔も皆若い。マークシート方式テストも手慣れたもので、進み具合が早いのなんの。新米主婦はここで負けじと頑張った。目はチカチカ!!　肩コリコリ!!　頭はボォーッ!!

一週間後の通知には㊙の文字と、あんなに丁寧に書いた履歴書が同封されていたのです。現実は厳しい。

でも不採用の通知が火種となって、ますますやる気が出てきました。そして見つけた着物展示会での説明案内。五日間の講習と展示会二日間でその給与の他に交通費支給、さらに売り上げ額の歩合がプラスアルファーされるというもの。ノルマらしきものはお客様を集めること。不安材料が多かったが講習会中に解消してゆき、基本給与と交通費だけ頂ければ良しとして、まずはチャレンジあるのみです。何セ、このアルバイトに関しては、私はヤングなのです。でもパワーのほうはベテラン主婦にはかないません。時は金なり！　主婦はパワーなり!!

（え・田井亮子）

投稿ホットライン――物いわぬは腹ふくるるわざ

マジの発言

黄色い声、赤い声――五色の声でもの申そう！

脳死問題はあなたにも

香川県小豆郡　広瀬サカエ

二月十二日、大阪大学医学部付属病院は、「脳死判定に関する委員会」設置を決めるとともに、同病院判定実施要項を正式決定した。

この種の委員会設置は全国の国公立大病院では初めてで、心臓、肝臓移植を同病院で将来、実施するための一ステップとして注目される。

このニュースに接しても、多くの人は、我々には関係ないと思われるかもしれないが、決してそうではない。

私は、かつて「脳死」した人と、その肉親の人達と同じ病室で、何日か過ごしたことがあり、このニュースには、慄然とした。

母が心不全で緊急入院したときのこと。「ＩＣＵ」といわれる病室に収容された。

重症の患者に、種々の機器を駆使して治療を施せるように、集中管理された病室である。そこは、酸素吸入器、人工呼吸器などの生命維持装置の外に、心電図、脳波、血圧、体温など、患者の状況がモニターされる機器が備わり、隣の看護婦詰所で四六時中管理されていた。

人工透析をしている人、酸素吸入を受けている人など、その病室の患者は何らかの機器を装着したり、使用したりしていた。

母は入院して、三、四日は危篤状態が続いたが一週間もすると一応危機を脱した。

そのころ脳卒中の人が担ぎ込まれた。救急車で運ばれてきてすぐ、ＣＴ検査（コンピュータ断層撮影）を受けたという。

六十代のその男性は、真っ赤な顔をして、大鼾をかいており、泥酔して眠り込んでいるように見えた。医師と看護婦によって衣服が切り開かれ、吸引管が口か

ら咽に通される。脳内出血により、脳内の圧力があがり、手術をすると、脳があふれ出るので、手がつけられないとのこと。

昏睡状態が四、五日続いた後、人工呼吸器が装着された。その時点で脳波が消えたとかで、脳死ということになったらしい。

自分の力では、食べることも、排泄することも、呼吸すらもできないのに、栄養剤や薬が点滴によって注入され、人工呼吸器で空気が肺に送り込まれて心臓を動かしているのだから、無理やり生かされているとしかいいようがない。それなのに、見たところ血色はいいし、胸が動いているので、種々の機器が装着されているのを度外視すると、眠っているとしか思われない。

しかし、医師の話によると瞳孔は開き、脳はすでに溶けだしているという。

病院に来てすぐ、CT検査を受けた時点で、四、五日の寿命と宣告されたそうだが、人工による延命治療で、その人は二週間生き続けた。

脳波がなくなって脳死と判定されても、いったん装着された人工呼吸器は、心臓が完全に停止するまではずせないそうである。

そういう状態が何日か続くと、肉親の

人々は、一日でも長く生きていてもらいたいと思う反面、助からないものなら、床ずれができ、咽から吸引されるものが血液の混じったうみのようになってくるのを見るのは、たえがたいもののようであった。

そうなると、栄養の補給を減らして、体力をなくし、心臓の停止を待つより方法がないとのこと。

私が出会ったのは、内科的な損傷から脳死に到った人であったが、交通、転落、強打などの事故が原因で、脳内出血や脳挫傷も起こるわけだから、同じような状況にいつころがりこむかわからない。

もし私が、体温も鼓動もある肉親を前にして「我が病院の脳死判定基準を満たしましたので脳死と決定しました。内臓移植にご協力下さい」などと言われたら、どうするであろうか。

医学の進歩は、私達に多大な恩恵をもたらしてくれたが、反面、冷酷な事態をも生み出しているのである。

原子力船「むつ」の恐ろしい「廃船」

千葉県市川市　近藤　美子

原子力船「むつ」の関根浜新母港建設は、一九八九年（昭和六十四年）の春完成にむけ着々とすすめられています。見ている間に、トラックに積まれたテトラポットや砂利が現場へ運ばれていくのです。新母港が完成されれば、現在大湊港（おおみなと）に係留されている「むつ」はここにやってきます。そして、ここで二年間出力上昇試験などの実験を行なった後、廃船となる予定です。

「むつ」といえば一九七四年（昭和四十九年）九月一日、出力上昇試験中に出力一・四パーセントで放射線漏れをおこし、試験は中止されています。今度の実験でまた放射線漏れ事故をおこす可能性は充分にあります。

原子力第一船が「むつ」と命名され進水したのは、今からおよそ十八年前の一九六九年（昭和四十四年）六月。実験が行なわれるのは八十九年ですから、実に「むつ」は進水してから二十年たってしまうのです。はたしてこれで実験ができるのでしょうか。「むつ」の燃料棒は実験できる状態にあるのでしょうか。

「出力上昇試験を終えた『むつ』は、原子力発電をフル稼働させたあとと同じぐらい危険な状態になります。いくらそのあと廃船にするっていっても、そんな危険なもの、どこもひきとってくれるわけがない。関根浜に永久に危険な状態で係留されることになります。だから、今廃船にするのと実験のあと廃船にするのでは、意味が大きく違うんです」と浜関根出身の松橋勇蔵氏は語る。

今の日程では、新母港は八十九年に完成、そのあと二年間実験、九十一年には廃船となります。と同時に関根浜新母港は「むつ」の墓場となるのです。新母港

だけではありません。あたり一面の海や陸や空気が放射能に犯され、あたり一面が墓場と化す可能性は強いのです。

いいえ、昨年のチェルノブイリの事故でもわかるように、放射能は私の住む関東のほうまで徐々にやってくるでしょう。そして全国へ広がっていくのです。

冷たく青い海に浮かぶ白とピンクの廃船「むつ」は、危険ゆえに見る者を近づけさせず、永久に漂うことになるかもしれません。

まだ間に合います。下北半島の原子力船「むつ」を今すぐ廃船にしましょう。自分のために、他の人のために、生きとし生けるすべてのもののために！

私にとって「書く」意味

神奈川県横浜市　片山　節

日記もつけない。〝わいふ〟も十年間購読したが一度も投稿したことがない。手紙もあまり書かない。

確かに、日本語で文章はほとんど書かなかった。だが、ここ四、五年英語で、エッセイ、一幕もののプレイ、ショートストーリーなどを一か月に二篇は書いてきた。最初の目的は、単に語学の力をつけたかっただけである。しかし、二、三年経つと、効果はそれだけではなく、書くことによって精神的にも成長することが分かった。

私にとって「書く」ということは、ほとんどの場合、自分に語りかけ、自分を叱咤激励することである。自己分析によって、少しでも強く、そして有意義に生きようと努めるのである。自分がどういう人間であり、本当は何を求め、何を喜びとし、また、どのように自分を活かすか……などを知るのに、書くことは有効な手段だと気がついた。

また、書くということは、私にとってはカタルシスである。確かに、恋愛感情、憎悪、悲嘆なども書くことによって、浄化され、昇華されてきた場合が多い。実際、泣きながら書いた作品も数篇あるし、また、相手に伝えられない思いも、作品の中だと思いきり表わせる。（ことに英語だと精通してない強み？もあって、臆面もなく表わせる利点がある）

私にとって「書く」最大のメリットは、それによって「心の平安」が得られることである。書くことは、考えることであり、自分を見つめることであるから、自分がどのような生き方、考え方をすれば、自分の運命、人生にある程度満足し、幸せに感じられるかを考えることでもあると思う。書くことは、自分なりの哲学をも確立することではないだろうか。

四十数年慣れ親しんだ日本語でさえ、自分の考えを満足に表現できないが、心の安定、自分の成長をめざして書いていこうと思う。

（え・岡田正子）

とともに

——私の放浪の旅——

法村香音子

連載 2

八路軍

優しい大地

十一月の中旬ともなれば中国の東北地方は真冬だ。朝は霜柱が立ち、夕方になると通りすがりの村の、村びとが道に撒いてできた水の溜りに氷が張った。

夕暮れに村を通過するとき、そんな氷が遠ざかるのを見ると、私は泣きたいような気持ちになって、誰にともなく「もう寝るね」と言って布団を被ったものだ。

舞扇をおさめるように、すーっと山に陽が沈み、かわりにどっと訪れた闇に山すその民家のあかりが暖かそうなほおずき色にともっているのが目に入ると、家のなかを覗いてみたい衝動にかられた。

馬が倒れて荷物が河に落ちた日、陽のあるうちはまだよかった。夕方になると、河に落ちて濡れたものが徐々に凍り始めた。母と子供三人で一つの布団にくるまり、行きどころのない鼠みたいに箱の隅に縮こまって震えていた。

陽もとっぷり暮れて、みんなの顔もよく見えなくなったころ、「白菜地」に着いた。

そこは、中国の地図にも確とした地名が載っておらず、「それは、ここだ」と言うことができない村である。そこがなぜ「白菜地」と言うのかも知らない。

白菜地（パイサイチ）と言うところだ、と教えてもらったが、たぶん、このあたりだろう、と、指で地図の上をぐるぐるなぞることができるだけである。

遠くに山が見える、広い平野にある部落であった。

村に近づいたとき、侯さんが私達の馬車まで歩いてきて、今夜はあの村に泊りますよ、と告げてくれたときは、お礼も言わずに、

「わあ、よかったあ！……ねえ、母ちゃん！　ねえ、嬉しいね！　のんちゃん！」

思わずはしゃいでしまうほど嬉しかった。

遠くから見たときの村は、闇にうずくまる獣のように、黒く黙りこんでいるようだったが、村にはいると犬が激しく吠えながら何匹も集まって来て私達を取りかこみ、家の中から子供たちも大人も出てきた。

犬が私達に向かって吠えつくことさえ、私には嬉しかった。

少し離れたところで、私達をとりまいてウォンウォンと吠える、大きな犬の青い目が幾つも光っていた。でも、吠えながらゆっくり馬車の近くに近寄って来た犬たちをすかして見たら、尾っぽを振っているのも見えた。私は馬車の上から日本語で、

「よしよし……、よしよし……」と言ってやった。

おとなに叱られ、犬たちはしばらく不満気に吠えていたが、やがておとなしくなって、馬車から降りて歩きだした私達の後からついてきた。

私達はそれぞれ自分の風呂敷包みと毛布を抱え、八路に案内されて農家に行った。

低い軒下の紙の窓がぼんやりと明るかったが、足もとも見えないほどあたりはほとんど真っ暗だ。

その家の入り口に、またぐほど高い板があるものとは知らず、私も、続いて小さい妹を抱いている母も、それに蹴つまずいて転びそうになった。

中国の民家の入り口の戸は、全体で幅一メートル二十ぐらい。二枚の板の観音開きになっていて、お陽さまを迎え入れるように、内側に開く。蝶つがいは使わず、戸の端の上下を丸棒状に削って敷居とかもいにはめ込んで開けたてするようになっており、戸締りは上下二本のカンヌキでする。

つまずいた敷居の板は、厚さ四、五センチ、高さが二十センチぐらい。これは雨や風が侵入するのを防ぐと同時に戸のストッパーの役割をしており、どの家の敷居も真ん中あたりがいつのまにか擦り減って緩やかな凹みになっていた。ちょいと腰掛けるのにはまことに都合が良く、そこに阿姨（アーイー、おばさんのこと）たちが腰掛けて、じゃがいもの皮を剥いたり、いんげん豆の筋を取ったり、ときには茶椀と箸だけ持って出てきてご飯を食べていたりしていたものだった。

敷居にちょいと腰掛けるのは人間ばかりではない。いつもそのあたりには鶏がうろうろしていて、ひとがいなくなるときを見計らってそこに飛び乗り、満足そうに座り込む。戸口はいつもお陽さまに向かって開いているからであった。

中国の東北地方は寒いから、家は北風に背を向けて建っている。都会は別だが、戸も窓も陽に面した一方にしかなかったように思う。紙を張った窓はちょうど障子の半分ぐらい。下から上へ押し開けて、つっかい棒をする。

私は中国で生まれて十年以上は経っていたのだが、父は別として、そのころまで私も私の家族も中国人の家を見たことがなかった。

都市の家づくりはどうか知らないが、私が見た当時の農家は、戸、窓枠、屋根を乗せるための三角の梁以外に木は使っていなかった。

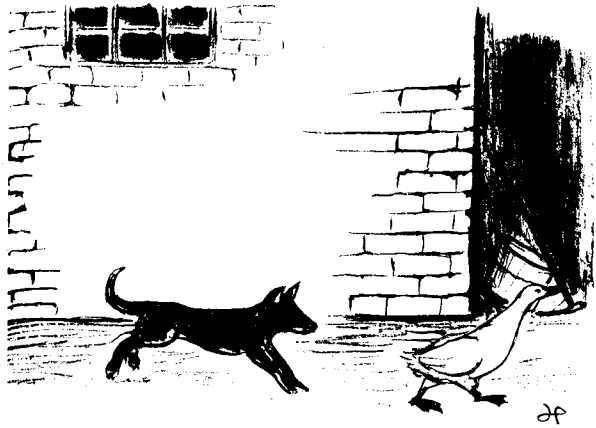
屋根葺きは、梁によしずをかぶせ、その上にヨシの藁かコウリャンの茎や葉を積むが、薄いカワラの屋根の家も多かった。

壁は泥のレンガである。わたしはよく、農家の人達が家の前でレンガを作っているのを見物した。まぐさ切りで二、三センチに刻んだ藁を泥に混ぜ込んでよく練り、木の型に詰めて抜く。30×15×5ぐらいの泥煉瓦を家の前に並べて太陽でしっかり乾かす。積み上げた泥レンガの壁に練った泥を塗り付け、最後に水に溶いた石灰を塗って仕上げる。という具合である。

基礎工事はしない。大地が基礎であった。日本のように溝を掘って固めるなどという面倒なことはせず、泥の煉瓦を大地に直接並べて積んでゆくというダイナ

ミックな家づくりであった。だから家の床は本当の土間である。中国人はこの土間を、いつも実にきれいに掃いていて、どの家もちり一つ落ちていず、床は表面がすべすべと黒かった。

入り口の敷居を跨ぐとすぐが台所になっていて、左か右の壁ぎわが、料理を作り、そして隣の居間の坑（カン）を暖めるかまどになっている。



台所といっても流しや水道があるわけではなく、棚に台所器具が並び、机に、おとなの一抱えほどもある木を分厚い輪切りにしたまな板が載っているだけである。

大抵の家では、かまどには一抱えほどの大きさの鉄の平釜が二つ埋め込んであり、この平釜が、炊く、煮る、蒸す、揚げるまで、中国料理のすべてを受け持つのである。この鍋一つあればなんだってできるのだ。お釜が一つしかない家も見たことがある。

使った平釜をきれいにするのはわけないことで、鍋に水をそそぐとかまどの火ですぐにお湯になり、油も浮き出る。鍋の内側をコウリャンの穂を束ねて作った手箒で、サァーッ、サァーッと撫でて洗い、汚れたお湯を瓢（ピョウ、干瓢をくりぬいたボール）で掬って戸口からおもてに撤く。瓢で掬えない残りの水は、手箒でサッと掬っては土間に振り払い、振り払いしたら、たちまちきれいになってゆく。流しなどはないからほとんどの生活用水は家の前にぶちまけるけれど、コップ一杯くらいの水なら、こうして家の中で土間に捨てればスーッと消えた。

どこの家にも戸のそばに大きな水がめが置いてあり、天秤を担いでバケツで村の共同の井戸から運んでくる。お米を洗うのも、野菜を洗ったり食器を洗ったりするのも、つるべで汲み上げながら井戸端か近くの河ですする。井戸からいちいち汲み上げる手間も大変だから、よほど遠くないかぎり野菜洗いや洗濯はみんな河に行く。井戸からギコギコ汲み上げるポンプのあるところも稀にはあった。

台所と居間のあいだには夏はのれんが掛かり、冬は薄く綿を入れた布団が下がる。それを掲げて部屋に出入りする気分は悪くはなかった。しかし冬は、「出たり入ったりしなさんな。お部屋が冷えるでしょ」と、よく母に怒られるから、端っこを細目にはぐってサッと出入りした

ものだった。

さて、中国人の生活に欠かせない坑だが、朝鮮のオンドルと違うのは、中国人の生活様式は椅子の生活を基本としているので、坑の作りもそうなっている。

つまり居間の半分が坑、半分が土間になっており、土間には椅子や箪笥が置いてあった。昔は、勿論それは比較的生活がゆとりのある人達で、一般的ではなかった。だが、坑がどの家にも備わっていたことはいうまでもないことである。何故なら坑もまた家と同じで、神様が誰にも平等に与えてくださる土で作るからだ。上がりがまちだけは一本の角材を使うが、坑も泥のレンガを重ねて作る。その上にコウリャンで編んだアンペラが敷いてあるだけだ。

ご飯を炊くと火の気が坑の空洞を伝わり、床と家全体を暖める。居間のゆかにコップのお茶など捨てても、中国のその地方の空気は乾燥しているからすぐに乾き、どこの家も部屋の隅には必ず箒が立てかけてあって、とても清潔な感じで暮らしていた。

あかりは、暗い電灯か、さもなくばお皿にともした油の灯であった。

外にいるときは無論、家のなかにいても、寝ているときも土に包まれ、大地に優しく抱かれて暮らしていたのだ。

私達もそういう暮らしをしたが、不便だとも感じず、不満にも思わず、いま思い出しても胸がキューンとなるほど優しさに包まれた生活であった。

お米のご飯は張さんの思い出

話をもとに戻そう。

転がり込むように入った家の中はとても暖かだった。台所の棚の小さなあかりがとても明るいと思った。居間に入ったら六畳ぐらいの坑の上の、長方形のお膳ともいうべき机の上にも、お皿の灯がともっていた。

この家の人達は、私達のために家を一晩貸してくれたのであった。今夜は何を食べたのか、上がった坑はほかほかとお尻が暖かかった。

竈の下を覗きにいったら、まだほわほわとした柔らかなおき火が残っており、竈の壁に寄せてトウモロコシの乾いた根っこが積んであった。

母は急いで風呂敷包みを解くと、河に落ちて濡れた物を、坑の上いちめんに広げて干しだした。生子ちゃんのモスの着物や父のシャツが、みんなの下着が、と

ころ狭しと広がった。すぐに、そこいらからぽやぽやと湯気が立ちはじめ、
「よかった。これなら朝までに乾くわ」
母がほっとしたように言った。
危ない目に遭ったあとだけに、今夜はこんなに暖かい家のなかに泊まれるとあって嬉しくてたまらなかった。私は妹たちと、カマド寄りの壁に近い坑のはじにねそべって、暖かい、暖かいと騒いだ。
「ククー……クオッ、クオックオッ……」
にわとりの声だ。みんなが、ちょっと耳を澄ました。
「コケコッコーオオーー」（中国人には違って聞こえるようだけど）
（なあんだ、やっぱりローチャンだ）
「ローチャンだ！」
妹は急いで起き上がり、父たちふたりが顔をなごませて、「どうぞ……」といった。
張さんが布団ののれんのわきを掲げて、ふざけた表情で顎の髭を突き出し、
「へへーい、ローチャン、到！（きました、あるいはいますという意味）」
といって、若い兵隊のように片手をポンと前掛けの脇につけて、気を付けをした。
土臭い温かさ、心からの奉仕の姿勢と私達に対する情愛に溢れた張さんだった。張さんはわざとガニ股でヤジロベエのように、左右に身体を揺すりながら入ってきた。
張さんはいつもと同じ、褪せて汚れが染みた黄みどり色の八路帽を被り、黒い木綿の綿入れの中国服にだぶだぶのズボンを穿いていた。ズボンの裾を紐で縛って布鞋を履き、大きな風呂敷のような白い木綿の前掛けを腰に巻きつけていた。片手に大きな瓢を抱え、それを思わせぶりに袖で隠すようにして入ってきたのだった。
そして、坑にところ狭しと広げてある衣類におおげさに驚いてみせ、父のあぐらのなかにいる下の妹の頭を撫でた。私も母や生子ちゃんが無事でよかったと思ったから、張さんの気持ちがよく分かった。
張さんは瓢をあかりに向けて、坑の上のみんなに「これを見ろ」というように披露した。その大きな瓢には、真っ白な、洗ったおコメが三キログラム入っていた。
「わあ……、おコメだあ……」
「へえ……」
みんながワッと張さんのそばに集まった。
「ね、ね、きょう食べるの？」
「そうだろうね、今夜食べるから張さんといできたのだろう」
「よかったわね……、おかずは何かしらねえ……」
口ぐちにいっているのを見て、張さんは嬉しそうに得意そうに、ほろほろと歯の抜けた口を開けて、声もたてずに笑った。笑いながら、坑のへりに立って張さんの首に腕を巻いているのんちゃんの背中を、待ってなさい、というように、ぽんぽんと叩くと出ていった。
張さんは、いつもは部隊全員の食事を

作るのだが、お米があるから今夜は私達専属の炊事のおじさんになってくれたのだ、と私は思った。

「わたし手伝ってくる！」

急いで坑を降りて靴を履こうとすると、「のんちゃんも……」と、妹も降りようと坑のふちを行ったり来たりして、暗い土間を透かしてクツを捜している。

「邪魔しなさんなよ」

父もにこにこしていて、いつものように「ここにじっとしていなさい」とはいわなかった。私は妹の靴を捜して履かせ、抱いて土間に下ろしてやった。

私は張さんに真似て、ひげひげのトウモロコシの根を摑んでかまどにくべた。

残り火は食いつくように網目のような根に燃え移り、焚き口にしゃがんでいる三人を明るく照らした。振り向いたら、暗い台所の壁で、私達の影が炎と一緒にひらひらと踊っていた。

張さんは火に勢いがついたのを見とどけると、「これでよし」というように「好了！」と言って立ち上がり、大きな前掛けで手を拭いた。

そして机の前に行くと缶の中から岩塩を摑み出し、大きな輪切りのまな板の上に置いて幅の広い包丁で叩いて砕き、さらに包丁をまな板に押し付けて、手のひらでぎりぎりと揉むようにして細かくした。

中国では塩はほとんど岩塩であり、まったく字のごとく岩のような塩の塊を砕いて使っていた。岩塩はとても味が良い。その当時は塩は大切で、中国人は岩塩をこぶしぐらいに砕き、紐で縛って釘にぶら下げていた。おつゆを作るときなど、それで鍋のお湯の中をぐるっと回したり、チャポンと漬けて塩気を付けるのである。

（うちでは母が岩塩を砕き、お湯に溶かして煮たててあくや汚れを取って煮つめ、さらさらの塩にして使っていた）

次に、水がめのわきに置いてあった柳籠の中から、その土地の名前を代表するような立派な大きな白菜を両手で摑み、まわりを二、三枚バリッ、バリッと剥いで籠にほうり込み、白菜のお尻の真ん中から四つに分けてそのままな板の塩の上に置くと、さくさくと切りだした。

まな板の上の溢れるほどの山盛りの白菜を、そのまま塩揉みにするまではなかなか手際がよくて感心していた。ところが張さんは、それをつまむとパクリと自分の口に入れて味を見、間をおいて（おお……、おいしい）というように目を剥いて見せたのだ。

どんなおかずを作るのかと興味シンシンで見ていた私はびっくりしてしまった。

暗くて分からなかったが、外側二、三枚はずしただけで洗ってもない。気持ちわるーい！　野菜にはウンコを掛けるのに……。

「食べてみろ」と言われる気配を感じたのんちゃんは、いち早く居間のほうに逃げていった。そのころの私達はまだ、粗末なものを食べてはいても飢えてはいなかったし、季節の野菜は豊富に食べてい

たから、何にでもがっつく気持ちは持ち合わせていなかった。

逃げたりしては悪いと思ったのと、いつもひとつテンポが遅れる私がもぞもぞしていると、案の定、張さんは白菜の塩もみを指さして「食べろ食べろ」とやる。私がゆっくり首を横に振ると、笑いながら机の上の大皿に掴み入れ大きく盛り上げた。

そのお皿の白菜を見て、(いままで毎日これを食べていたんだ！) と気が付いた。

ご飯がふきはじめると良いにおいが立ちはじめ、蒸れるころにはいっそう高い香りが台所に満ちてきた。

「うまそうなにおいだな」

そう言いながら、父が生子ちゃんを片手に抱いて、片手で布団をめくり、端っこを鴨居の釘に掛けて出てきた。生子ちゃんはよく暖まったのか珍しく赤いほっぺをして、着替えさせてもらった花柄の着物を着、とても可愛くなっていた。

母も「ホント！」と言って低い鼻をひくひくさせて父の後ろから首を出した。多分おとなも我慢できないのだ。妹が居間に逃げ込むときにご飯の良いにおいを持ち込んだのだろう。そののんちゃんはまだ恐れをなして坑の上からこっちを覗いている。

夜も遅くなり、おなかも空いた上にたまらなくおいしそうなにおいだ。そこへ、

「先生、みなさん、落ち着きましたか……。暮らし（居心地のことか）はどうですか……」と言いながら、侯さんが敷居をまたいで入ってきた。

「ハオ！　ハオ！」父は中国人がするようににぎりこぶしを作り、親指を立てて突き出し、笑いながらそう言った。

侯さんは竈の下をちょっと覗いて、

「いまから食事ですか、コメはおいしいですね。コメは張さんがどこからか持ってきたのですよ。先生のみなさんに食べてもらいたい、と言ってね……」
と言い、やっと出てきたのんちゃんのほっぺたをつついた。
「……今、食糧の関係、とてもワルイです。先生、大変ですね……、おくさんにもすみませんですね……」
幹部はいつも事情を話して父の了解を求めていたそうだが、この夜の侯さんも毎日雑穀ばかりの状態をしきりに謝っていた。
張さんが首を振り振り何かしきりにしゃべると、侯さんは、
「今度はいつコメを食べるか分かりませんから。今日はたくさん食べてください、と張さんが言っています」
あとは張さんと何か話し、敷居を跨いで暗い外に出ていった。あと二十日もすれば今年も終わるというのに、多分今夜も彼らは部落の外れに止まっている馬車で寝るのだろう。
竈のおきが細くなってとろとろしており、ご飯はもうよく蒸れているようだった。
張さんは釜の木蓋に手をかけて、かたずを呑んで見守っている私達に気を持たせるように、脇の下からみんなの顔を見回して見せ、笑わせた。
妹もそれにのって、張さんの前掛けを摑んで「早く、早くう……」と揺すっていた。
張さんが勢いよく蓋を取ったらワッと湯気が立ちのぼり、頭の上の棚のあかりを一層ぼやけさせて、ご飯のえもいわれぬ良い香りが私たちを包んだ。
ご飯は、思わず目を見張るほど、こんもりと半円を描いて盛り上がり、真っ白い地球のように輝いていた。
母ばかりではない。みんな鼻をひくひくさせて「いいにおい、いいにおい」を連発していた。
「目で食べる」というけれど、私たちは鼻が先に食べていた。
張さんが大きな木杓子の「おばけ」でご飯をさっくり混ぜて、次々と大きな素焼きのどんぶりに盛ってくれてからは坑に上がるのももどかしく、それぞれ一生懸命食べた。
そのご飯のおいしかったこと！
香りといい甘みといい、知っているものの何にも例えようのないおいしさであった。
今思っても久し振りのおコメのご飯というだけではなかった。おかずなどなくても幾らでも食べられるご飯であった。
父は大皿に盛った白菜の塩もみをムシャムシャやってはご飯をモリモリ食べ、母も「美味しい、美味しい」と盛んに言っている。
妹と口を揃えてさっき張さんのやったことを言っても、父は、塩で揉んであるから大丈夫だ、いつも食べてたじゃないか、というし、お皿を灯に近づけてよく見てもごみは見えない。妹はついに食べ

なかったが、父や母があまり美味そうに食べるので、食いしん坊の私は手を出した。

これがまた、ご飯と合ってよけいにおいしい。まさに、止められない、止まらない、のだ。張さんはいそいそと台所と居間を行ったり来たりして給仕してくれ、手真似身振りに中国語をまじえ、盛んにもっと食べろとやる。

父や母に、もう、よしなさい、と言われるほどなのに、私は、まだあると思えばもっと食べたかった。

目玉も動かせないほど鱈腹食べた私たちは全員坑にひっくり返ってしまった。

私は仰向けになったまま、あたまだけを父のほうにねじまげて、

「父ちゃん、いつも、ご飯を食べてすぐ横になったら牛になる、って私たちに言うのに……」と言うと、母が、「きょうは別よ……」と言ってウフフと笑った。

痩せている小さい妹だけが机の前で、モスの着物の立ち膝で、まだゆっくりとご飯を掻き込んでいた。私が、首を立てて、「おいしい？」と言うと、口の端にご飯粒をつけたまま振り返り、黙って深くうなずいた。

「へへーい」

そこへまた張さんが、頓狂な声でふざけながら入ってきた。見ると片手で大きなザルを差し上げている。

「ほほう——」と言って父は起き上がった。

「おこげだよ……」

「ええーえ？……それが……？」

私たちは一斉に起き上がって、張さんの差し出したおこげに感嘆の声を上げた。

パリパリのおこげはどこも破れていない見事なものであった。しかし時間とともに、だんだんふちの柔らかな部分から内側に捲くれ込みはじめ、やがて全体が船のようになった。

早く食べてみろと言われても、どうにも無理だ。

「これが旨いんだ」などと言っていた父だが、その父さえもう駄目だと言い、みんなが、こんなことならお腹を少し残しておくんだった、とくやしがった。考えればおこげが出るのは分かっているのに目先のことにとらわれていたのだ。

張さんは、私にまだ温かいおコゲの籠を渡すと、みんなのそんな様子をひと渡り眺め、満足そうに出て行った。

カンのぬくもり、家族のぬくもり

移動中、昼間は張さんや侯さんの馬車に遊びに行ったり、家族五人で一緒に乗っていることもあったが、狭い荷馬車では夜は家族全員が一台では寝られない。いつもだいたい父がのんちゃんを抱いて別の馬車で寝ていた。母はもちろん生子ちゃんと一緒だ。

私は一人で布団にくるまり、できるだけ生子ちゃんにくっついて寝ていた。

布団といっても、中国の布団は日本の布団とはわけが違い、約半分の厚さしか

ない。坑での生活が主だからだ。
中国の家には押し入れなどの物入れがない。坑の焚き口とは反対側の壁ぎわに、薄くて広い布団をたたんで一列に並べ、その上に枕を載せて置く。だから中国人は枕に凝り、刺繍をしたりして美しく飾るのである。
敷き布団というものがないから布団のたたみかたも一定のやりかたがあり、両側と足元のほうを、身体の下になるように折り込んで袋状にし、それを、かしわ餅のようにたたむ。寝るときはそのまま延べて足から入る、というわけである。
兵隊たちは、その形にたたんだ布団をきつく縛って背のうにし、延べればどこでも寝られるようにしていた。
もうそのころになると、山の陰になっている小さな川はどんどん凍りはじめていた。まともな道路というものがほとんどないその一帯での遊撃戦では、凍った川をそのまま道として利用する。馬の蹄鉄は氷で滑って馬車は左や右にガタガタ揺れるし、山あいだから当然日も当たらず寒いことこのうえなしだ。いくらしっかり毛布に包んでもらっても、そんな布団だから夜は寒くて眠れない。
のんちゃんはたった五歳だったから仕方がないが、父が妹の足を股に挟んで抱いて寝ていても「寒いよう……、さむいよう……」とよく泣いていた。
夜になると父が必ず私達の馬車に来てくれた。
「どうだ。香音さん、寒いか……」
と言いながら布団のまわりを押さえてくれる。私は布団の中に頭までもぐり込んだまま、
「寒くない」もごもごという。
「我慢できるか……」
「大丈夫……」
寒いと言ったってこれ以上どうしようもないことだ。（それに、「子供は体温が高いから大人より一枚薄く、っていうのよ」と生子ちゃんが生まれたときに母ちゃんが言っていた。おとなのほうがわたしよりもっと寒いはずだ）と思うと我慢のほかはなかった。それは夏のことだとは知らずに、我慢する理由として思い出したことであった。
寒くなりはじめると、自然に鼻が、「フフン……、ウフフーン」というふうに鳴る。最初は震えていても、本当に寒くなると震えは止まるものだ。背中全体に力を入れ、グッと芯を入れるようにするのも効く。
寝たばかりはまだ身体が温かいから震えながらもうとうととするが、夜中にシンシンと冷えてくると、まず足が冷たくて目が覚める。（――ああ、来たな）と思う。
布団の中の自分の息が、顔のあたりの布団に冷たく柔らかい薄氷の板を作っている。顔だけ動かしてそこはよけるが、身体を動かすことはできないのだ。なぜなら、寒さで目が覚めたときは、いつのまにか足を縮めるだけ縮めてしまっているので、動ける余地がなくなっているの

である。関節を伸ばしたいと思っても身体の周りの、特に足の先の一センチの所が氷のように冷たい。ちょっとでも動けば、私をその冷たさが突き刺すから、魔法にかかったようになって動けないのだ。それなのに、馬車は容赦なく揺れた。

子供でも関節が痛くなる。どうにも足を伸ばしたくてたまらず、勇気を出してエイッと挑戦するが、冷たさに勝てずすぐひっこめてしまう。

そうして一度持ち込んでしまった冷たさは容易にもとに戻らず、手のひらで足の指をにぎっても駄目。寒さは私を縛るように締めつけるのに、まるはだかで野原で寝ているような感じである。

背中が亀の甲羅になったように硬くなり、冷凍海老のように曲がったまま、(早く……、早く朝になってくれ……)と、ひたすら朝の訪れを待つのであった。

うす目をあけたまま、しらじらと明けてくる凍った空をぼんやり見ていて、(わたしはこのまま、お陽さまが昇らないうちに死ぬかも知れない)と思ったこともあった。

もともと寝坊助の私だが、昼間は馬車の隅で汚れた布団にくるまってうとうと眠り、動物の冬眠もこんなものだろう、と思ったものだ。そんなだから、母から「あんたは、ちいさいときからよく寝るねえ」としょっちゅう言われたものだった。

母ちゃんたちは寒くないのだろうか、と思い、自分だけが寒がっているんだ、と思って我慢していた。

我慢したことで小さなしあわせが大きな喜びにつながった。

白菜地のその夜ほど、身もこころも「満足だ」と思って伸び伸びと寝た夜はない。

久し振りに五人揃って並んで寝た。久しぶりに、肌着一枚になって足を伸ばして寝た。お米のご飯を炊いた坑が背中に暖かかった。私にとっては危険も幸せの味付けだった。

家族が揃っていることが、いっそう私の幸福感を増したように思う。

……静かな夜だった。外はきのうよりいちだんと寒いはずだ、と思った。

どこか遠くのほうから、ながーく尾を引く犬の遠吠えが聞こえてきた。

その声にさそわれるように、とろとろと心地良く意識が薄れていくのを感じていた。

私達は小八路

たまたま屋根のある家に泊まらせてもらった夜に雪が降るなんて、まったく私達は幸運だった。

十一月の初めごろからもときどき雪は降ったが、その朝起きてみたら、夜のうちに大雪が降っていたのだ。だから、比較的ゆっくりの、朝八時の出発となった。

東北地方は寒さが厳しいからか、雪はサラサラの粉雪である。風が吹いたりしたら雪の山が、あっちに行ったりこっちに来たり、簡単に引っ越しする。戸の前に雪が吹き寄せられて山を作り、出られな

くなったりすることもしばしばあるのだ。
まだ朝日が昇ってこないうちに私は目を覚まし、外に出てみた。朝になって見ると、その村は三、四十軒の、意外に大きな部落であった。
もう村の道は雪が両側に掃き寄せられ、真新しい白い道になっていた。
うちの部隊の人たちが総出で雪かきをしたのだ。八路は世話になったローバイシンへのお礼の意味で労働奉仕をするのである。
「八項注意」のなかにうたわれているように、「一本の針、ひとすじの糸をただで貰わない」というだけでなく、できることはする、という、「為百姓服務（人民のために）」の実行である。
「革命軍人各各要労記、『三大規律八項注意』――（革命軍人は皆よく覚えておくべし、三大規律八項の注意を――）」
いつでもどこでも八路の誰もが歌っており、部隊が村を通るときは、さくさくという足音とともにこの歌が近づいてき

て、遠ざかっていく、そして彼らはその通り実行した。
旅に出た初めのころのことだった。馬車の横を歩きながら馬車の上の閻トンズ（同志）と話をしている侯さんについて私も歩いていた。
そのころの八路は、大多数は軍服も揃っておらず、かろうじて三八銃といっていた日本軍からの没収品の鉄砲を持っていた。それを担いだ八路の別の部隊が歌いながら近づいてきた。馬車の上のうちの部隊の人たちと、互いに挨拶を交わしいたわり合いながら、ニンニクの匂いをぷんぷんさせて脇を通り過ぎていった。
その歌は日本の軍歌と違い、聞こえなくなるまで、ずっとずっと同じ調子で繰り返し、うちの部隊の人たちもいつまでも歌っていた。
「ねえ、侯さん。あれ、なんていう歌なの？」
うちの部隊の人たちも、歌はあれしか

知らないっていうみたいに、何かしているときも念仏みたいに歌っているので、その単調な節はおぼえたのであった。

「これは八路軍の歌です」

侯さんが私の言ったことを閻同志に通訳したらしく、閻同志はにっこり笑って何か言った。閻同志の言葉はほかの人たちとはだいぶ違い、私にもどこか地方の言葉だ、ということはわかった。

「閻さんが、話して上げますよ、馬車に乗りなさい、と言っていますよ」

私は、断髪に少し白髪が混じってゆったりとした雰囲気の、母より十歳ぐらい年上のこの人が好きだった。

私は馬車に這い上がって、歩いている侯さんと向かい合わせになり、閻同志と並んで座った。

「好孩子（ハオハイズ、良い子）……」

といって閻同志は私の肩を抱くと、私が言葉が分からないにもかかわらず、丁寧に噛んで含めるように話した。そのとき話してくれたのは私に分かりよいものだけであったが、後には全部憶えた。

それはこういうものであった。

三大規律

一、命令には服従せよ。

二、農民からたとえ針一本、糸一すじといえど取ってはならない。

三、敵から没収したものは、すべて提出しなくてはならない。

八項注意

一、泊まった民家を出るときは、寝るのに使用した戸板などをもとの位置に返すこと。

二、人民に対しては言葉づかいを丁寧に、出来ることは手助けせよ。

三、借りたものは全て返せ。

四、壊したら弁償せよ。

五、取り引きは正直に。

六、衛生を重んじよ。

七、婦人をからかったりしてはいけない。

八、捕虜を虐待してはならない。

なんという分かりやすく、なんという当たり前のことで、なんという実行しやすくて、しかも全部たがわずに実行することが難しい規律と注意であろうか。

世界の軍隊に当てはめてみて、いまさらながら、素晴らしい軍隊と一緒に過ごすことができたことを誇りに思う。

「どうですか。分かりましたか？　三人とも私達みんなの宝ものです。部隊の良い子だから小八路（シャオパールー）。今の話も歌も覚えてくださいよ？　閻同志がそう言ってますよ」

私は、肩を抱いて揺すりながらほほ笑んでいる閻同志の目を見て、うなずいた。

閻同志は去年着た服を今年も着たようだ。うっすら汚れた綿入れと身体にしみたさっきの兵隊たちと同じ匂いが私を包んでいた。

（え・早乙女光子）

サークルだより

関西サークルだより

一月二十四日（土）の関西サークル主催の第一回目の講座「書きたい女たち集まれ、書いている女からのメッセージ」には約二百名の人たちが参加して下さいました。サークル結成を呼びかけたのは昨年の八月でした。

それから半年も経たないうちに、このような大イベントを催すことができたなんて、夢のようです。講座開催にあたっては、田中さんや和田さんの温かいご指導と、サークルのメンバーの知恵と努力とパワーの結集を得ることができました。心から感謝いたしております。この誌上をお借りして、皆さまに厚くお礼申し上げます。

そして、参加して下さった遠方の会員の皆さま、また新しくわいふの会員になって下さった皆さま、本当にありがとうございました。

関西サークルは、今後、おもしろ集団として今回のような講座の他に、楽しい企画を考えています。どうぞ、ご遠慮のないご意見などお寄せ下さい。

（日下恵子）

＜わいふ＞生まれの二冊の本

●一冊は編集部のメンバーの一人、早川裕子が書き下した「ルポルタージュ・進学塾」です。（六九〇円）

私立中学への進学熱が高まるとともに、「塾」も増える一方。その企業としての実体を克明に追うとともに、実際に塾に通った子どもたちが塾から何を得、何を失ったのか――母親の目を生かしたユニークなルポルタージュです。有斐閣新書として出版されました。

●もう一冊は「安く入れる有料老人ホーム――入居金ゼロから一千万円まで」（ミネルヴァ書房刊）。

有料老人ホームというと高いものばかりと考えられていますが、どうして適当なお金である程度快適な生活のできるホームもあるのです。三食の献立表つきというユニークなもの。大努力で作り上げました。（一四〇〇円）

対話のページ

投稿ホットライン——あちらを立てればこちらが立たず

購読一年を経て

東京都江戸川区　荻田　一枝

御誌を購読して一年目になります。

去年の今ごろ、〝わいふ〟という女性の投稿誌のあることをテレビの放送で知って、ぜひお仲間に入れていただきたいと思い、電話で購読を申し込みました。書きものするなどとは縁のない会社の会計課に三十五年勤務し、ただ仕事一筋に過ごして、二年前退職した私だったのです。

これからは自分の好きなことに時間を費やそうと、以前から興味のあった文章を書くことに挑戦してみようと思い、暇にまかせ、新聞の読者欄に二、三回投書して、少しばかり自信を得たところでした。送られた〝わいふ〟に目を通し、ページを繰るうちに、他の雑誌にはない新鮮な、生の声の伝わる記事に感動して、読むだけでは満足できず、私にもできるかしらと、思いつくままに、アメリカの娘を尋ねた旅行文を投稿しました。それが嬉しいことに採用されたのでした。

一九九号に、カリフォルニアの旅という題字と、自分の名前の記された本誌を手にしたときは、天にも昇る心地で、何度印刷された自分の文を読み返したことでしょう。エッセイと思われるほどの文を書き、それが活字になるなど、生まれて初めてで、私にとって今までにない会心のできごとだったのです。

アメリカの二人の娘にも送って、一緒に喜んでもらいました。

それに気を良くして、再び投稿しましたら、残念ながらそれは没でした。がっかりして、私にはやっぱり文章を書くなどと、そんな能力はないのだと、すっかりしおれてしまいました。それから半年間、送られてくる〝わいふ〟をただ読むだけで、書きたいという気分を失っていました。

毎回送られてくる号を読むうちに〝わいふ〟は私のような一人者の熟年者の読む本ではなく、少なくとも夫婦揃って子育てに追われ、社会に出ていって、これから何かに情熱を持とうとする、キラキラした目で周囲をみつめているワイフの読む本ではないかしらと、ひがんだ目でみていたのです。ところが、今月送られてきた二〇四号の法村祐子様（七四歳）の文を読んで、改めて〝わいふ〟の読者の層の広いのに驚きました。私より一歳年上の人が、こんな楽しそうな夫婦の会話の文を書いている！　私だって、年齢にこだわらず、何かが書けるはずだ、まだまだ悲観することはないと、気分を一新したのでした。

今月号は特に私の興味をそそる文が多く、

「アエットの目」「ネグロスの荘園」など、今、日本人の視線はますます諸外国に向けられているのだと、痛感した次第です。

私の何より楽しみにしているのは、新連載の「八路軍とともに」の法村香音子様の手記です。かって満鉄社員の夫とともに、旧満州に七年間生活し、終戦とともに悲惨な抑留生活を経験したことのある私にとって、今まで中国のことを書かれたこの方の文には、特に心をひかれておりました。「八路軍とともに」の、巧みな文章の運び、四十年以前の出来事を詳細に書かれていることに感じ入っています。ご奮闘を期待しています。

書きたい女たちの集い

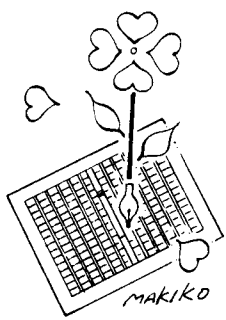
奈良県天理市　岡井美代子（61歳）

田中喜美子さんが関西へ、というわいふの会と知り、「ああお会いしたい」と私は思いつつ、土曜日はもっとも出にくい日やなと、考えていた。娘は「おかあさんが行きたいなら行けばいいのよ、夕食ぐらい男性に頼みましょう」と気軽に言う。土曜は娘のピアノ教室があり、私は孫の世話と夕食作りの家事担当日、しかし夫の協力も得られて、私は朝からイソイソ、ソワソワ、昼食夕食の準備怠りなく、炊飯器の自動タイムをかける。奈良県の山中から会場までは三時間、自分のために講座を聞きにいけるなんて何年ぶりかしらと思いつつ、会場変更の日下さんの葉書を手に電車に乗った。

会場の大勢の参加者にとまどいつつ、中央のよい席に座った。わいふの歴史に始まり、田中さんのお話、そして日比野さん、高宮さん、日下さんと、特色のあるお話に時間の経つのも忘れ、文章の中で知る方達を目前に見ての興奮や、充実した内容に頬をほてらせ、今日出席したことを本当に嬉しく思った。

アマにはアマのよさがある。真実の心のほとばしりを書くことが人の共感を呼ぶ、というお話に勇気づけられる思いで、感銘深く、後半の例文によってのご指導も具体的で、参考になり、活発に質問する若い方をうらやましいとも思った。わいふの編集の方達を一方的に壇上の講師と仰ぐだけで、何となく名残惜しく、ご挨拶してくればよかった、二次の懇談会に出たらよかったかなと思いつつ、帰宅が急がれ、うす暗くなった冬の街を後にしたのだったが……。

娘に「せっかく行ったのに、田中さんとお話しして夕食会にも出たらよかったのに」と言われ、古い女の消極的な自分を反省させられた。次回には是非お顔見知りになって、関西サークルの横の皆様とのご紹介も組んでいただき、お友達になりたいと思っている。ロビーで求めた本を開きつつ、会の余韻をあたたかく思い出し、お世話いただきました皆様に、厚くお礼申し上げます。



（え・小倉真樹子）

老人たちは私の恋人

小林智枝　新潟県中蒲原郡

「もしもし、聞こえませんか。もしもし」

私はいつも受話器を持って、大声を張り上げていました。電話の相手はほとんどが、七十歳八十歳以上の老人で、耳が遠く、私の言うことがなかなか通じない人が多いのです。

私は一年三か月と短い期間だったけれど、恩給支払い事務をしていました。扱っていたのは、昭和三十七年十二月一日地方公務員共済組合法が施行される前に、新潟県の教員を退職した人々に支払う恩給です。したがって受給者は高齢化して、耳が遠かったり、寝たきりだったり、ボケたりする人が多く、死亡による受給者の減少に反比例するように、仕事は困難になってゆく一方で、事務量は膨大でした。

五十七年当時、受給者は三千人ぐらいでした。その人の前歴により年額が定められ、四回に分けて口座に振り込みます。それは電算化されているので、死亡、住所変更、口座変更、などを入力するので

すが、それらの異動に伴う連絡がないために、お金が宙に浮いたり、死亡した人の口座に振り込まれたりするのです。親の死亡を届け出ずに、そのお金を悪用する人もいます。それらを防ぐために、受給権調査を行なって、生存を確認します。死亡後も支払われていた場合は、全額返還させることになるのですが、それが大変でした。

本来ならば、すぐに届け出るべきものを、承知の上で不正受給するような人は、返納通知書を送っても音沙汰なしです。電話したり、手紙を送ったり、東京まで出張して話し合い、ようやく約束しても守らなかったり、ごく少数ですが、悪い人がいました。

恩給受給者が死亡すると、遺族へ支払うことになる扶助料への裁定も、毎月二十件くらいはありました。

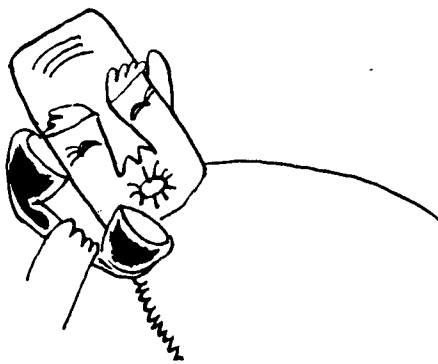
高齢で死亡した親の恩給だけで扶養されている、成人した重度障害者が意外と多いことに、深刻な国の社会福祉の貧しさを感じました。

恩給は給与とみなされ、保険料控除申告書と扶養控除申告書を提出してもらい、年末調整して、源泉徴収票を送ります。

大量に書類を送ると、何通かはあて先不明でもどってきます。そのたびに、市町村役場に電話したり、住宅地区を見て隣の人に聞いたり、刑事のように、必ず行方を捜さなければならないのです。

雪の多い新潟から、冬だけ暖かい関東方面の子供さん宅に滞在する人が大勢おられました。

受給権調査は、生存の確認と婚姻などの縁組みがないかという調査なので、本籍地に居住していない人も多いところから、戸籍謄本を添付させるのは、老人の負担になるだろうと考えて、住民票でもいいということにしたのですが、老人にとって、それが簡単で便が良くなることでも、頭の切り替えがむつかしいようで、相変わらず戸籍法改正前の原戸籍を送ってくる人が大勢いるのです。



あるとき、一人のおばあさんがわざわざ書類を届けにこられました。歩くのもやっとのようで、五階までエレベーターに乗って、よくもまあとお茶をだして一休みした後、肩を抱くようにして玄関まで送り、タクシーを呼んで、運転手さんにくれぐれもお願いしました。そのおばあさんは、老人ホームにおられる方で、久し振りに用事にでたついでに、律義にも挨拶にこられたのです。見送る私に、何回も丁寧に頭を下げて、にこにこと自分の娘と別れるかのように、車に乗る姿に、胸が痛んだのです。

またあるときはおじいさんから、竹の手製の耳かきがたくさん送られてきました。長生きにあやかって、皆で一本ずついただきました。

親の恩給をあてにして、ボケた親をたらいまわしにする、肉親の醜い争いもありました。

たどたどしい、老人特有の読みにくい筆跡で、質問を寄せられる方もおられました。私はできるだけわかりやすく書いた最後に、いつも、体に気をつけて下さいませと、書き添えていました。

○○さん△△さん□□さんと、一度も会ったことのない三千人ものお年寄りを書類の上だけで知り、どんな人だろうと想像するのでした。老いはあわれなものです。トンチンカンな人々を相手に、まちがいなく受給者の口座に振り込むためには、どうしても家族の温かい協力が必要です。私は恩給改定証書を送るときに、家族向けのチラシを作って同封しました。予算がないので印刷屋には発注できず、タイプ室に頼んで、黄色い紙にタイプ印刷で呼びかけました。そのとき「死亡したらすぐに連絡して下さい」という死亡の言葉にためらいました。しかしチラシの効果はてきめんで、口座を変更したいとか、死亡しているとか、連絡が相次ぎました。

一方私は、むつかしい恩給法と戦わねばなりませんでした。大正十二年に作られたもので、時代とともに改正されてきたので、あんなにむつかしくなってしまったのでしょうか。

また、電算化しているといっても、十年前のプログラムで、不充分な面が多く、電算の台帳と手書きの台帳が平行し、事務量もあまりに多いために、情報管理課に働きかけて、新しいプログラム開発をお願いしました。

十年先までのいろんなことを想定しながら、マスターにいろいろ入力し、台帳も一本化し、地方交付税の基礎数値、統計、未給与金の計算などもくみこませ、大量の計算を正確に行なう電算の力をフルに利用して、合理化を図ろうとするものです。幸い担当も熱心で、骨子といろんな表の案を作成した段階で、私は転勤しました。その後後任に引きつがれ、恩給法の難解さから、予定よりも遅れたけれど完成しました。予算がついたから実現したことでした。

役所は今、行革で毎年人が減らされて

います。新潟県は全国に先がけて、毎年大量に減らされています。

行政は複雑多岐にわたり、増える一方なのに、人員は減り、ほとんどの職員が残業続きで、体をこわしている人も大勢います。医者へ行く暇もありません。この状態が続いたら、職員が大変なばかりでなく、きめこまかな住民サービスなど、逆立ちしてもできなくなります。県民にとってもマイナスです。これは重大な問題です。そういう状況の中で、恩給事務も二人で担当していても忙しかったのに、一人でやることになったのです。私は正確にこの仕事をこなすためには、プログラム改正しかないと判断し、早期に行動を起こしたのです。

誰でも老いは順番にきます。頑固になったり、ボケてきたり、醜くなったり、寝込んだり、悲しいものです。しかし老人は世の中を支えてきたのです。不幸であってはならないはずです。私はいつも会ったこともない大勢の老人のことばかり考えていました。そしてふと、まるで恋人みたいだなあと思いました。

一方国民皆年金のもとに、年金法がいろいろ改正されつつあります。国民にとって、決して良くなるものではないようです。

多くの老いた恩給受給者は恵まれているほうで、私達の老後はまったくどうなるのか心細いものです。老人達を知るにつけ、働けなくなった老後は、つつましくとも生活してゆける社会保障が、何よりも大切なことだと身につまされました。

年金法だけでなく、世の中のことすべてが法律によって行なわれます。その法律は政治家が国会で成立させます。しかし政治家は国民が選ぶのです。安心して生活してゆけるように、私達はもっともっと勉強し、賢くならねばならないと痛感します。

（え・万谷陽子）

★わいふバックナンバー

176号　わたしの恋愛体験
177号　肉親の老いをみつめる
181号　PTA・その苦しみと楽しみ
183号　（特集なし）
184号　私の災害体験
186号　お医者さんを診断する
192号　私のやってみたセールス
193号　学校教育への疑問
196号　変わってしまった子どもの遊び
202号　住めば都？　私のまち

四五〇円　以下同じ

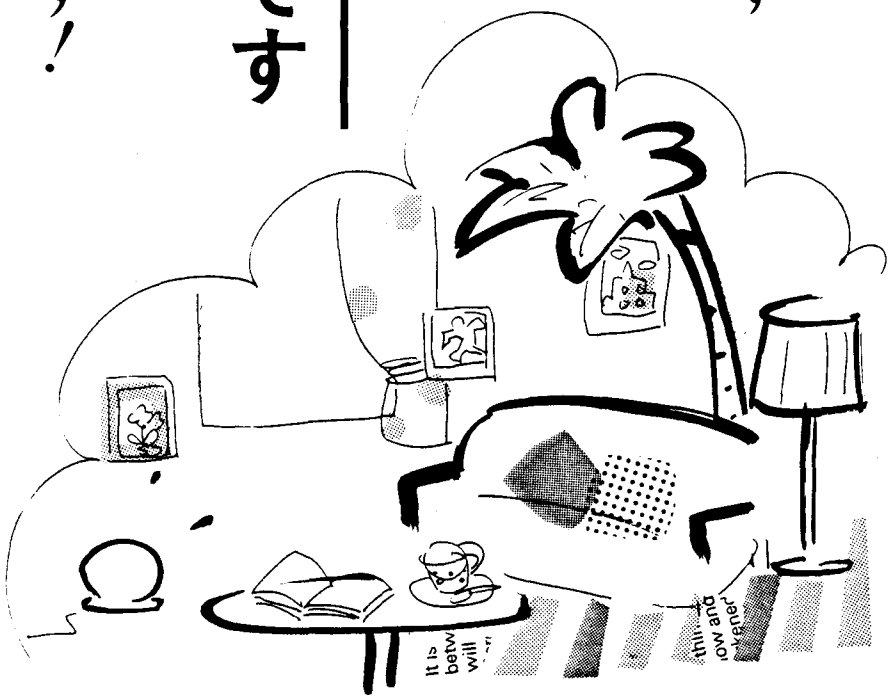
送料は一冊二〇〇円、二冊〜三冊二五〇円、四冊〜六冊三〇〇円、七冊〜九冊まで三五〇円です。十冊以上は編集部で負担致します。ご注文は編集部へどうぞ。

Tel(〇三)二六〇一四七七一・四七七三

甲南不動産(株)は
貸借専門の不動産仲介をしています
貸家・邸・寮・マンションなど
関東一円のネットワークで
貸したい方
借りたい方の
お役に立っています

女性ばかりの職場です

自立できる収入を得て
27人がガンバッてます！



女性特有のきめこまかな感覚でアドバイスいたします

5万のワンルームから300万の豪邸まで

手続きはカンタン！
貸すも借りるも
電話一本
貸したい方は電話で登録
借りたい方もこれまた電話で
スペース、家賃、場所など
条件をお知らせ下さい。
さっそくファイルから
ぴったりの物件をお探しします。
電話で所在地をお教えし、
ご自由に見に行っていただ
けるよう、貸し主さんに手配
しますので、お気軽に
何軒でもごらんになれます。

甲南不動産株式会社　代表取締役　南　かつ子

本　　社　東京都新宿区百人町1-7-15メゾンオグラビル101,102
TEL　03(362)９３１１

代々木支店　東京都渋谷区1-21-11トキワビル3F
TEL　03(374)２５１１

高田馬場支店　東京都新宿区高田馬場2-14-4八城ビル3F
TEL　03(208)７５３１

売 買 部　東京都新宿区百人町1-17-5メゾンオグラビル１F
TEL　03(363)９９７１（土地建物の売買はこちらです）

投稿ホットライン――楊枝で重箱の隅をほじくろう！

マスコミ むしる

プロデューサーの笑顔でころり

東京都西多摩郡　太田　知子

私が住んでいるのは、東京都の西のはずれ、羽村町というところ。「えっ、そんな町が都内にあるの？」十人中九人は必ずそう聞く。隣の福生市は基地の街で有名、向かいの青梅市はマラソンで有名、しかし両市にはさまれた羽村町は全く影が薄い。

その我が町で、一月中旬、ＮＨＫのど自慢の公開録画が行われることになった。そう、素人が歌って鐘がキンコンとなる、ローカル色いっぱいの、いかにも田舎のおじいちゃんおばあちゃんが喜びそうな番組である。聞くところによれば、前の町長さんのときから「羽村でぜひ」と申し込んでいて、その念願が十年振りにかなうとのこと。町はのど自慢の話で持ち切り、出場希望は二千人を越え、観覧希望は六千人にものぼったそうだ。そのフィーバー振りを取材したら面白いのでは、と録画撮りの一週間前に、地元のタウン誌で働いている記者の私はＮＨＫに許可を願い出た。

（実は、取材理由はもう一つある。昨秋ＮＨＫの幼児番組「にこにこぷんショー」が来たとき、往復ハガキで申し込んだにもかかわらず、抽選もれで見せてもらえなかった。ジャジャ丸クンが大好きな息子に、本物を見せてやりたいという母心は無残に砕かれ、「よし、それなら取材で堂々と見てやるゾ！」となった次第。何しろ、ふだんから記者の特権で、美術展も演劇も動物園もタダ見させてもらっているので……）

ＮＨＫを取材するには、広報室の許可がいる。それが手間取ること――「どういう目的で、何を、どのように取材するのか。時間は何分間か」詳しく聞かれたうえ、「制作の者と協議して連絡します」しかし、いくら待ってもナシのつぶて。しびれをきらして二日後にこちらから電話すると、またもや「折り返し電話します」とプツン。ようやく一時間後に許可になった。のど自慢の録画撮りを見学して、入賞者にインタビューするだけの取材の許可に三日もかかるとは、さすが天下のＮＨＫである。

いよいよ当日。会場周辺は黒山の人だかりで、税務課のおにいさんが汗をふきふき自転車の整理をしている。日曜日なのに、役場の職員が八十人も、会場整理に出勤したというのだから、町の意気込みも相当なもの。「羽村を全国的に有名に」と必死なのだ。

会場へはいってまたびっくり、町長さんが舞台の上であいさつしている。何千人もの町民が一堂に会することはそうそうないから、顔を売るのにいいチャンスなのだろう。そういえば、統一地方選も近いことだし……。

ウロウロしていると係の人が、スタッフ控室へ連れていってくれた。グレーのスーツをスマートに着こなし、知的でやさしそうなおじさまが、「今日はごくろうさまです」と笑顔で渡してくれた名刺には、芸能番組のチーフプロデューサーとある。雲の上の人が、一タウン紙記者のためにわざわざ……と恐縮していると、「おなかすいているでしょう。ぼくのお弁当食べませんか」と自ら入れたお茶を添えて持ってきてくれたのだから、もう、天にも昇る心地。

のど自慢大会の録画撮りは、つつがなく進んで、無事本番が終わった。

インタビューも済んで、帰ろうとすると「太田さん、いい取材ができましたか？」と先ほどのチーフプロデューサーが声を掛けてくれた。名前まで覚えてくれて……と再び感激。それ以来、すっかりNHKびいきになってしまった私は、テレビはNHKしか見ないことにしている。

育児のファッション化ここまで

東京都練馬区　新井　祥子（26歳）（絵も）

かの松田聖子の妊娠・出産以来、一大マタニティブームの到来である。妊娠、育児産業は、新人類相手のあの手この手の新商法をあみ出し、ブランドもののベビー服、マタニティドレス、育児用品は百花瞭乱、そして、忘れちゃならない、紙オムツにラマーズ法。マタニティ雑誌なるものも、次々と創刊された。

私は妊婦ではないが、根っからのミーハーなのだ。あまりにも世間が騒いでいるのに耐えられず、つい、某月刊マタニティ雑誌を買いに走ってしまった。（いつも行く書店ではさすがに気がひけて、隣の駅前までわざわざ自転車で行ったのだ）

まあ、見てビックリ、読んでビックリである。まるっきりファッション雑誌。ファッション、お化粧、インテリア、料理、SEX……。ただ違うのは、登場するモデルが皆妊婦である、という点だけ。インテリアのページには、若夫婦が何で十畳以上のリビングルームのある家に住んでいるのか、私にはわからないが、とにかく、その一角に可愛いベビーベッドがあったりする。

上下スウェットのスポーツウエアで妊

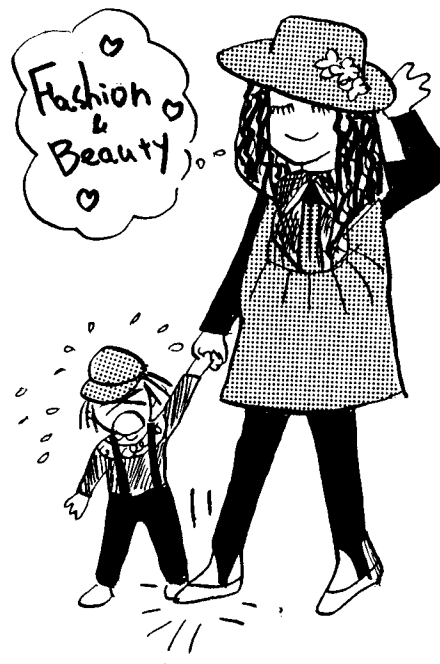
娠中を過ごし、昔なつかしい、自分が二十数年前に寝てたという、お古のフトンに息子を転がしておいた私は、このテの雑誌が遅く創刊されて良かったと、心から思った。

これじゃあ、若い女がホイホイと結婚して、出産したくなるはずである。美しいモデルの微笑と、つわりのゲーゲー（私には全くなかったので、その苦しみは知らないが）、便秘に頻尿、大きな腹を抱えての洗髪なんて、とっても結びつかないゆえ。

さて、そうして、安易に産み落とされたアカンボはどうなるか。今日びの飲み屋には託児ルームがあって、週末には大盛況とか、アカンボを母親に押しつけて、ハワイに行っちゃった松田聖子とか、ミキハウスのバーゲン会場に、子供の泣き声と母親の怒声が響き渡るとか、まあ、いろんな話が伝わってくる。

中でも面白い（？）のに、こういう話がある。熟年・実年の育児ノイローゼが少なくない、というのだ。私の知人に、公務員の嫁さんに代わって、孫娘をずっとみている婦人がいるが、その人のところに、同じような立場のおばあさん（と言っても若いが）が、愚痴をこぼしに集まるという。

若い母親は公園にでも子どもと行けば、同じようなペアが何組もいるから、すぐに仲良くなれるし、一緒にお昼を食べたりとか、買いものに行ったりとか、まあまあ、ノイローゼから救われる道はある。が、熟年、実年は公園でも仲間にははいりにくいし、体力的にすばしこい幼児には手をやくし、髪振り乱して離乳食だ、オムツ洗いだ、と走りまわっても、結局孫は「ママが一番好き」と言うし、良いことがひとつもない。優雅にカルチュアセンターに通う友達を横目でにらみ、孫



をしょって、スーパーへ行くのである。うっぷんがたまってくるのも無理からぬことだ。

私は、働く母親を責めるつもりは毛頭ない。仕事も、育児も、と精一杯やっている姿は、本当に素晴らしいと思う。けれど、妊娠、出産がファッション化し、産んではみたけど、「髪振り乱して育児するよりも、カッコ良くキャリアウーマンしてたほうがいいわ」と公言する母親がポチポチ出現していることは、あまりにあまりである。

もちろん、家庭におさまっている母親の中にも、子どもを生きた着せ替え人形にしている類がいる。コワイ世の中になったものだと思う。

よく言うよ！

東京都多摩市　たかのようこ

スポーツ中継は下手なドラマよりカタルシスを味わえて好きである。最近はカメラ技術の進歩と各テレビ局間の見せ場作り競争（？）もあって、地味なマラソンでさえ一大ページェント化している。

二月二十二日「国際女子駅伝」は最近流行の真横からのショットだけでなく、トップランナーの真後ろから、真上から、と目まぐるしく変わる。臨場感はあるけれどそこまでしなくてもと見ていると、腰あたり（パンツ中心）が何度も真横から大写しになる。足はももまでしか見えないから、足の動きを撮っているようでもなく、ミスショットというよりはカメラマンの意図を疑りたくなる。

二時間余りを、選手には悪いが炉燵でぬくぬくと暖まりながら楽しんで、チャンネルを切ろうとすると、アナウンサーが「世界の強豪は二十代後半から三十代が多く、日本は十代が中心なのでこれから……」と慰めともつかぬ感想を述べ、「陸連」所属の解説者曰く「日本は結婚するとやめてしまうので、早く彼女らにトラックへ戻ってきて欲しい」と。

「ン？」カチンとくる。結婚して家庭に閉じ込めているのは、あなた方「男」ではないか?!「女」の認識の低さもあるが、それはこれまでの歴史上、「男」が活躍するために「女」を家庭や仕事の助手程度に閉じ込めてきた弊害で、あの佐々木選手の「結婚＝引退」を喜々として報道した「男」たちと、当然と思った「女」たちがいたのも事実である。

結婚しようが、出産しようが、性別に関係なく現役復帰が可能な社会であれば、いまさらのように「陸連」の方が嘆くようなことはなかったはずである。まずは「陸連」関係者の家庭から職場からの実践を期待する。

投稿ホットライン――三度のメシより本が好き

生きてます 活字人間

――目の鱗、落としてますか？

終わりなき旅

井手孫六著

香川県丸亀市　山田　幸子

〝終わりなき旅〟とは、中国残留孤児たちの、肉親を求め、自分が誰であるかを捜す旅をさしている。中国残留孤児というのは、日本国家による一種の棄民である。

彼らの親たちは、日本の山村で困窮したあげく、国策によって満州に「排出」され、関東軍の外堀を埋める民間兵の役割すら担わされた。ソ連の参戦をいち早くキャッチした関東軍は、撤退に際して橋を落とし、鉄道を破壊したため、後に続く移民たちの引き揚げは悲惨を極める。

この逃避行のさ中で多くの人々が死に、あるいは殺されたが、かろうじて生き残った幼児たちは、中国人の養父母に拾われ、もらわれて育った。それが今、来日している「孤児」たちである。

日本政府は、敗戦処理の際にもこの問題に着手せず、ここでもまた、彼らは国家から棄てられた。孤児の存在がクローズアップされたのは、実に日中国交正常化後のことである。

歳月は、孤児と日本の肉親の上に大きな変化をもたらし、判明率は低下する一方だ。著者がこの本を著わしたのは、日本の若い人たちが、戦後四十年を経て突然、孤児が出現したかのような不思議の念を抱いていることに愕然としたからだという。孤児とは、満州開拓という国策によって、中国侵略の先兵を担わされた移民たちの歴史的所産であることを、資料とつきあわせて詳述し、明らかにしていく。

本書は、彼らの歴史を追う中で、国家というものの非情さを浮かび上がらせてあまりある本だ。

岩波書店　一三〇〇円

看護病棟日記
宮内美沙子著

東京都新宿区　田中喜美子

一つの職業についている人が、その仕事を続けながらありのままに仕事の実状を語ることは、なかなかむつかしい。ありのままであればあるほど、「さしさわり」になる部分がふえてくるからだ。だから職場レポートはとかく、きれいごとのおざなりの連続になってしまう。

この一冊が、その困難をのりこえて書かれていることに、私は目を見張る思いがした。

病院の中の医師と看護婦の、不平等な関係。ときには看護婦の性を、享楽の対象としてしか見ない医師。

何かにつけては、酒をのむ機会の多い病院内部。酒の席は二次会、三次会とつづき、二日酔で出勤してくる看護婦さえある。

その一方で、苛酷な過重労働を強いる病院の看護体制。病人に十分の力と時間を注げないシステムが、看護という、病人にとって何よりも必要な営みを、どんなに非人間的なものにしていることか。

病人の姿、医師の姿、看護婦の姿。この本はそれらの人々を、清潔ないきいきとした筆で描き出しながら、医療という体制がどんなものであるべきかについて私たちに鋭い問いを投げかけてくる。こんな看護婦さんの多い病院にこそ、病んだら入りたいもの、とつくづく思うのである。

未來社　一五〇〇円

いじめ
見えない子供の世界
須永和宏他著

東京都新宿区　山岸　和子

家裁の調査官として現場で少年問題を扱っている男性四人が書き上げた「いじめ」の本。現場の人だけあって年齢によって異なる、いじめの実体の把握も的確だし、その背景の分析が一つ一つ納得できる。いじめに走る子供、そしてその被害者である子供の双方に見られる「自我」の未熟さ――その点についての徹底的な分析に、とくにはっとする部分があって、みなさんに紹介したいと考えた。

親が子供のわがままを許していたり、逆にあまりにもつきはなして子供に自己主張を不可能にする恐ろしさ。登校拒否、家庭内、校内暴力など、子供の病理現象のはてに「いじめ」が存在するのだという。

どの子にもその可能性のある現代を、恐ろしいとつくづく思う。

慶応通信　一二〇〇円

情報コーナー

●〝やまびこ通信〟でこだまし合いませんか！

わが子、わが校、わがクラスと、教師も親も視野が狭くなりがちです。「やまびこ会」を主宰する私は教職歴二十八年の公立中学校教師ですが、自分の視野を広め、自分の言葉で、教育に関心のある全国の方々と言葉を交わし合いたいと、「やまびこ通信」（全国版）を一年前から発信し始めました。私の手書き印刷通信（B5、八ページ）で、月一回発信。ご希望の方に発送します。

昨年は五百人近くの方々と毎月交信。輪も広がりました。「やまびこ通信」購読料は年間二千円（送料込み）です。

ご希望の方は、住所・氏名・年齢・職業をお書きそえの上、左記あて案内書をご請求ください。

◆〒194-01町田市山崎町九八〇－二　山田暁生　（東京都町田市立成瀬台中学校教諭）

●こんな方いませんか?!

①お手紙あるいは電話で私のお話相手になって下さい

闘病中のため、ほとんど家の中で過ごしています。

いたって好奇心が強く、現在の趣味は、読書、新聞などへの投稿です。四十歳。

年齢性別問いません。

②我がマンションを売ります

◆面積六一・六九㎡　三DK＋サンルーム付（和室六畳、四・五畳、洋室五畳、台所八畳）東南角地の四階（風通し抜群）

◆大阪へは玄関から十五分、神戸へ三十五分

◆昭和五十六年二月建築、施主近鉄不動産

◆価格はお電話にて

◆物価安く、生活しやすいのがメリット

◆連絡先　〒660尼崎市東難波町五－三一－一　尼崎ガーデンハイツ四〇四号　渡辺結城子　Tel〇六－四八一－四二五一

●個人紙〝ぱれっと〟のご案内

昨年末から出しています。一号には、「山田太一の作品にみる悪意と不信」や、「シングルライフ」「光る沼にいた女」などの本の紹介、二号には「応援団はもうやめた!!」や、「樹下の家族」「ソ連人のアメリカ観」の書評、カウンセリング案内などを載せています。お読みになりたい方は、切手百円分（六十円切手＋四十円切手）を同封して、左記までお申し込み下さい。

〒763丸亀市土器町イレブンマンション一〇七　山田幸子

情報コーナー

●〝世界女性の「将来戦略」と私たち〟

浅倉むつ子他婦人研究者グループ編

J・S・ミル〝女性の解放〟ベーベル〝婦人論〟エンゲルス〝家族、私有財産及び国家の起源〟などの歴史的名著の発刊は、今からほぼ百年前のことである。以来、婦人解放の足どりは、世界にひろがった。一九八五年七月、ナイロビ世界婦人会議で採択された〝婦人の地位向上のための将来戦略〟は、その世界婦人の到達点と、二一世紀への展望をしめす歴史的文献であるといってよい。

本書には、三七二項目におよぶ全文が収録され、あわせて同会議フォーラムに参加した十五名の日本婦人研究者（法律、婦人労働、保育、教育、マスコミ等）のレポートが収められている。日本女性の「明日」を考える私たちにとって必携の書というべきだろう。

◆草の根出版会　一六〇〇円

●自費出版しました〝気まぐれ綴り〟

このたび六十歳を記念して、自分の体験したこと、考えたこと、旅行記など俳画をまじえて、本を出版いたしました。

素人は素人なりの面白さがあると思いますので、ご希望の方は左記へお葉書下さい。定価千円、送料はいりません。

◆申し込み先　〒242大和市草柳一－一七－一〇　酒井恵子

●生活詩〝四百字のエッセイ〟を書いてみませんか

日常の暮らしをみつめて、あるいは季節の風物をめでて、ふと心によぎる思いを、四百字のエッセイにまとめているグループです。朝日新聞に連載された投稿によるエッセイ欄、「日時計」の投稿者有志が始めた会。どなたでも入会を歓迎します。

なぜ四百字なのか？　俳句の十七文字、和歌の三十一文字と同じように、散文も四百字という最短の形に凝縮することによって、文章を練り上げ、思索を深められると思うからです。

機関誌〝風声〟、単行本としてまとめた〝四百字の散歩〟、ぜひお読みになってみて下さい。

連絡先・東京都小平市小川東町四－三－四－三〇一　高橋　功　Tel〇四二三－四四－八二〇三

●〝わいふ〟をもとにして時々お話ししませんか

お近くの方（草加市や足立区の方、東武線沿線の方）のご連絡お待ちします。私は四十二歳の主婦で、小五、小三の男の子がいます。

◆連絡先　〒340草加市谷塚町四二－四二　堀場美代子　Tel〇四八九－二四－六九〇四

●関西サークルよりのお知らせ

①文章講座のテープできました

関西サークル主催の講座「書きたい女たち集まれ　書いている女からのメッセージ」のテープをお譲りします。

内容は、

一、主婦の投稿誌「わいふ」の歴史（和田好子）、二、書きたい女たちへのメッセージ（田中喜美子）、三、書いている女たちからのメッセージ（日比野都、高宮みか、日

情報コーナー

下恵子)、四、よい文章を書くために(田中喜美子)、五、いま、ライターに求められるものは(和田好子)で、九十分テープと六十分テープが各一本ずつと資料がセットになっています。

ご希望の方は、郵便振替、神戸五ー一六三六〇、わいふ関西サークル、日下恵子までご送金下さい。代金を受け取り次第テープをお送り致します。テープ代金、二本セット二千五百円(資料送料込)。

②お店で売られていないものがあるマーケット

無農薬野菜、手染糸陶器等色々あり。

◆日時　四月十六日(木)〜二十二日(水)　正午〜夜八時まで

◆場所　スタジオデルタ(大阪市北区芝田町)一階フリースペース(Tel〇六ー三七六ー三九九〇)

◆主催　ぐるーぷおみせ(わいふ関西サークル他女たちのグループ)

これから毎月第三週一週間開きます(五月は十四日〜二十日)。うち一日はゲストを招いてディスカッションをします。

四月は二十一日(火)PM二時〜四時、場所大阪郵政会館(大阪市北区)、ゲスト田中喜美子さんと上野千鶴子さんです。テーマは「夫離れか?婚内の性、婚外の性」、費用千円です。

◆問い合わせ先　〒661尼崎市武庫元町一丁目一七の八　日下恵子またはスタジオデルタ　Tel〇六ー三七六ー三九九〇松井寛子まで。

私のPR

●おむつ外れぬタイツ

一月六日付の朝日新聞(大阪)でも紹介されましたが、寝たきりのお年寄りのためのタイツです。胴回りにひもを通し、ひもにはバックルをつけ、腰を締めると、お年寄りが勝手に脱げなくなる仕組み。伸縮自在なので(フリーサイズ)、おしめをしていても、はかせやすいし、暖かいです。

現在三百着余分があります。ご希望の方は左記へお申し込み下さい。

◆値段　一着八百円(送料別、地域により異なるので郵便局でおたずね下さい。2kg以内です)

◆申し込み先　〒530大阪市北区紅梅町二ー一三　村田美和子　Tel〇六ー三五八ー三七三〇

◆振替口座　大阪〇ー一二〇七九四

●話しかた個人教授します!!

アナウンスと司会のプロフェッショナル君塚京子が〝君塚式話法〟をお教えします。

羽田空港ビルアナウンサー、司会業二十年の実績あり。うぐいす嬢(国、自治体選挙などのアナウンサー)の養成もしております。

結婚式、集会、発表会などの司会も、どうぞご依頼下さい。

◆教授料　三時間一万円

◆司会料　三時間五万円より

◆申し込み先　Tel〇三ー九五〇ー七二八一　AM九時〜十時　PM二時以降

投稿ホットライン――笑う門には福来たる

ファミリー・イン・ブルー

知に働けば角が立つ。情に棹させば――ああしんど！

引っ越しの効用

神奈川県横浜市　黒崎　和子（51歳）

三月下旬のこと、知人の乗用車を頼み手まわりの品を持って移転先のわが家に着いたのは夜七時ごろ、途中の積雪で予定より一時間はおそい。気がせくまま、すでに受け取っていた鍵で玄関に入った私と夫は、意外な光景に立ちすくんだ。

いくつもの履物が散らばり、下駄箱の上には置物から魚の入った水槽まで鎮座している。扉を開くのももどかしく居間に入ると、大風の吹いたあとのように、やたらいろいろな品物がほこりだらけで残っている。本のぎっしり詰まった本棚、普段の食器、鍋るい。流し元の引き出しも古い洋服ダンスも物がいっぱい。風呂場をのぞくと洗面器や子どものバケツが散乱し、洗面所の棚にはトイレットペーパーやシャンプーがあふれんばかり。夫と私は運転してくれた知人の手前も忘れて呪いの言葉を口走った。

それは二十年ほど前、夫の父が主になり夫が全面的に協力して建てた家である。五年後夫が他県に職を得て一家で移住し、あとに夫の父と弟とが残った。弟は結婚して二児がある。ただし父はこの一家と折り合わず、この五、六年別に暮らしていた。

父の希望と年齢からも、私たちがここで父を迎えなければ、と弟に家を空け渡すよう頼んだのが一年前（ただし、なりゆき上、父が戻ることは弟に知らせなかった）、彼らが隣町に建て売り住宅を買ったのが秋、私たちがこの日を引っ越しと決めて通知してから二月は経つ。弟一家は正月休みを新居で過ごしたというし、子どもの転校に区切りの良い時期を待っているだけに見えたので、家はとっくに空になっているものと思いこんでいたのだ。それがこの有様なので驚いた。

確かに大きな家具はなかった。夫がほしい品は全部持っていくよう伝えていたから、前からあった揃いの洋食器、大皿なども運び去られていた。ある程度捨て

るようなものが残っているのは仕方ないと思っていたが、これほどの惨状では次の日私たちの荷物を入れることができない。

少しでも片づけなければと気を取り直したところへ連絡のつかなかった弟一家が来た。幼児も皆外出着姿なので、夫と私はあっけにとられた。時ならぬ積雪のため停電と断水が丸一日続いたので外食してきたという。他の方法が思いつかないので、私たちはいまいましさを胸に収めて片づけと掃除にかかった。

弟たちも着替えてきて一緒になり、夜中過ぎまでかかって残りの品を一室に集め、あとの部屋の掃除をした。さすがに掃除機は残っていたので使ったが、一向に吸い込まない。思い当たって開いてみると、ゴミが何と柄の部分まで詰まっていたのだ。残された荷物は八畳間に置き並べて一杯になり、その他に、押し入れにも物置きにも庭まわりにも、気の遠くなるような分量が残っていたのだった。

翌朝、わが家の荷物を載せたトラックが来た。運送の人達が大きな家具をそれぞれの位置におさめてくれたあと整理に掛かった。こちらの荷物を押し入れに入れようとすると、まず押し入れの品物をどけて掃除しなければならない。空いた段ボールには、端から彼らのばらばらの品々を詰めて積み上げる。体力も時間も一番貴重なときだというのに。「一体、何という引っ越しだ」「だから学校の先生ってきらい」夫と私は言い、手を休めずに動き続けた（弟夫婦は教員の共働き）。

夫は、彼らがいたる所に取り付けた吊り戸棚やカーテンレール、棚をはずし、照明器具もはずした。彼らのするのを待っていたら仕事がはかどらなかったから。それからドライバーを手に、家中のコンセントカバーのねじを締めて歩いた（何と一つ残らずゆるんでガタガタしていたのだ）。

私は掃除に明け暮れた。冷蔵庫と洗たく機をとりのけたあとの床は埃が文字通り堆くなっていたし、台所の床はヘラでこそげるほどの汚れ、食器棚のガラスも両面ともしっかり汚れがつき、そのレールの油汚れは後日サンドペーパーの世話になった。雨戸の裏側の桟には土埃が斜めに積もり、階下の押し入れはかびと覚しき細粉で覆われていた。

数日の間に弟は何回か来ては荷物を運んでいった。そして月末、私達が指定した最終日である。この日、彼らが手伝いの若者と姿を現わしたのは午後も三時ごろ、乗用車で何度も往復してどうやら終わったのが夜の八時。見送った夫と私は言葉がなかった。

この後、天井クロス張り、畳替え、壁ぬりを手配し、浴室改造を終わってようやく自分の家という気がしてきた。この間にも残りのがらくたを捨てに捨てた。

え？　標題がそぐわない？　いや実はこの一連の騒動のあと判明したのである。ここ数年気になっていた私の体重が、まさに望みの線に落ち着いたことが。

海外に重病人二人

東京都杉並区　山本　陽子

昨年の十二月十二日、米国在住の姉のつれあいが倒れた。大量に吐血したので、当初、胃かいようを疑ったのだが、かつぎこまれた病院でさまざまな検査をした結果、骨髄性の白血病と判明。

早朝の国際電話に、私は頭をガーンと殴られたような気がした。「よりによって、不治の病だなんて！　神も仏もないとは、このことだわ」それから、少し落ち着いてから「いや、私より、当の姉のほうがショックを受けているはず――姉は大丈夫なのだろうか」と姉のことが心配で心配でたまらなくなった。

不幸なことは、どうしてこう追いうちをかけるように、弱い者へ、弱い者へと押し寄せてくるのであろうか。

姉は、ここ数年来、心臓を患い、（弁膜症と心不全を併発）、心不全の発作ですでに三回も救急車で入院。その後も発作をおさえるために劇薬を飲み、（発作止め）やっとの思いでソロリソロリと家事をなんとかやっている状態であった。（ゆっくり動かないと即、心不全の発作が出る）

本来ならば、入院して絶対安静の身なのだが、夫も子どももいるし、まして、米国の医療費の高さを考えただけでも、入院はままならない、という状態――そこへ、これである。

十三日早朝の電話を受けてから、七十一になる母は、パスポート（これをとるのに、戸籍抄本やら住民票などが必要）に、ビザにと、都内を縦横無尽に走り回り、二十日にはあたふたと米国へ向けて発っていった。とても七十一歳、しかも自らもリュウマチの持病を持っている人とは思えないほど、すばやい対応であった。

母の滞米中も、病状はどちらも一進一退――白血病のほうは、大量に輸血すると一時的に持ち直す。とはいえ、決して油断ならず、薬の副作用もまたすごいものらしい。

母の帰国後、退院してきたつれあいの面倒を孤軍奮闘して看ていた姉は、とうとうダウン寸前となり、茨城の上の姉の所にSOSをかけてきた。上の姉も二月一日、急きょ出発。重病人二人を寝かせておいて、家事に、通院の付き添いにとまさにフル回転。しかし、茨城の姉にだって家族はいる。三月一日に、姉も帰国の予定。

私はこの間、自分の子ども三人の医者通いばかり。たかが風邪ぐらい、と思うのに、皆なかなか治らない。やっとの思いでパスポートをとったのみ。手をこまねいて何もできないことほど辛いものはない。これが国内であれば、私だって、チビ三人置いてだって飛んで行けるのに――無念！　無念!!

果たして、この先どうなるのであろうか？　茨城の姉の帰国後は、またしても、重病人が重病人を看なければならない。なんとか、共倒れにならないように、とそれを祈るばかりである。

女性と家庭

兵庫県宝塚市　井上　恵子

私は乙女座、九月生まれ、四十歳に手が届きそうな今も、少女のように夢見ることを忘れない若い心と、肩こり、冷え症に悩まされるという、精神的、肉体的にアンバランスな日々を過ごしているミセス恵子です。

結婚して十数年、まだ苦労と言えない人生を歩いておりますが、私なりにつらいことも多い年月でした。

あれは、新婚旅行から帰って、一週間ほど経ったころでしょうか。義母さんに突然、このようなことを言われました。

「私は、仲人に騙されてた。アンタは何でもできる女性だって聞いてたけど、大学出てるだけで、何にもできんじゃないの。ほんまに騙されたわ」と……。私は返す言葉もなく絶句した。

何故なら、世間一般で、女性らしいこととされる編み物、裁縫、料理、お茶、お花、何一つまともにできない私だったから……。

このときほど、家庭に入った女性にとって、何が必要とされるのか、身にしみて感じたことはない。かと言って、自分のこれまでの生き方を否定することはできなかった。私は、教師の仕事に誇りと生甲斐を感じていたし、何より、私達子供三人を大学四年間卒業さすために、父母がどれだけ苦労していたか見てきただけに、自分をこの家の嫁としては至らないと認めても、それで私の全てを決められることに、心の中では抵抗しながら、それは涙でしか表わすことはできなかった。

父は、三歳にもならない幼いころ、両親との縁がなく、祖父母に育てられ、独学で旧制中学へ進んだ努力の人であった。

子供達には厳しく無口であったが、決して、女だから、男だからと区別はしなかった。「これからの女性もどんどん社会へ目を向け、勉強し、教育を受けるべきだ」と、それこそ自分の身を粉にしてまで働き続け、五十六歳の若さで突然帰らぬ人となってしまった。

そんな父を、誰よりも尊敬し、温かく見守ってきた母、母には、父の分までも幸せでいてほしいと願っていただけに、母を悲しませるようなことは言えなかった。

教師も止め（県外のため仕方なく）、じっと家にいる私に、義母は何かとつらく当たり、「ガスレンジが使えない」と言っては、「アンタが壊したんと違うか」と言ったり、「アンタ、よくハンサムなM（主人の名）に嫁いでこれたなあ、アンタには、Mはもったいなすぎるわ」「Mの給料を全部もらって、アンタは結構なあ……感謝しいや」とか、胸の中の苛立ちを全て私に向けてきましたが、私自身の未熟さを指摘されることには、仕方ないことでした。

そんな月日の中で、長女を出産、四年後に長男を出産し、田舎から弟が母を連れてお祝いに来てくれました。母はしばらく滞在し、私の世話をしてくれたのですが、毎日涙ぐんでるんです。何かあったと直感しました。

「私は、どんなことでも聞けるよ、話して！」と頼む私に、母は「貴女は産後の大事な体、Mさんにも口止めされている。お母ちゃんは貴女が今までどれほどつらい思いをしてきたか、よくわかったわ。できることなら、子供も貴女も田舎へ連れて帰りたい。でも、子供達に、お父ちゃんのような子供時代を送らせたくない。お父ちゃんが、生前一度も自分の子供時代のことを話さなかったのは、それだけ悲しみが深かったから……。Mさんはいい人だよ。結婚は二人で築いていくものだから、Mさんと、子供達との生活を大事にしなよ」と言って、さみしそうに田舎へ帰っていった。

その後、義母の口から何であったか聞いたとき「ああ、これ以上、この家の嫁でいることはできない」と、離婚を決意しました。

だけど、誰のための離婚？　なのか。

私は主人を嫌いでもないのに、何故？苦しむ私を見て、主人は決意していたのです。

私達は、長男が生まれて一か月後、家を出ました。主人にとって、初めての親に対する反抗になってしまいました。決して親を見捨てたわけではありません。私が母を大切に思うように、主人にとっても、両親は大切な人、いつかきっと月日が解決してくれることを信じて出たのです。

あれからもう七年が過ぎようとしています。相変わらず不器用な私ですが、どうにか、主婦らしくなってきたように思えます。

主人の両親の家へも、一年に何度か子供達と訪れます。一言、二言、「アンタ、家出て幸せだろう」とか言われますが、以前ほど気にならなくなったし、義母も随分と、やわらかくなったようです。良い面を見てあげれなかった私が、若かったのでしょう。

我が新婚生活顚末記

大阪府　匿　名（28歳）

「軽いうつ病です。薬をきちんと飲めば必ず治りますから、心配しないで下さい。だから、馬鹿なことは考えないように。絶対完治するんですからね。あっとそれから、薬を飲んでる間は、奇型児が産まれる危険性がありますので、必ず避妊するようにして下さい。他に何かありますか。……ではまた来週来て下さい」

私の担当の精神科医は、「よくあることだ」とでも言いたげな調子で、淡々と言った。しかし、この言葉を聞かされたのは、五月に式を挙げた私どもの新婚生活五か月目のことである。こんな新婚夫婦がいるだろうか。何をか言わんや。

式後一か月ぐらいしてからだった。体が重い。誰が？　もちろん、私がである。だるい。料理する気にならない。掃除する気にもならない。洗濯する気にならない。いや、なれない。とにかく何もする気になれないのである。では何をしてるかって？

朝七時四十五分に夫を送り出す。当然、寝間着姿のままである。夜眠れないのに、朝は早くから眼が覚める。そのまま悶々と朝を迎えるのだが、時間が来ても今度は布団から起き上がる気になれない。しかし、毎日の生活は否応なしに過ぎていく。夫は毎日出勤しなければならないのである。彼は健康体なのだから。そして、夫を送り出した私は、すぐさまテレビの前に座り込み、それこそ文字通り一日中テレビ漬けになるのである。おかげで芸能情報にだけは強くなった。

しかし何もしなくても、お腹は一人前にすいてくる。が、作る気になれない。そこで、クッキーやおせんべいや菓子パ

ンなど、そのままで食べられるものをむさぼり食うのである。そして夕食は、夫が帰るのを待って、夫が作った食事を二人で黙々と食べる。この際、不幸中の幸いだったのは、彼が大の料理好きかつきれい好きだったことである。

掃除、洗濯は週末に、夫に尻をたたかれながら、不承不承まとめてやる。しかし、言われたことをしかもいやいややるのみだから、家（といっても社宅の一室だが）の中は当然ほこりとゴミだらけ。

こうした滅茶苦茶な生活を四か月も続けたころだったろうか。とうとう夫の怒りが爆発した。簡単に言えば、私は家を追い出されたのだ。着のみ着のまま、そのときたまたま所持していた現金十万円のみを渡されて、私は社宅のドアから外に押し出され、夫は鍵をかけて、開けようとはしなかった。それから四日間、行く所もなく京都の某ホテルで何とか雨露をしのぎ、やっと許されて私は家に帰ったのだった。

そこで夫も、私の異常さに気付いたのだろう。私の実家の両親の勧めもあって、私を病院に連れていったのである。

そして聞かされたのが、冒頭の医師の言葉である。それにしても、新婚なのである。ある意味では一生涯のうちで、最も楽しいときかもしれない。それをこんなふうに過ごした夫婦が、私どもの他にいるだろうか。

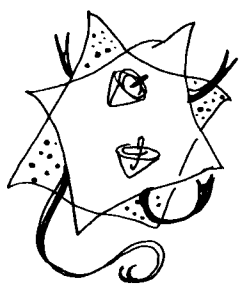
それから四か月。私はこうして、原稿用紙に向かって、当時を思い浮かべながらペンを走らせている。つまり、そこまでに回復したのである。元気になったときのことも未だに忘れられない。去年の十一月二十八日の夕方のことだった。それまで体が重くて重くて動けなかった私の体から、何かがスッと飛んでいったように突然体が軽くなったのである。このときの感覚は今もはっきりと覚えている。それから先は現在のようになるまでに時間はかからなかった。

そのときのことを私の担当医師は、「薬が効いたからです」と言い、信仰に厚い私の叔父は「神、仏の力」だと言う。

しかし、どちらでもよい。とにかくあの悪夢のようだった生活は過ぎていったのだ。今思えば、夫が病気にならなかったことだけが救いである。

今度の土曜日、私はまた病院に行く。また薬を減らしてもらえるのだろうか。今となっては、病院通いも一つの楽しみになりつつある。

が、私の料理の腕は今も一向に上がらない。ああ、何をか言わんや！



「姑」これほど憎い人はない

兵庫県　赤毛のアン

古くて新しい課題「嫁姑」。これまでは、人と争うことが嫌いだから、わりあい誰とでもうまくやってきた。結婚に際しても、世に言うほど姑の存在を深く考えなかった。「うまくやってみせるわ」それが何と甘い考えだったことか。

スープのさめない距離に別居し、週二回、食事をしに一歳の息子を連れて通っている。その他に、姉夫婦や親戚、特別な客の接待にはもちろん動員される。

去年の春、ある事件で結婚四年目にして、初めて面と向かって衝突した。起こるべくして起こったと言うべきか、それまで心の奥にフツフツと沸き立っていた不満が、お互い噴き出した。

結論、三十以上も年の離れた女には、口ではとてもかなわない。肉弾戦にまで持ちこんだら勝利は明らかだったろうけれど……。

最近の嫁は強くなったと言うけれど、少なくとも私の場合、姑は絶対であり、家業と古い家を取り仕切って健在である。このときの波紋は、二人の義姉、叔母にまで広がり、全くの四面楚歌、頼みの夫はオロオロするばかり、真剣に離婚を考えた。

世間にはよくあることと、スッキリ済ましたいけれど、他人にあそこまで言われたこと（思い出すのもイヤだから詳しく書かない）、夫の宙ぶらりんな態度は、私を深く傷つけ、今も胸の底に固いしこりとなって残っている。それは、日を追うごとに大きくなるような気さえする。表面は何事もなかったように接しているが……。

長男である夫は、いずれ隣接、悪くいけば同居という形におさまるだろう。それを考えているため、慢性胃炎だ。こんなに人を憎いと思ったことはない。でもどうごまかしても「嫌い」なのだし「許せない」のである。嵐の前の静けさ、次の戦いの予感におびえつつ作戦をねっている毎日である。ああしんど。

異文化体験

東京都杉並区　ふなひさこ

義理の関係は異文化体験――そう思いませんか。私にとっての異文化とは、結婚生活十六年にして未だに慣れることのできない婚家の人々、それも女性陣の口のクセ――口風とでも申しましょうか。

彼女達――姑を中心とした四人の義妹たちは、見ているのです、いつも、じっと。観察と評論の得意な彼女達の対象の一人に、嫁の私がならないはずがありません。彼女達は、その結果を歯にキヌを着せずに言うのです。当人にも当人に関る他の人々にも。誰にでも言うのだし、良いことも言うのですからかげひなたがないと言えないこともない。しかし、自分本位な観察の結果を直接・間接に当人に知らしむるのは、その意図も不可解ですが、評論される側にとっては、マナイタの上の鯉の心境はかくやと思われるほど、はなはだ心地よくないものです。

「言わせていただきますけどねえ」と、義妹の、義姉（私）が恵まれすぎているとの直な批評を拝聴しながら、いつもながらの彼女の自分への大らかな肯定と甘さと、人をアケスケに評論しそれを公言してはばからぬあけっぴろげなようすに、少しの気恥ずかしさとあきれと、少しのうらやましさと、たくさんのとまどいを感じてしまうのです。そして何より心はズタズタです。

この種のギクシャクを感じながら十六年、嫁とは何だろう、と考えます。嫁、家の女になるということは、育った家の持つ個有の文化――家風というものから離れて、婚家の人々の共有する文化――家風にそまることなのかもしれません。

でも私は一生このアケスケ・ズケズケ文化にそまれないような気がします。人をあれこれ観察するくらいのことは、多かれ少なかれ誰しも心中でやることでしょうが、それを正しいとして自信を持って当人にも他人にも話すことなど、私の生得のコンピューターにはインプットされていないのです。

ふり返って我が夫を見れば、彼もこの文化の中で育ったはずなのに、人の気持ちを察し、十分に言葉を選ばねば口を開かない慎重人間です。同じ環境にしてこの違いは何によってきたるものかふしぎです。

アケスケ・ズケズケ文化になじむか、夫のように社会性を磨くか、自信に乏しい私はどちらもできない気がします。せめて自分はズケズケ言うまい、人がいやがることは言うまいと努めていこうと思います。それが私の文化です。私にも個の文化がある。自分は自分、妻でも母でも、まして嫁などというものでもない、個としての自分自身でありたい、と、異文化に身をさらしつつ、強く思うようになりました。

（え・栗田佐織）

婦人雑誌からみた一九三〇年代

私たちの歴史を綴る会／編・著

「本来、平和を愛する女性たちが、なぜあの無謀な戦争に協力したのか」この疑問を解こうと、「私たちの歴史を綴る会」というグループが、まとめた本である。

メンバーは五十代から六十代の女性ばかりだ。東京都教育委員会主催の婦人指導者養成講座で知り合い、二十年前にこのグループを結成したという。

一九三〇年代とは、世界大恐慌、ファシズムの政権獲得と、国際的危機の時代であり、日本は軍拡と満州の植民地化を押し進め、恐ろしい戦争に突入しようとしていた。当時の婦人雑誌はどんな記事をのせ、どんな方向に女性の生き方を導こうとしていたのか。グループは三年間を費やして、「婦人公論」「主婦の友」「婦人倶楽部」を検討した。

結果、何よりも強く感じられたのは、三〇年代と現八〇年代との相似であったという。民主主義の否定、教育の右傾化、言論の自由の圧迫。女は差別されながら母性としてのみ尊ばれ、難しいことは避けて通る身辺主義がはびこった。示唆するところの多い面白い読物。

同時代社　一六〇〇円（N）

住まいの収納100章

渡辺武信　林田　研

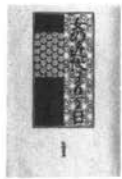
世の中には片付け上手といわれている人もいますが、たいていの主婦は家の中にあふれるさまざまな物に囲まれ、その整理に頭を痛めています。そんな悩みに応えて二人の住宅設計の専門家が住む側の身になって書いたのがこの本。ふつう収納といえば物がきちんとしまいこまれている状態を考えがちですが、この本は「片付け易い家は散らかし易い家」という視点から、毎日の暮らしの中での使いやすさをまず優先し、機能的な片付けをすすめているところに、筆者の「住まい」に対する姿勢、哲学が感じられます。また見開き二頁の片側は全部イラストで収納のしかたのポイントが描かれているのでとてもわかりやすく楽しく読むことができます。

現在家の増改築を計画中の人には見逃せない一冊ですが、そこまでは無理という人にも、限られたスペースを生かしての整理の仕方やちょっとした工夫のヒントが必ず得られる貴重な本といえましょう。

鹿島出版会　一五〇〇円（T）

女の近代365日（上下）

円谷真護



一年三六五日のそれぞれの日に、女に関係するどんな事件がおこったか――欧米も含めて、私たちの興味を惹く内容が写真入りで手ぎわよくまとめられた上下二巻。ふつう、TVのクイズもどきのこま切れの知識は面白くないものだが、この本には読者の想像力をかき立てる意外な面白さがある。明治二十四年七月七日の「日本の花嫁」事件。米国で、日本の結婚の実体を伝える本を出版した牧師田村直臣が、東京で開かれた日本基督教大会で、牧師職を剥奪され追放されたのがこの日である。一読、日本のクリスチャンの程度が分かる。知らないことが沢山学べる一冊だ。拓植書房各一六〇〇円（K）

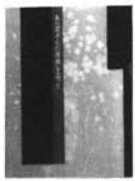
主婦の再就職ノート

金谷千慧子他

悩むのはやめて、この本を開いてみて下さい、と呼びかけにあるように、思い立ったらまず実行してみた、再就職成功者の体験談をあつめた具体的な職業ガイドブックです。登場するのは全員既婚者、ほとんどが子持ちの七十四名。ホテルの洗い場のパート、病院の付添婦のように、家事の経験を生かせる仕事、社会活動やボランティアからスライドして仕事になったホームヘルパーや点訳指導者の職業、さらに専門を生かした司会業やツアーコンダクターなど、バラエティに富む職種が読みやすく紹介されています。フルに活用できる一冊です。創元社一二〇〇円（T）

はじめての愛
あべ定さんの真実を追って……

丸山友岐子



いまは昔、昭和十一年に阿部定（あべさだ）が、愛人を殺してそのペニスを切りとるという事件をおこしてから五十年がすぎた。その間ほとんどつねに彼女は、色情狂の殺人者という扱いを受け、世間から嫌悪と好奇の目で見られ続けている。この一冊は、「わが愛と性の履歴書」で才筆をふるった著者の、男たちによって作られたそうした「阿部定」像に挑む試みである。はじめて知った愛に、おのれを賭けたお定さん。女たちは、「それぞれの胸の中に、からだのなかに、お定さんを息づかせている」という著者は、彼女を通じて女の心と体の「エロス」を探ろうと試みている。かのう書房一五〇〇円（M）

ほん――ほん

没になった人たちにも誠実に

東京都新宿区　緑　千恵子

最近は投稿を掲載されない人が、毎号百人くらいいるようです。掲載される人の二倍です。没になった人には〝わいふ〟と一緒に、あいまいな文章のコピーが送られてきます。田中編集長に電話をすれば、明快に理由を説明していただけます。わざわざ電話をする気にもなれず、自分がせっかく書いた原稿が、理由もよくわからないまま、うやむやにされてしまった、と腹を立てている人も多いと思います。こういう気持ちを、編集部はわかっていないのではないでしょうか。

頑とした編集方針、掲載規準があるようですが、〝わいふ〟のどこにも書いてありません。投稿者にはよくわからないのです。投稿者には本音を書くように、と言いながら、編集部は本音を公表していません。「できるだけ多くの方の投稿を公平に掲載することをめざしています」というのは、きれいごと、建て前にすぎません。これからますます投稿が増え、問題が大きくなっていくでしょうから、この辺ではっきりさせることが必要と思います。例えばこういうのはどうでしょうか。

掲載規準

①ユニークな体験を具体的に書いたもの。

以下、②③④と十項目ほど具体的に規準をあげる。

①あなたの投稿は次の理由で不採用になりました。

理由を②③④と十項目ほどあげる。

①あなたは次のことを改めたら、よい文章が書けるでしょう。

何を改めればよいか、具体的に十項目ほどあげる。

それぞれについて、このように多いものから具体的に十項目ぐらいあげて、規則を作ります。没になった人には、コピーの該当するところに、○をつけて送るだけですから、そんなに手間はかからないでしょう。本音がわからなくてウジウジしているより、オープンにしてしまったほうが、納得できて、すっきりすると思います。

投稿の中には、力強さ、文章のうまさ、迫力などで、うなりたくなるようなものもあります。二〇四号なら「東アフリカ野生動物の旅」。写真も効果的です。

スローテンポでまどろっこしく、くどい描写が何ページも続くのに飽き飽きして、読まないで飛ばしてしまったものも、これまでかなりありました。

赤字解消のために会員倍増を、と呼びかけていながら、規準に合わない人には、「さっさとおやめになって結構よ」とでも言っているような、きつく、冷たい切り棄て主義みたいなものを感じてしまいます。

文章のうまい人ばかりちやほやせず、底辺を支える人たちも、大切に、誠実に扱うことが〝わいふ〟の発展につながると思います。お金を出してもいいから、自分の文を雑誌に載せたいと思っている方も、かなりいるのではないでしょうか。

お返事

〝わいふ〟が誌上で読者に直接お答えすることはあまりないのですが、没原稿がふえている現在この問題に関する編集部の方針を知っていただいたほうがよいと思い、お答えいたします。

まず投稿者の数について。二〇一号から二〇四号までの四号で、没になった方ののべ人数は一一〇人です。一号平均二十九人。

前号で没になった同じ方から次号に投稿がくると、「よい原稿でありますように！」と祈るような気持ちです。ところが読んでみるとやはり掲載不適当と判断せざるを得ない、そのときのつらさ！

さて緑さんの「没原稿の規準をつくったらどうか」というご提案には賛成できません。なぜなら文章というものは生きものだからです。文章はあらゆる角度から総合的に判断しなければならず、いやしくも一人の方が心をこめて書かれた文を、○×式で判断できるなどと私たちは考えてもおりません。時間をかけてご説明したいと思えばこそ「お電話で」とお願いしているのです。

しかしもちろん、原稿選択の目やすはあります。そして〝わいふ〟の選択規準は文章の上手下手ではありません。

●積極的によい、と思うもの。①体験にもとづいて事実を具体的に生き生きと描いているもの。②マスコミの表面に出ない思いがけない事実を知らせてくれるもの。③筆者のユニークな感性が感じられるもの。④独特なものの考え方でハッとさせられるもの。⑤稚拙であってもその人の生き方の重みが感じられるもの。⑥一種の切実感のあるもの。

●よくない、と思うもの。①一党一派、一宗教の極端なPRの文。②マスコミに見かける投稿とあまりにも似たもの。③悪意のある人身攻撃の文。④あまりにもありふれていて、「あ、そうですか」と答えればすむような、何の感銘も受けない文。⑤首尾一貫せず、意味がいま一つはっきりしないもの。⑥自分のことのように見せかけたつくり話。⑦お説教臭のつよいもの。⑧やたら理屈っぽいもの。⑨うまいのだけれど文章が一種の「遊び」になっていて切実感のないもの。

もちろん一つの文章にはいくつもの要素が混在してますが、以上の目やすは要するに、アマチュアの文章の持つ迫力を評価するもの、といえそうです。

さて〝わいふ〟の定期購読者のうち、投稿して下さる方はごく少数で、ほとんどの方が文字通りの「読者」です。連載ものをやめて一人でも多くの方のご投稿を――という声もあるのですが、合評会などでのお声では、連載ものを楽しみにしている方もたくさんあるのです。〝わいふ〟は同人雑誌とは違い、「生き方雑誌」ともいうべき一面を持っています。わずかの誌代で自分の文が活字になる〝わいふ〟の「底辺を支える人たち」は、書き手と同時に読者であり、その方たちを「大切に、誠実に」扱うことは、誰が読んでも面白い〝わいふ〟を作ることだと思うのですがいかがでしょうか。

編集部

投稿ホットライン――三人寄れば文珠の知恵

わいわいガヤガヤ

山代巴さんわが家へ！

大阪府池田市　日比野　都

目をつぶると、タンスにもたれ、置きごたつで原稿を読みあげる、七十四歳、ネコゼの小さな山代さんの姿が、ほうふつとしてうかぶ。

にわかに邪魔が入る。壁一重の隣のおばちゃんがテレビを見はじめたのだ。その音が大きく、筒抜けで、山代さんの小さな声をうわまわり混線、私はびっくり、気が散って困ったが、山代さんは屁のカッパ、淡々と読み続けられた。

二月十三日の午後のわが家でのエピソードである。

古くは「荷車の歌」最近作では「囚われの女たち」十巻（径書房）の著者、山代巴さんが、わが家に来られたのだ。いまだに夢のようで、そのときの感激がさめやらず、興奮状態が続いている。

去年の十一月、朝日新聞で「囚われの女たち」完成を祝う会、三日一時、吹田、南千里公民館、著者の山代巴氏を囲んで話し合う、とあるのを見つけ、あっ、そうだ、山代さんを見にゆこうと、おっちょこちょいは野次馬根性まるだしでかけたのだ。

おもいがけず発言を求められて、うわあ、困ったなあ、とっさのことで、カッコイイことも言えず、野次馬で山代さんのお顔を見にでかけてきたこと、夫の長患いに続く死で、パンツの行商をやったことなど、出席の理由と自己紹介を、しどろもどろにしゃべった。

そのときの私のおしゃべりが、意外にも山代さんのお気に入って、行商の体験を会ってききたいと、その折の司会者、千里山生活協同組合、文化委員長の西尾熱子さんを通して、電話で依頼を受けたというわけ。

新大阪駅で待ち合わせて、ホテルか千里山の生協で話し合う予定だったのに、改札口を出られた山代さんを見つけた西尾さんが「あっ、来た来たっ」と叫ぶし「食事は？　まだあ？　うどんでも食べようか」ときくと、山代さんは「まだ。うどんでいい、きょうは私

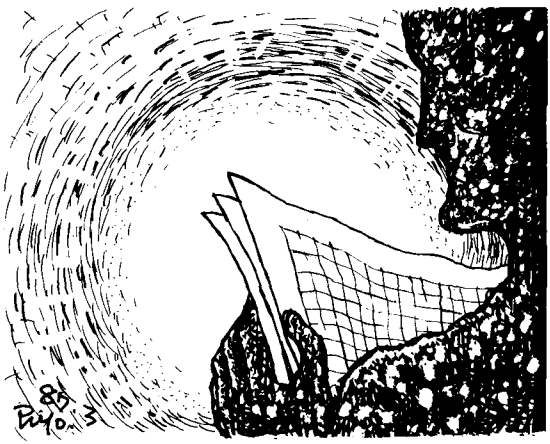
に払わせてー」西尾「払いたいの？　じゃあ払ってー」、なんとまあ礼儀知らずといおうか、和やかなそのムードに、私は圧倒され、魅せられたる魂で「山代さん、私とこへいらっしゃいませんかあ」と、つい言ってしまったのだ。言下に「ゆきたい、ゆくわあ」とおっしゃったんで、急きょ、わが家へレッツゴーというハメになった。

二か月ぶりに掃除をしたところだったし、まあ、いいや、何とかなるやろと、腹を据えたのは、ひとえに山代さんのお人柄のせいである。

「そこのタンスにもたれたい」と山代さんがいわれたので、置きごたつをズルズルとひっぱって、タンスに近づけた。

田舎で戦後、行商をやっていたおばちゃんに、文集作りに参加してもらったので、それを私にきかせて、都会における行商のおばんだった私に感想をきいてみたいということだった。私は隣のテレビの音に気をとられ、的確な感想はいえず、あまりお役には立たなかったようで、申しわけがなかったが、とにかく、それはそれは楽しく、うれしかった。

「囚われの女たち」に出てくる名古屋空襲の場面でも、膨大な資料を丹念に読まれたよし。私の行商の話を本に書かれるそうだが、多分、数行のことだろうに、わざわざ東京から新幹線に乗ってご来阪、みんなにご馳走したり、その時間、費用、容易じゃないなあとお察しした。



かった。刑務所は私の大学で、そこで学んで書かずにはいられなくなったとのこと。

筑摩書房が倒産して、編集長だった原田奈翁雄氏が、山代さんの「囚われの女たち」のために径書房を設立されたときいていたが、山代さんの話では「原田さんが奥さんとライスカレーの店を開くというので、『それはどうかとおもう、せっかくの編集の腕をいかさなきゃ惜しい、出版社をやるべきだ、私の原稿があるんだけどう……』と、何気なくいったのよ」私「それじゃあ、ひょうたんから駒というわけですかあ」山代「そう、そう」。

どちらにせよ、原田、山代両氏の友情によって、径書房が誕生したのは事実である。

それから、どうしてか、山代さんと私の資産公開をやった。なんと、私のほうが山代さんの十倍ものお金持ちであることが判明した。

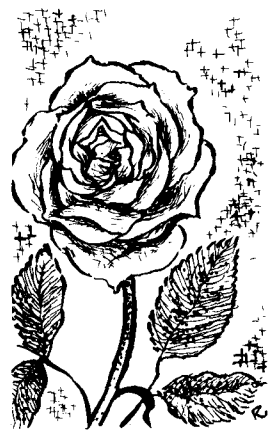
しかし「あんたもたいしたことないねえ」といわれ、ふたりで大笑いをした。

「笑う門には福来たる」というではないか。

かくて、わが家には、おおいなる福が到来したという次第。

二人だけの結婚式

東京都多摩市　荒井　明子



一月七日。札幌は快晴。昨日まで降り積もった雪がキラキラとまぶしい。四国育ちの私にはこの雪がうれしい。北海道まで来てよかった。ホテルの窓から白一色に埋もれた景色を見下ろしながら、今日が本当のスタートだと、自分に言い聞かせていた。

今日は、私達二人だけの結婚式である。いつもより少し濃く化粧する。何だか豆ダヌキのようだと二人で笑う。

私達の出会いは同じ職場。交際のきっかけはプロ野球が始まった昨年の四月。同棲したのが夏休みの八月。入籍したのが慌ただしい十二月。

形式的なことが嫌いな二人は、式を挙げないつもりでいた。それに、私にはもう一つの理由があった。十歳も年上で、そう若くもない新婦を、人様の前にご披露するのも気が重かった。それなら二人だけの式にすればいいという勧めもあり、いっそ、東京を離れ寒さ厳しい雪の中での式にしようと話し合った。

式は、札幌の質素で小さな教会で挙げることにした。一月五日。二人は、式を間にはさんだ五泊六日の旅に出発した。式前日には、牧師の説教と打ち合わせを終えた。

当日、教会では二人いっしょの控室である。昨日、貸衣装店で決めておいた衣装が届いている。寒がりの私は、用意してきた長袖シャツ二枚を着込んで、その上からドレスをつける。オーダーしたように私の身体にぴったり合う。靴の大きさもちょうど良い。飾りのついたベールを頭にのせ、真珠のネックレスをつけ、胸にブーケを抱いた。そっと鏡の前に立つ。新郎も着がえを終えて、私と並ぶ。鏡の中の二人が笑う。

式場入り口から牧師のいる正面までL字型に、バージンロードが作られている。床、壁、天井は板張りである。正面の木の机の上には、両側に紫のローソク、中央に十字架、その前で牧師は、聖書を持って立っている。その右には、大きな花びんがあり、白いゆりと菊、ピンクのカーネーションがいけられている。

私は、何度も練習したのに寒さと緊張で、体が硬くなり、動きがギクシャクしている。色白の牧師の頬だけが、いやに赤く見える。ここにいる人達は、牧師、オルガンを弾く女性、カメラマン、そして私達の五人である。

静かな式であった。雪景色の中に、間のびしたオルガンの音が吸い込まれていく。牧師の言葉を聞きながら涙が頬を伝う。

式が終わると、カメラマンが私達を教会の雪の庭に誘った。

「せっかく冬の北海道に来たんだから、雪の写真がいいよ」と言う。

寒さにふるえる新郎と、転びそうになる新

婦の悲鳴が聞こえてきそうなスナップ写真が、たくさんできた。雪にはしゃぐ二人を追いかけて、カメラマンはシャッターを押した。

テレビを見ていた夫が、急に思い出したように、

「ウチは、錫婚式らしいよ」と言う。

「あら、そうなの？」と私。

雪の中で、二人だけの式を挙げてから、もう十年になる。

「同棲」か「結婚」か

兵庫県姫路市　窪田　潤子（47歳）

ある講演会の受付で、私の前に、若い夫婦とおぼしき二人連れが、名前を書いていた。同じ住所で、姓が違っている。

おそろいのジーパンで、色違いのTシャツ、スニーカーは型が同じでTシャツと同じ色で、かなりおしゃれなペアルックできめている。

その講演会が皮切りとなって発足した研究会に出席するたび、彼女に出会う機会が多くなり、研究会終了後、バスの待ち時間にどちらからともなく喫茶店に誘い合い、仲良くなっていった。

彼女の年齢は三十路すぎ、私は五十路まえで、年の離れた姉妹という雰囲気である。頭の良い女性には珍しく自己主張をしない彼女は、子どもが好きで、料理が上手く、息子の嫁にでも欲しいような良い女である。

彼女には、もう何を質問しても怒らないだろうと思えるほどに親しくなったころ、どうしても私には分からないことを手紙に書いてみた。

「どうして同棲しているのですか。あなたに経済力があるからですか。男性には、いつでも別れられて都合がいいですが、女性は、何の保障もしてもらえなくて、損ですよ。一人で食べていけない私なんかの、とても考えられないような、男と女の関係ですね。なんだか、あなたが可哀想です。

同棲しようと、彼が言い出したのですか？子どもも産まないとあなたは言っていたけれど、別れることを前提としての行動ですか？好きな人の子どもなら、産まれたらよいのに。愛がなくなればgood by ですか？」彼女から、返事の手紙です。

「彼と一緒だと、楽しいのです。いつまで話し合っていても、飽きるってことがありません。私には美容師という手に職があり、生活費は彼ときっちり折半しています。彼の収入は、私とほぼ同額です。好きでいっしょに暮らしていて、どうして、別れるとき、私だけ、何か保障してもらうのでしょう。

損得の比率は、五分五分でしょう。五十路まえのあなたも、家政婦とか病人の付き添いでもすれば、一日一万円稼げますよ。家庭をすてれば、女は一人で生きてゆけます。子ど

もを産まないのは、いつ戦争が始まるかも知れない、いろいろの薬品で汚染されていく食品や、海や川や山。豊かになったとはいえ、資本主義社会にくみ込まれていく学校教育。子供達に、素晴らしい未来を約束してやれないからです。愛がなくなるか、続いていくかは、今の私には、分かりません」

私から、返事は出せませんでした。

でも、私は、結婚して子どもが産まれたり、主人といっしょにいて楽しくなくても、離婚のためにおこるいろいろのわずらわしさや、親族への迷惑を考えると、さして面白くもない夫婦という男と女の関係を続けているほうが、楽に生きていられると考えて、二十年以上暮らしてきた。

もし、私が同棲という男と女の関係を続けるとしたら、愛がなくなるのがこわくて喧嘩もしないだろうと思う。

つまり、夫婦という男と女の関係に、安心して、「死ぬ」の「別れたい」だの喧嘩を何度もくりかえしてきた、私のふてぶてしさが見えてきた。

謝恩会

千葉県　匿名

私立の幼稚園は、その園長の方針でかなり職員の保育のあり方が規定されますよネ。だから自分の子にピッタリの園に出会えれば、ラッキーなことですけど、たいていは詳しいことまでわからないで入園して、あとでこんなだったのかと思うのが多いと思うのです。でも私は初めから幼稚園そのものに不信感が強かったのであまり期待せずに、ただ子供に友達でもできたらいいなぐらいに思い入園させました。それで二年の歳月が流れ、やがて謝恩会の季節となりました。

この園ではもう十年来、先生方に楽しんでいただくために年長の子供達が「芸」をするのだそうです。その中身は親達が相談して決めるのですけど、だいたい子供八～九人が一チームを組んでやるので、全部で十チームぐらいできるわけです。事にあたり、親は幼児教育のプロではないので、とても大変な作業でした。

初めはPTAの主催とのことなので「仕方ない。ヤルッキャナイ」と思っていた私も、親の集まりが一回ならず五回もあること。また子供の練習を退園後に五回もしなければならないこと。しかも親は一回につき三時間、計十五時間、子供は一回一～二時間ですので、二つ合算して二十～二十五時間集まるとのこ

とを聞き及び、その上費用が一人千円と聞き、何だか頭にきてしまいました。十分間の出番に、そんなに多くの時間とわずかかもしれないけど一万余りのお金。こういう集いは、暇な方には格好の社交場になるかもしれないけれど、まさか欠席するわけにもいかないこんな半強制の集まりに、この忙しい二〜三月を十日も費やすのです。

でも違うんです。怒っているのは私だけなのです。皆さん実に乗っていて、衣裳はああしたら？　こうしたら？　そうそう一度会場でリハーサルも必要ネ、ととっても楽しそう。私は完全に少数派。こうなると公然と反対して異端視されるとまずいという思いから、ただ黙ってそういう方にやらせておくしかありません。するとその時間は忍の一字となり、ひどく疲れるのです。でも皆さん、心の内はどうであれ、ほんとに暇な方が多いんですね。そして誰も、こんなにまでしないと先生に感謝の心が伝わらない現状に対して、不満の声を上げないのが、私にはとても不思議な気がするのです。

何だか私にも見えてきた

東京都　匿　名（36歳）

結婚生活の実感がこのごろやっとつかめた気がします。結婚って人生共同体の一つの型みたいですネ。価値観の同じ人ならば最初からすぐに気がつくと思うけど、私達の場合は価値観が全く違っていたので、気付くまで十四年もかかってしまいました。

でもまだ夫婦してます。これからもずっと夫婦でいたいと思っています。なぜなら私にとって夫が一番手ごわい相手だからです。

食事の支度や家事をする人以外とは、なかなか認めてくれませんでした（彼のお母さんは専業主婦）。結婚後五年間は共働きだったのですが、やはり同じで、その上彼の家族へのサービス人にもなるよう要求されるほどでした。子供が一人生まれ、二人目がおなかに入った段階で夫の実家近くから（千代田区）うまく離れることに成功し、現在は私の実家で、二世帯別居という形で同居し、八年になります。

子供を寝かしつけ、夫の夕食を作り終わった十一時ごろからの、わいふの愛読や投稿書きも「お前が起きてると思うと熟睡できない！」と怒られたことも以前は数回ありました（もちろんわいふの投稿だけではありません。そんなに投稿してないもん）。でも私はそのたびに心の中で言い続けたのです。「私の寝

る時間をさいてやってることまで束縛しないでよ」と。

要するに「ハイ」と言ってもやめなかったのです。しかしこのごろは「体をこわすから徹夜はよしなさい」と言ってくれるようになりました。子供が小さいだけで自分のすべきことがままならない内は（私の場合は家事）、周りのすべての人達が私をダメ人間にするためにいるように思えたのです。

でも子供の成長とともに少しずつ自分を甦らせる時間が持てるようになると、今までのすべてのことが単純な主婦業の刺激剤になっていたようで、かえって努力できたようです。

皆さんあんまり早合点の結論を出さないように！　だって結婚前って価値観よく見えないでしょ。二人の価値観を育てるのも結婚みたいな気がするんです。

学習院はお嬢様学校？

東京都練馬区　小江　鐘子

慶応大学経済学部卒業の息子と、学習院文学部卒業の娘を持つ知り合いがいる。揃ってストレートで進学したのだから確かに優秀な兄妹に違いない。私の親類には探してもいない。でも、でもです。

この兄妹、この親子、兄は小さいころから「お前はお医者さんのお嫁さんになって、外車に乗せてもらうんだ」そう言い続け、母親も、一生懸命共働きをして、中学から二人を私立に入れ、テレビなしで一家で頑張ってきた。兄は音楽会などには必ず妹を連れて行き、自分の友達に紹介する。もちろん、将来有望な医者になると思われる人でなければならない。妹は大学四年生のとき、医学部を首席で卒業した兄の友人に、思惑通りプロポーズされて、得意気に語る母親を見るにつけ、私には仕組まれた構図のように思えてならなかった。

結婚後、母娘でヒソヒソクスクス笑ってその相手のことを話しているとき、「うまくやりなさいよ、どうせピンとこないんだから」と母親、「わかってるわよ、適当に合わせてるから」とか、二人で「まったくあれはバカだよね、何も知らないんだから」とか、私は他人事でも腹立たしくなります。結婚一年後ぐらいに、また兄貴登場で、何しろ経済学部出身ですから、「お前、いつまでも父親名義のマンションにいてもしようがないよ、ダンナがポックリ逝ったらお前のもの何もないじゃないか、早くダンナ名義のマンションでも買ってもらえよ」

その後、この話も思い通りにいき、一週間に一回実家に帰ってきては、近くの中学生の家庭教師をしていた。

彼女の大学時代の同級生に偶然彼女の様子を聞いて、また驚いた。友人のリポートを書いてはお金をもらっていたとのこと、私も娘二人いますが、どんな育て方でこんな仕組まれたような、計算高い生き方、愛情という形のない豊かさに背を向けて生きるこの親子、私

は背筋がゾクッとする想いがして、私の娘達に優秀な頭脳の子はいないけれど、豊かな感性と愛情だけは持って欲しいと願いつつ、貧乏しながらでも信念を貫いて生きてる自分の生き方を改めて変えまいと、思いました。

寒ぼたん

埼玉県草加市　堀場美代子

お正月、上野東照宮のぼたん園で寒ぼたんを観た。BGMに流されている琴の音に、初春の気分に浸りながら。菰の内の、紅、ピンク、白のボタンを観て石道を行く。寒さや雪をよけるためにであろうが、一株一株にかけられた菰が、東北地方の童がかぶっているものに似て見え、黒っぽい柔かい土とともに、素朴であたたかな感じが伝わってくる。

株の前につけられたボタンの名前を見て、その名付け方に感心したり、株の間のところどころに立てられた短歌をよんで、その情景を思い描いたり。二か所ぐらいに赤い大きな傘がさしてあり、その下の長椅子の上に火鉢が二、三個。炭が見えたので手をかざしてみると、ほのあたたかく、うれしくなった。しみじみ、ほのぼのと、初春を味わったひとときだった。

冬ぼたん　一月一日〜二月中旬
春ぼたん　四月二十日ごろ〜五月中旬
入場料　五〇〇円　小学生以下無料

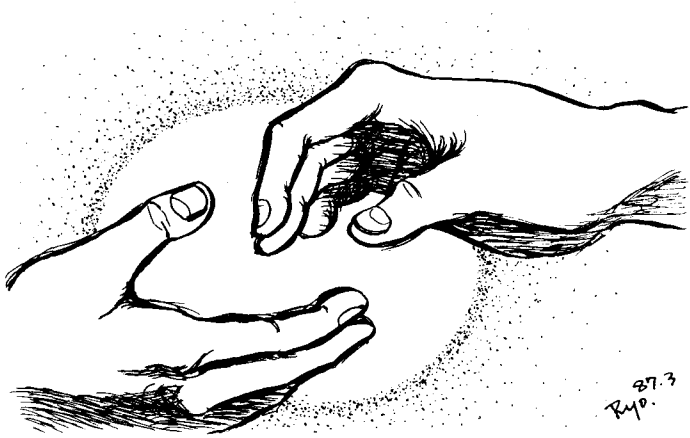
「アエットの目」何度も読みました

神奈川県横浜市　野口　麗子

二〇四号の「アエットの目」近ごろにないカルチュアショックでした。体がふるえ、涙がこぼれました。二十年近く前の異国の地での体験、何度も読みました。

ショパンのピアノ協奏曲第一番ホ短調は、私と夫の最愛の曲です。偉大な天才の短い生涯を想い、そのとぎ澄まされた感性にただ浸り切っていました。しかし、この曲はまさに祖国への告別の曲なのですね。平和の中にどっぷりつかり切っている私には、想像のつかない深い想い……。

濱さん、すばらしい体験談、ありがとうございました。



太極拳の講師をまかされて

大阪府豊中市　加藤　君子（43歳）

今日は金曜日、午後二時までに池田市にあるスタジオへ行かねばならない。

今ひとつ、気が前へ進まない。昨年四月より助手ではなく、講師として太極拳の指導を始めてから、毎週金曜日の午前中はゆううつな、胃の辺が重くなるような、いやーな気分になる。理由はわかっている。

それまでは助手として、ただ黙って生徒の前で太極拳を演じて見せればよかった。私の師である講師の指導計画に全てをまかせて、私はそれに従うだけでよかった。

何といっても助手の気楽さ。ときにはボーッと眠くなるときもあった。あのゆるやかな動きとシルクロードのバック音楽がそうさせるようだ。

ところが全てを頼っていた講師が夫の転勤で東京へ行くことになった。私の技量と性格をみて、講師に推してくれた。

加藤君子さん

それまではパートの事務員をやりながら、定休日を利用して太極拳をやってきた。もう一か所の教室も頼まれ、パートと両立は無理になり、収入は半分以下になるが、やりがいを優先して、パートをやめる決心をした。

とうとう私一人で教室の全責任を負わねばならなくなった。

慣れるということも大切だが、太極拳そのものの技術的自信をつけることで講師としての自信がつくと思った。

それまで夜の練習会はさけていたのだが、行く決心をした。日中友好協会の先輩の指導者の指導方法を見習い、いろいろな行事にも積極的にかかわった。

習うのは楽しいが、教えるのは苦しい。

わずか三年半前に習い始めたばかりの新米講師だが、生徒が少しずつうまくなるのを見ると、帰りの足取りは軽くなる。

専用机はお膳です!!

大阪府堺市　吉田ミヨ子

幸いなことに、私は専用の机を持っている。といっても、もとはお膳である。そのお膳には今でも冷や汗の出る思い出がある。

息子の担任が「家庭訪問」で我が家に来たときのことである。

茶の間に上がった先生と、お膳をはさんで差し向かいに座った。一通り挨拶がすんで、これからが本題というところで、先生がお膳に肘をついた。その瞬間、お膳の反対側の端がガタッと持ち上がったのである。思わずばつの悪そうな顔をして、先生は体を起こした。肘をついただけでひっくり返りそうになる食

卓。私はくらい気持ちで、黙っていた。

当時、我が家は貧乏のどん底だった。四人の子供をかかえて、朝食が終わればもう内職が待っていた。朝、昼、夜の区別もなく、内職また内職。いつしかお膳の脚もこわれ、炬燵もまた用をなさなくなっていた。新調できるあてもなく、炬燵の脚にお膳の天板、まるで二人三脚のようなおかしなものだった。見た目はともかく、私達はこのお膳を重宝していたのである。

その後、団地に移り住み、食事の様式も、椅子式に変わった。不用になったお膳は、何度か捨てられそうになったが、天板だけが生き延びて、子供のおもちゃに早変わりした。

「あたりー。あたりー」

裏に五重丸を書いて点数をしるし、ピンポン玉を投げ合って喜んでいた。

そして今や、新しい脚のついたお膳は、私専用の机である。新聞を読むもよし、文章を書くもまた楽し。

机に向かっているときは、だれにも邪魔されることのない一国一城のあるじである。

元気印のお母さん

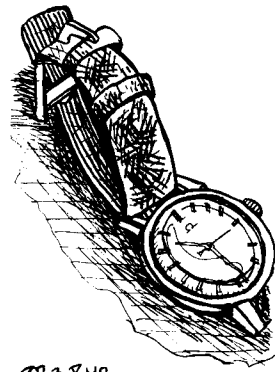
大阪市西成区　内木場周子

私の主人は、今をときめく？不況No.1の鉄鋼会社に勤めている。変則勤務で時間の変化に富み、フツーの人のように、「朝出勤したら、晩まで戻らない」というわけにはいかない。夜勤のときなどは、昼の二時、三時に昼食をとる。もちろんお酒の類も飲むので、その「あて」や、軽食（ラーメン、うどん、そば、焼きそば、お好み焼きその他）を作る私は、何か一日中台所に立っている。いくら「台所は女の城」とはいえ、食べることのみで、さして美しくもない「城」に幽閉されて年老いてゆくなんて、まっぴらご免だ。

しからば、「この時間と労力を外で働いたら如何ほどになろうか？」なんてことは、思いますまい。老母と同居してもらったんですから。でも、私もカワイソーなのだ。世の奥様方のように、趣味や習い事で「何曜日の何時」の約束ができない。全てご主人様のローテーションに合わせて、家にいなければいけないのだから。「チキショウ！」と何度思ったことだろう。でも、おっとどっこい、十年間の籠城生活のお陰をもって、ケーキ作りはマスター、パン作りもこの間からチャレンジ、これが結構上手くできるのです。ケーキ焼いて、パン焼いて、ワイフに投稿して、元気印のお母さんでキメたいと思っています。

タイムショック・セミ小ばなし

滋賀県大津市　中野　桂子



一九八六年夏のある日、午後六時成田発のルフト・ハンザ機DC10は、定刻五分前に離陸した。「まだ五分あるのに、もう――」と言うと、隣席の娘は「乗客が全部乗ったら出発するんや」と返してきた。「航空機は定刻どおり出発しない場合があります……」と、ガイドブックに記されてはいたけれど、それを「おくれる」意味にしか私は読みとっていなかったのだ。

さて、日本時間午後十一時ごろ、南回りの機はバンコックに到着し、乗客は空港ロビーに出る。現地時間は午後九時ごろ、アジア、アラブ、ヨーロッパetc――の人々とともに、機の乗務員の交替を待つ。「どのくらい待つのですか？」と、日本交通公社の添乗員M氏に訊くと、「一時間以上待つのでしょうな。しかし南回りは大変ですな」と言う。南回りに乗せたのはあんたのとこやないか。ここから次のカラチへ四時間、フランクフルトへさらに七時間、夜明けはチェコ・スロバキアのあたりだという。

ツアー同行者は八名、私と娘以外はヨーロッパ旅行のベテランばかり。異国人の中で一時間以上時間待ちする初体験は、なかなかしんどいことなのに、その一時間をとっくに過ぎても、「ルフトハンザ〇便……」のアナウンスも電光板の指示もない。「――まだ添乗員が到着していないそうですよ。交通ラッシュで」と、誰かが言うと、娘が「バンコックの交通渋滞はひどいからなあ。まあ先が見えんのとちがうか」などと加える。彼女はこの辺りまでは、東南アジア研究者として訪れているので、自信たっぷり。

「あーあ」と私が、ため息をつくと、「あんなあ、ここは日本とちがうんやで。現地人はこんなこと平気なんや。出発できるときに出発するんやで。飛行機みたいなもん、飛行中にいくらでも時間の調整ができるんやから。日本だけやで、セコセコと時間時間言うのは」と叱られた。ああそういうことなんやなあ。

この旅行で東独を訪れたときのこと、あるホテルの近くに百貨店があるときき、午後六時に閉店するということなので、まだ一時間あるからとゆっくり周囲を見物しながら、三十分前にそこへ到着。面白い小物をみつけてそれがほしいというと、ダメだという。我々東洋人には売らんのか――と一瞬思ってしまったが――何の、今日はもう売らないのだそうだ。閉店までにまだ三十分もあるのに、品物を目の前において何たることか！　よく見ると、周囲の人たちは流れになりながら、出口へ向かっている。そうか、ここは社会主義国、いうならば「売れても売れんでも、自分の成績、収入に関係なし」。閉店時間とは、

従業員が帰りの身仕度を終えて、職場を出る時間なのであった。

娘二人は東京にいて、それぞれ勉強しているので、一つ屋根の下でも生きる時間帯はばらばら。私が上京して二人の衣服の買い物などするときは、「〇時、新宿アルタ前」てなことになる。そんなとき、いつも少々おくれるのは下の娘である。私は昔から五分待たされると腹が立つ性分で、コワイ顔を、やってきた娘に向けると、「五分くらい待っててくれると思ってるよ」とくる。そこで私、「三十五年間仕事してきて、自分で『おくれてもいい』などと思って、時間におくれたことは一度もない」などと言ってしまう。すると彼女いわく。「私はネー、周囲の人が締まっとらんから（美大だからか？）いつも時間におくれるの、当たり前になってしもうた」さいか——。

公務員やりすぎたなあ。今後はあまり「時間」で自縛せんとこう——と、嘱託の身でありながら、いまなお時間厳守で勤務をしているのです。

ランドセル

大阪府　匿名

長男が、いつのまにか小学校入学の年齢になった。

学習机はテレビのコマーシャルを見て、「あれがいい」とはっきり決めているようだが、ランドセルのことは念頭にないらしく、一度も口にしたことがない。

どんなランドセルを持たせてやろうか、とパンフレット片手に考えるのだが、どれもこれもみんな同じに見えるので、これは夫にまかせるとして、ひとこと「軽いのにしてね」と言っておこうと思う。

軽いランドセル。できるだけ軽いランドセル。

私が小学校へ上がる前、祖母が私を二階へ呼び、新しいランドセルを見せてくれた。

そのときのことを今もはっきりと覚えている。

鼻を突く皮の臭い。ピカピカ光る金具。どこを見てもなじめそうにない新しさばかりがあった。

そのころの私は新しいものが嫌いだった。

新しいものを身につけたときの何ともいえない照れ臭さと奇妙な緊張感は、どうしても我慢できないものだった。

幼稚園の通園カバンも、姉のお古のすり切れたビロードのじゃ可哀想だと、祖母が新しいのを買ってくれた。目玉がコトコト動く犬のついたそのカバンを嫌がって、泣いて、泣いて、とうとう一度も提げなかった。

秋祭りの晴着用にと、叔母が畳表の立派なぽっくりを買い与えようとしたとき、私は鶴

の絵が描かれた豪華なぽっくりがどうしても嫌だといって、一番安物の赤い下駄にするといってきかなかった。

新しいランドセルにもどうしようもない嫌悪を感じたのだが、泣きわめいたりはしなかった。素直に背負って、肩ひもの具合を直してもらったり、金具の止め方を教えてもらったりしていた。

そのくらいの分別はつくほどに成長していたのかもしれないが、敏感な私は、祖母が私と同じように少しもうれしそうでないこと、何かが起こるだろうことを察していたのだった。

ランドセルの操作を二度し終えて、祖母の顔を見上げた。

「学校へ行って、友達にお父さんは？と聞かれたら、死んだといいなさい」

祖母は、いつも優しいおばあさんは、私の見たことのない顔をしてそう言った。

太い梁がむき出しで、窓のない二階の部屋で、一人でランドセルの止め金をかけたりはずしたりしながら、父という人のことを、生まれて初めて考えていた。

最初からいなかったから、とりわけ不自然とも思わなかったが、父という人が自分にもやはりいて、そして、生きているのだと——。

ランドセルは、三月生まれの小さな私には重かった。

おばあちゃん子で、我儘いっぱいに育った私は、幼稚園に数えるほどしか行っていない。いつも、泣いて逃げ帰ってしまうのだった。

だが、父という人の存在（不在）が、ランドセルと一緒に背中に負わされたとき、その重さのために、自分を制することができるようになった。

私は毎日小学校へ行った。

小学校は、今思い出しても鳥肌が立つほどおもしろくない所だった。

一年生の通信簿に（無口すぎる）と書かれていた。

もうあれから二十四年が経った。

子供は軽いランドセルをしょって、ますます旺盛に憎まれ口をたたいたり、反抗したりしながら、にぎやかな一年生になることだろう。

〝わいふ〟との出会い

東京都大田区　荒井　照子

新聞で〝わいふ〟の存在を知った。

ちょうど投稿欄にはじめて採用され、続いてもう一度と自分の文章が活字になってうちょうてん、もっと書いてみたいと思っていたところだった。さっそく一年分をお願いして届いたのが二〇〇号というのも区切りがよかった。

読みだしたらおもしろくてやめられず、料

理をしながらまで読んでいてご飯が遅くなって、家族の者に白い目で見られた。でも娘ものぞいて、「わりとおもしろいじゃない。ママもどんどん書いてみたら」と言う。うーん書こうとなるとなかなかりきんでしまって、思うようにできない。

そうこうするうちに、二〇三号の特集がぴったり。夫と二人でクリーニング店を営むれっきとした自営業主の妻なる私、いきおいこんで書きはじめたが、なんだかぐちっぽくなってうまくゆかず、放り投げてしまった。どんな方のがでるかと心待ちにして、お二人の投稿をじっくりと読ませていただき、なるほどと感心するばかり。まだまだ修業が足りない。もっと本を読んで〝わいふ〟を参考にして勉強していきたい。

二〇三号の大阪市西成区の内木場周子様、私もひつじ年の四十三歳、双子座です。よろしかったら文通で〝わいふ〟をはさんでお話ししませんか。今流行の絵手紙でも楽しいと思いますが。自営業の主婦の生活を知るのもおもしろいと思います。いかがでしょうか。

庶民のテレビ出演

神奈川県横浜市　酒井智恵子（57歳）

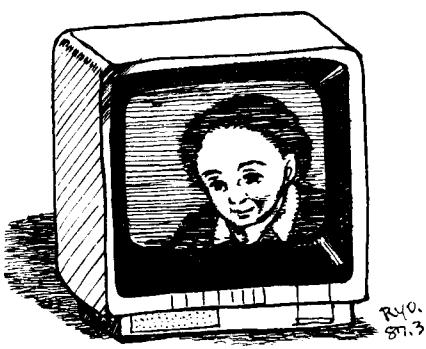
ことの起こりは昨年十一月のある朝、NHKおはようジャーナル内のお知らせをきいたことに始まった。それは更年期に悩んだ人、それを乗りこえた人の体験記を募集していた。いつもは聞き流すこの手のものに、何故かこのときはピーンときて、その場で自分の経験を便箋四、五枚にかき連ね送った。

ほどなくNHKから電話で明日取材に行きますという。十一月十一日の夜のことだった。

やって来たのはディレクターK氏（女性）と重そうな機材をかついだカメラマンと助手だった。居間に入ると一瞥し、椅子を手早く動かし、まぶしいライトを左右に取りつけ、カメラをセットした。その日はたまたま主人が家にいた。前夜からNHKが来たら俺はパチンコ屋に行くといっていた主人も、ディレクターのぜひご意見を伺いたいの説得に「お前どんなこと書いたんだ」といいながら横に座った。

実際のところ、私は何をかいたのか詳しくは思い出せなかった。「私の手紙あります？」ときくと、Kさんはバッグからそれを取り出した。もう一度目を通し「主人に見せてもいいですか？」ときくと、私の手から急いで取り上げ、ご主人が知らないほうがいいんですよとにやっと笑った。

その手紙には、更年期の最中、子育てという生き甲斐をなくした私は次々と病気をしたこと（生理不順はもちろん、頭痛、度重なる膀胱炎、ヘルペス、顔面神経マヒなど）、肉体



的に参っているところに主人が「もう女じゃなくなるのか」といい、つい心まで病みノイローゼ気味であったこと、そのころキリスト教に出会い、神の愛に拾い上げられ「あなたの隣人を愛せよ」のみことばに動かされ、それまで自分の内側にだけ向いていた目を外に向け、ボランティアとして活動したのと同時に、症状がきえた。今はピンピンしてます、とかいたのであった。

インタビューが始まった。私も初体験のことで何を話していいやらと思っていたら、そこはディレクター上手に誘導してくれる。横には主人、場所は自宅、お客様とお喋りしている気さえしてきた。ただ一つ気がかりだったのは、あのことだった。どうしようと思っていた矢先、相手はそれを追及してきた。「あなたが更年期のときご主人は何といわれましたか？」開き直った私は「もう女じゃなくなるのか」といわれショックをうけたと包みかくさず返事をした。最後に主人が目をつぶったり開いたりして苦しそうに「妻がそんなに悩んでいるとは知らなかったなあー」としめくくってインタビューは終わった。

それから間もない十一月十七日十八日の二日間の「更年期のQアンドA」に私達の姿が写った。こっちもびっくりしたが驚いたのは知人や親類だった。電話のラッシュが始まった。

本当にあなた方夫婦？と半分信じられない人、声がするからふりむくと、急にあなたが大写しになって腰がぬけたという人、カメラでとるときドーランぬったときく人、なかにはテレビに出る方法教えてという人、いろいろだった。札幌や信州から手紙や電話がきた。今でも買い物にいく途中「テレビ見たわよ」と声をかける人さえいる。

わいふの田中編集長や和田さんはよく出られるけれど、ただの一庶民が突然テレビに現われたのには、皆びっくりするみたい。だれでもちょっと出てみたいテレビに写ったのはわいふに入っていたからだ！　きっと！　なぜならちょいと書く習慣が身についたから。

（え・田井亮子）

お友達に〈わいふ〉をおすすめください

新しい読者をご紹介下さった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介下さるごとに、誌代プラス送料とも一回延長。
（六人ご紹介下されば、翌年の誌代・送料とも無料になります）

〈わいふ〉年間分をプレゼントにお使い下さい

●ご結婚のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。
お申込みいただけば、まず新読者にきれいなプレゼント・カードをお送りしておしらせし、以後毎回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介と同様に、お一人につき一冊分延長させていただきます。

次号投稿募集

▼特集テーマ原稿

二〇六号の特集テーマは「親子の危機・わが家の場合」です。

親となり、子となるが人間の運命のはじめですが、親子、とくに母と子は、子どもが幼いうちは本当に楽しい関係にあります。

ところが子どもはいつまでも、親のいうことをきいてはいません。ある日親にそむく日が必ずやってくる。そのとき親と子の間に走る亀裂の深さは筆舌につくせません。

十歳になれば奉公に出され、まだ可愛いうちに必ず親の手もとから離された昔の親子には、こうした危機はなかったのかもしれません。

危機は多くの場合、進学や就職や結婚など、人生の大きな選択に伴ってやってくるようです。いやもっと身近かな、友だちの選択や着るものの好みからくることもあり得ます。今日ではたいていの場合、弱腰なのは親のほうですが、いつもそうともかぎりません。

それで今回は、あなたの場合、いつ、どんな理由でそうした母子（父子でもけっこう）の深刻な対立や分裂が起ったかをレポートしていただきたいと思います。あなたと子どもの間、あるいはあなたと自分の親との間、どちらでもけっこうです。過去、現在進行形、どちらでも。

枚数は四〇〇字で十五枚以上二十枚まで。

▼ワンポイント情報

今回は「うちの亭主のおふくろの味」です。

ひところ、ほうれん草のおひたしや切り干大根の煮つけ、肉じゃがなど、「おふくろの味」が売りものの小料理屋がはやったことがありました。

でも本当に、それが「おふくろの味」なのでしょうか？　あなたの夫がなつかしがって食べたがる食べものは実際のところ、どんなものがありますか？　あなたに作れるかどうか、ということも含めて書いていただければと思います。枚数四〇〇字ていど。

二つとも締切は四月二十五日です。

△氏名、住所を秘密にしたい方▽

誌上匿名は自由です。原稿への書き方は投稿規定をごらん下さい。

さらに住所（県、市、町）もあきらかにしたくない場合は、その旨原稿の最初に（らん外にでも）お断り下さい。

「地域の会員を知りたい」というお問い合せがときにあります。その場合も住所氏名を知られたくない方は、あらかじめ編集部へお申出下さい。

「この文を書いた方に連絡を取りたい」という問い合せには、書き手の方にハガキでご連絡し、直接返事をしていただいています。

△仕事をしたい方へ▽

以前首都圏内の読者へ（どんな仕事がしたいですか）というアンケートを、お送りしたことがありました。その後の新会員、以前と状況が変って、働けるようになったという方にも、ご希望があればお送りします。編集部までご一報下さい。

わいふ・投稿規定

書くもヨシ
書かぬもヨシヨシ

ドンドン書いて！ドシドシ送って！グイグイ載せます！

●定期購読者になればどなたでも投稿できます。誌上匿名は可。ただし原稿には住所氏名を明記すること。（無記名のものは受け付けません）

●次のコラムへご投稿をどうぞ！

・**うちのワルガキ**　子どもとその周辺の話題について、どんなことでも。

・**オットどっこい**　夫について、ノロケ、珍談、不満、ケンカ、何でも。

・**ナウい熟年**　今どきの若い者へ、一言いいたい方のためのシルバーシート。若い方がそれを読んで、文句言いたい場合もどうぞ。

・**ファミリー・イン・ブルー**　家庭内、親戚づきあいなどのトラブル、よそでは言えないホンネのはけ口に。

・**マン・ウォッチング**　家庭で、職場で、PTAで、その他どこでも、あなたの観察したヒト科男属の生態を。

・**職場は多面体**　あなたの職場レポート。フルタイムはもとより、パートでも内職でも、切実な体験や悩みなど、ぜひ寄せて下さい。

・**親のホンネ**　親、ことに母親ほどつらいものはない。子育ての全責任者、何でも母親のせいだと言われ……でもこっちにも言いたいことありますよ。母親だってニンゲンだ。言いたいこと言おう。

・**男性専科**　敵に塩を送る心意気、男のいいたい放題のページです。

・**マスコミむしる**　新聞、雑誌、テレビ。ずいぶんどうかと思うこと、腹の立つこと、被害を受けたこと……いろいろあるんじゃないですか。遠慮ない告発を！
　強いマスコミに弱いミニコミからなぐり込みかけよう。

・**マジの発言**　まじめは「わいふ」の本領なんですねー。
　あなたの主張や切実な体験をお寄せください。

・**対話のページ**　本誌の投稿や記事についての感想、反論など。

・**女の道楽**　あなたがやってるホビーについて。

・**観たり聴いたり**　映画、演劇、音楽会

展覧会などの感想を。

・**狂育ニッポンどこへ行く**　日本中狂ったみたいに教育がさかん、でもそのわりに、変チクリンな若者や子どもが増えていると思いませんか？　新人類の若者や子どもたち、あるいは狂師たちの生態報告をどうぞ。

・**生きてます活字人間**　読んだものについて。

・**遊びましょ**　こんなとこ行ってみた、こんな遊びしてみたなど、楽しかった話を。費用も忘れずにね。

・**わいわいガヤガヤ**　どこにも当てはまらないものを押しこむスペース。

・**エッセイストクラブ**　ずいひつのよさをたっぷり味わわせてくれるよい文章を。この欄だけ千六百字まで。

・**ワンポイント情報**　一つのものまたは事柄に関する読者の情報の徹底収集。テーマはそのつど設定します。

●**以上いずれも八百字まで。オーバーしても内容がよければ掲載いたします。**

締め切り偶数月二十五日。

×

●**持ちこみ原稿**　詩、小説、評論、旅行記、ルポルタージュ、どんなジャンルのものでも。掲載分には薄謝を贈呈します。枚数自由。締め切り日はなし。他の出版社などに推せんもします。自費出版も引受けます。

●短い投稿はハガキでもけっこうです。気楽に投稿して下さい。

●絵・カット・イラスト・写真などの投稿も歓迎します。

●ご自分の投稿に、イラストや写真が用意できる方は、ぜひそれも合わせてお送り下さい。

×

●投稿は原則として一応編集部で選択します。できるだけ多くの方の投稿を公平に掲載することをめざしています。

●編集部・編集長へのたよりで掲載ご希望でないものは必ず「私信」とお書きそえ下さい。

●年齢をお書きそえになりたい方は、名前の後ろにアラビア数字でお書きこみ下さい。

●匿名またはペンネームは投稿原稿の文頭にお書き下さい。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承下さい。

●ハガキ以外の投稿は必ず原稿用紙にお書き下さい。原稿用紙の使い方はルールを守って下さい。

●ヨコ書き原稿は書き直すことになるので必ずタテにお書き下さい。

●原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送り下さい。

×

●「プライベート・ルーム」（読者のための相談室）へのご投稿をお待ちします。約千二百字。電話でのご相談でも結構です。

●二重投稿は堅くお断りいたします。

編集だより

●「ある日曜日・夫婦の会話」には、予想以上にたくさんの投稿が集まりました。

ただ呼びかけの書き方がわるかったのか、何か小説のようにかっこいい会話に仕立てられているのもあったりして、「ありのままの記録」には遠いものがあったのは残念です。また「わいふ」編集部の周辺で、「うちはほとんど会話がないから書けないわ」というお声があったところから見れば、会話の少ない家庭ではご投稿下さらなかったらしいのも物足りないところでした。

●「ワンポイント情報」にはご投稿ゼロ。郷土料理は死に瀕している?! それとも〝わいふ〟の読者は料理ぎらいなのか……。

●最近、ご投稿の数がたいへんふえて、誌上にのせきれなくなったため、〝没〟扱いの原稿もふえてきました。どれぐらいの数が没になっているのか、知りたい方が多いと思い、緑千恵子さんのご投稿へのお返事という形で一二四ページにのせました。ぜひお読み下さい。

ご投稿のスタイルもさまざまで、毎回長い持ち込み原稿を立てつづけに下さる方、三枚程度のを五篇も送ってくる方、と集中豪雨型もあれば、長年にわたってポツポツと、というさみだれ型もあります。お一人一号につき一篇しかのせられませんので、集中豪雨の方にはお気の毒な感じですし、選ぶ側としても、しんどいので、なるべくなら一度に一篇だけをお送り下さい。

●没原稿への反応もさまざま。めげずに「出してくれるまで書き続けます！」とそのうち本当によい原稿を送って下さる方（これは嬉しいです！）もあれば、腹を立てる方もあり、一度没になってヒカンしてすっかり沈黙してしまう内気な方も。でも何よりも「継続は力なり」ではないでしょうか？

●ご投稿には必ず冒頭に本名を書いてからペンネームを並べて書いて下さい。二通以上のときも、必ず一通ごとにお忘れなく。まちがいのもとになりますので。どうぞよろしく。

□購読申込は……

ハガキか電話でどうぞ。すぐ本に振替用紙をそえてお送りしますので、折返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。二冊以上まとまりますと送料が半額以下になります。

WIFE

（隔月刊）205号

1987年 5月1日発行

印刷・浩文社印刷

定価 450円

（年間購読料送料共3600円）

発行所・㈱グループわいふ

編 集・わいふ編集部 〒162

東京都新宿区市ケ谷加賀町2－5－23

TEL（03）260－4771・4773

郵便振替 東京5－110430

銀行口座三菱銀行神楽坂支店

普通預金 052－4348909

□購読中止は……

かならずお申出ください。送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れてもひき続き送本しています。お申出がないと、お送りしてしまうので、ぜひハガキか電話を。

じゅうがつ社の新刊

ふるさとの料理 むかし噺

谷村寿子／中川紀子

いつも庖丁の音がしていたころの、においと香りと温もりのあった料理と人のはなし——

〔内容〕
- おすしとおへんろさん
- 米への願いをかけた卯の花
- 昔の台所と二合半桝　など

定価　1500円

高齢化社会年鑑 '86～'87

監修・全国高齢化社会研究協会〔内容見本呈〕

迫りくる超高齢化社会の全体像を、最新のデータで提示するわが国唯一の年鑑。B5判美装本 定価9800円

あなた生活を科学してますか

坂下 栄 著——知っておきたい洗剤の知識

女性科学者が、CMだらけの生活にひそむ危険の数々を立証して、家事の見直しを提言する。 定価1400円

発売 新時代社　東京都千代田区神田神保町1-44　☎03(293)4884　振替・東京0-13581

エクリ 暮らしのムック 3

生活クラブ就職情報

仕事からみた生活クラブ生協

■今、生活協同組合は
■共同購入のなかの仕事とは？
■生活クラブ生協に関わる、さまざまな仕事と働く人を紹介するなかから、働くことの意味をとらえかえします。

好評発売中
エクリ——暮らしのムック
1 暮らしの探検 水と食べものガイド
東京湾食べものガイド——輸入食品・生鮮食品見て歩き　おいしい水を求めて　バイオは食べ物を変えるか　環境へ広がる農薬
2 暮らしの探検 生活年鑑1987
ひとと暮らし、この1年——入院、ひとりぐらし、妊産婦、働く女性、小学校教師
暮らしの動き——リサイクル、原発など

- 集中配送システム——総合デリバリー
- 申込みから配達までのコンピュータ管理
- 共同購入品・野菜・豚肉の配達と受取り
- ワーカーズ・コレクティブで働く組合員
- お葬式の「共同購入」——生協の共済制度
- デポー、個人班——新しい共同購入開始
- せっけん工場の廃食油回収
- 生協から地域へ——フリースペース

それぞれの現場を体験し、働く人の声を集め、生活クラブ生協の全体像をとらえます

"生活クラブ生協版・仕事・ガイドブック"

4月5日発行　定価550円(送料200円)　A5判　112ページ
ご注文は最寄りの書店（地方小出版流通センター扱い）または直接ご連絡を。

生活クラブ生協連合事業部・発行
〒156 東京都世田谷区宮坂2-26-17　☎ 03-706-0039

わいふ二〇五号　一九八七年五月一日発行（隔月刊）

株式会社 ミネルヴァ書房
〒607　京都市山科区日ノ岡堤谷町1
☎(075)581-5191　振替京都 2-8076

ガイドブック

安くはいれる有料老人ホーム

〔入居金〇～一千万円
生活費は年金程度〕

わいふ編集部編

A5判美装カバー250ページ・定価1400円送料300円

有料老人ホーム数々あれど、
新聞広告によく出るようなホームは、
素敵だけれど高いのが玉にキズ。
そう思ってため息ついているあなたに打ってつけ。
毎日のくらしのやりくりに頭を悩ます主婦が、
買物上手のセンスを生かしてまとめたガイドブック。
ン千万円のホームはお呼びじゃない。
こちら一般大衆、ただのわいふ。
フツー感覚の主婦が、
クチコミと足をたよりに、
老後のついのすみかの情報を集めました。
自立の目で見てたしかめて、
老後生活を自分で設計する、
「わいふ」たちの旺盛な自立精神に乾杯！

——推せんの言葉　樋口恵子

〔内容〕全国72カ所地域別全ガイド＋軽費老人ホームガイド
（下の組見本の内容の他に見学記、献立・料金表、利用規定等）

定価　四五〇円

雑誌09859-5